

ヲ待テ進退セシムル者ナリ

第一章 徴兵官負免職掌

第一條 徴兵使

陸軍中佐或ハ少佐ノ内一人之ニ任ス府縣ニ出張シ知事令又ハ參事ト議シ徴兵ノ諸務ヲ總管ス

但時宜ニ由リテハ副使ヲ遣ハシ代理セシム

第二條 徴兵副使

陸軍大中少尉ヲ以テ之ニ任ス人員ハ巡廻府縣ノ大小ニ應シ正使ヲ佐ケ議官及ヒ軍医副以下ノ医官ト共ニ區邑ヲ巡行シ徴兵規則内ノ事件ヲ決議シ抽籤等ノ事ヲ掌ル

第三條 書記

陸軍下士或ハ軍屬十等以下十五等迄ノ者ヲ以之ニ任ス人員ハ二人乃至三人トス徴兵使ノ諸記録ヲ掌ル

第四條 議長

府縣ノ知事令參事ノ内一人之ニ任ス徴兵ノ事ニ付審断判決ノ事ヲ掌ル

第五條 議官

屬以下十五等迄ノ者ヲ以之ニ任ス人員ハ徴兵副使ノ數ニ准ス徴兵副

陸 ○條

使ト共ニ區邑ヲ巡行シ議長ノ職掌ヲ輔翼ス

第六條 議員

區長或ハ戸長ヲ以テ之ニ任ス人員ハ大抵其検査ナル所ノ區數ニ倍ス公文ヲ布達シ民情ヲ上伸スル事ヲ掌ル

第七條 軍医一人

徴兵使ニ從ヒ兵下シ身材骨格兵役ニ適スルヤ否ヤヲ検査スル事ヲ掌ル

第八條 軍医副ヨリ試補ニ至ル

徴兵副使ニ從ヒ區邑ヲ巡廻ス職掌軍医ニ同シ人員ハ大抵徴兵副使ノ數ニ倍ス

第九條 備医

府縣ノ擬ヲ以テ命ス人員ハ其検査スル所ノ區數ニ准シ軍医ニ從ヒ其土ニ生スル所ノ疾病ヲ具狀シ兼テ検査ノ事件ヲ記録ス

第十條 筆生

府縣ノ撰ヲ以テ命ス其人負適宜ニ任スト雖大抵議員ノ數ニ準シ検査抽籤中ノ件々ヲ記録スル事ヲ掌ル

第十一條

徴兵使并ニ議長軍医ハ各府縣ニ滞在シ徴兵ニ関ハル諸務ヲ總裁ト書記之ニ屬ス副使議官軍医副以下組ヲ立テ、各區ニ分行

スル者トス

第十二條 徵兵諸官ハ一歳ノ徵兵事務ヲ竣ハレハ悉職ヲ解ク者トス

第二章 徵兵使巡行并ニ檢査前事務

第一條 徵兵使巡行ハ二月十五日ヨリ始メ第一章中第一條第二條ニ

揭示シタル陸軍武官并ニ軍医等一行ト爲リ府縣ニ出張シ地方ノ諸官ト合議シ徵兵署ヲ設ケ常備ノ定員ヲ充タスコヨリ免役願出ノ者等總テ徵兵ニ關スル事務ヲ管理ス其出務ノ時間ハ大抵本省ニ准スト雖速ニ事務ヲ竣ハルヲ要スルヲ以テ時刻ヲ變易スルキハ時宜ニ由ルヘシ

第二條 代人料上納兵役免除ヲ願出テシ者ハ第六章中ハ第十五條第十

六條ニ揭示シタル書面ヲ以テ爲ト取亂シ紛レナキ者ハ聞届クヘシ

第三條 府縣ヨリ陸軍省ヘ差出シタル徵兵連名簿ヲ照シ當府縣ニ於

テ當年徵兵幾人其内兵種相當ノ人負及ヒ補充ノ員數ヲ算定シ又免役連名簿并ニ箇條書取亂シ中ニ就テ學徒ハ學校證書及ヒ科目免許書等差出タサセ點檢スヘシ

第四條 徵兵ニ採ルベキ者ハ免役規則ニ適スル者ヲ除クノ外如何ナル苦情之アルトモ決シテ聞届クヘカラス

第三章 常備兵免役概則

第一條 身ノ丈五尺四尺未滿ノ者

第二條 羸弱ニシテ宿病及ヒ不具等ニテ兵役ニ堪ヘサル者

第三條 院省使廳府縣ニ奉職ノ者(但等外モ此例ニ准ス)

第四條 陸海軍ノ生徒

第五條 文部工部開拓其他ノ公塾ニ學ビタル專門生徒及ヒ洋行修業ノ者并ニ医術馬医術ヲ學ブ者教導誡補ノ者(但教官ノ證書并ニ何等ノ科目ノ免許書アル者(科目ノ等未定))

第六條 一家ノ主人タル者

第七條 嗣子并ニ承祖ノ孫 (但養子約束ノミテ未実家ニ在ル者ハ此例ニ非ス)

第八條 獨子獨孫

第九條 罪科アル者(但除族并ニ懲役実決一ケ年以上ノ刑ヲ蒙リタル者)

第十條 父兄存在スル共病氣若クハ事故アリテ父兄ニ代リ家ヲ治ル者

第十一條 常備兵在役中ノ者ノ兄弟

第四章 徵兵檢査

第一條 徵兵檢査定日ハ前以陸軍省ヨリ各府縣ヘ布達シ區括リ日割

リヲ以一日幾人ト定メ區長或ハ戸長ノ内順序ニ召連レ出ツヘシ

陸 〇條 徵兵使巡行ノ時節ニ至レハ府縣廳ヨリ各區ニ左式ノ罰紙ヲ

渡シ本年徴兵タル者ニ一枚ツ、渡シ當人ヲシテ朱書ニ示シタル如ク姓名産國任居親ノ名或ハ兄叔伯總一テ戸主タル者ノ名本年月日誕生年月日其他罪紙願號ノ下ニ父母ノ存亡ハ勿論同居ノ祖父母兄弟妻子及ヒ氏神宗門等書載セシメ人別表ト稱シ檢査ノ時各個持參シ軍医ニ渡スベシ

區々ニ渡シタル罪紙ノ殘ハ徴兵事務竣ハルノ後府縣一返納スベシ

第三條 徴兵ノ体算檢査ハルルハ徴兵副使議官各一名列坐ス檢査ノ件々ハ總テ軍医ノ專任タルベシ

第四條 徴兵檢査ノ席ニ出ツルルハ各個人別表ヲ所持シ軍医ニ渡シ軍医ハ書記ヲ掌ル者ニ渡シ姓名ヲ檢査簿ニ留メシメ身体骨格檢査ノ件々ヲ記セシム

第五條 檢査呼出シノ時ニ病氣ニテ出席成リ難キ者ハ時トシテ其家ニ就キ診断ノ上一時或ハ固着等ノ病質ヲ糺シ一時病氣ノ者ハ翌年ノ徴兵ニ廻シ固着ノ者ハ免役規則宿病ノ者同断タルベシ

第六條 檢査呼出シノ時ニ父母ノ喪ニ罹リ未三週間ヲ過キザル者或ハ父母ノ重病及ヒ一家ノ安危ニ係リ一時止ムヲ得サル事故出來ノ者ハ夫々詳細書及ヒ戸長ノ証印ヲ以テ願出ル者ハ翌年ノ徴兵ニ廻スベシ

陸

〇條

但翌年ニ廻スベキ徴兵ハ府縣毎ニ別簿ニ認メ徴兵署ノ檢印ヲ押シ府縣廳一留置キ當冬ノ徴兵連名簿ト共ニ陸軍省ニ差出スベシ

第七章 抽籤并ニ讀算試驗

第一條 身体檢査終リタル後檢査簿ヲ案シ兵役ニ適スベキ者ヲ點檢シ府縣毎ニ常備抽籤召集ノ為其定日及ヒ場所共前以布達スベシ

第二條 抽籤ノ場所ハ府縣廳所在地或ハ管内便宜ノ地ヲ以テス

第三條 抽籤ヲ五種ニ分チ其身材ニ從ヒ歩騎砲工輜ノ籤ヲ抽カシム

第四條 本年常備ノ缺員ヲ補フ爲補充兵ニメ九十日ヲ期トシ常備一ケ年ノ後徴員二ノ一以内ノ員數ヲ常備籤ト同時ニ抽カシム

第五條 抽籤ノ法ハ籤丁ノ調一左式ノ如ク籤札ニ其員數丈ノ番号ヲ記シ籤箱ニ納リ籤簿方ノ側ニ置キ區分ケ或ハ郡分ケニシ混雜セサル様一人宛之ヲ抽カシメ簿籤方ハ始終籤簿ニ對シ抽籤ノ正不正ヲ鹽シ抽キ擧ケレハ其番號ヲ自高聲ニ唱ヘシメ籤札ヲ受取り籤簿ニ姓名番號ヲ記シ復之ヲ當人ニ返ス

第六條 抽籤當日病氣ノ者ハ父兄親族又ハ戸長ヲ以代人トス

第七條 抽籤以前ニ常備幾人補充幾人及ヒ籤丁ノ総員幾人ト白紙ニ

大書シ籤丁ヨリシテ之ヲ知ラシムベシ

第八條 抽籤終リ常備及ヒ補充ニ當リタル者ハ書翰往復算術等出來

得ルヤ否ヤヲ試ムヘシ

第九條 書翰先ニ算術ノ試験ハ筆生ノ内算術ヲ心得居ル者ヲ撰任シ

試験場ヲ設ク其仕法ハ二三行ノ翰牘ヲ讀ミ易キ様三四枚認メ并ニ

十露盤等一置キ一人宛讀文算術ノ内出來得ルヤ否ヤヲ問ヘ出來得

ル者ニハ讀文ハ右翰牘ヲ讀マシメ無滞讀ミ得ル者ヲ上等トシ二字

以上誤リアル者ヲ下等トス算術ハ除法以下誤リナキ者ヲ上等トシ

誤リアル者ヲ下等トス

第十條 試験全ク終ルノ後籤簿ヲ照シ人別表ト引合セ姓名住居其

他トモ左式ノ如ク厚紙長ク五寸幅三十ノ割符ニ書載セ籤簿ニ引合

セ割印ヲナシ番号並ビニ服役期年ヲ書加一籤簿順ニ呼出タシ籤札

ヲ出タサシメ相違ナキモノハ籤札ト右番号割符ト引替ヘ相渡ス

ベシ

第十一條 補充役ヲ命セラレタル者ハ其家ニ歸居シ常備缺員ノ節ハ其

鎮臺ヨリ籤順ニ布達シ何時ニテモ入營ナサシムヘキニ付服役中其

管内ヲ出ルヲ禁ズ

但本年常備兵入營期限初日ヨリ算シ九十日目ノ其日迄

ニ常備入營ヲ命セラル者ハ即除役ト心得ベシ

第十二條 補充ヨリ常備軍ニ命セラレタル者ハ本年入營ノ月日ニ拘

ラス總テ自分同年ノ常備兵入營期限初日ヨリ三ヶ年ノ期ヲ保ツベ

シ

第十三條 常備軍滿期ノ者ハ後備軍ノ番號割符ヲ渡シ而常備役ノ番

號割符ニ滿期ノ檢印ヲ押スベシ

第十四條 第一後備軍滿期ノ者ハ第二後備軍ノ番號割符ヲ渡シテ第

一後備役ノ番號割符ニ滿期ノ檢印ヲ押スベシ

第十五條 第二後備軍ノ番號割符ヲ受ケ服役ニケ年ノ後ハ第二後備

軍ノ籍ヲ除セラレシ者ト心得ベシ

第十六條 徵兵使ハ各府縣ニ於テ徵兵事件全ク竣ハルノ後徵スル所

ノ兵員ヲ精算シ兵種ヲ分チ左式ノ表ニ各個持參致シタル徵兵人別

表ヲ寫シ取り身体檢査表讀文算術試驗簿及ヒ籤番號ヨリ相貌其他

題号ノ下ニ悉書載セ兵卒明細連名籍ヲ認メ常備補ヲ區別シ一府縣

ニ纏メ各二部ヲ作り陸軍省及ヒ所管ノ鎮臺ヘ差出タスベシ(但鎮

臺ヘ渡ス兵卒明細連名籍ハ籤簿ヲ添ヘ四月十五迄ニ差廻スベシ

陸 ○條

別徴

第十七條 徴兵出席ノ名簿ヨリ代人料上納名簿免役其他種々ノ願書及ビ届書區長戸長ノ取調ニ證書總テ徴兵ニ関スル書類ト一切兵卒明細連名籍ト共ニ陸軍省ヘ差出スベシ

第六章徴兵雜則並ニ校方

第一條 常備籤ヲ抽キタル徴兵ハ四月廿日ヨリ五月一日迄ニ入營致スベシ其營所迄ハ府縣毎ニ區括リニシテ區長或ハ戸長ノ内召連レ出ツベシ最管所ニテハ籤ノ番号ヲ目的トシテ入營ナサシムベキニ付廻語ナキ様ニ注意スベシ尤入營迄ノ諸入費ハ總テ徴兵入費概則ニ照準シ賜ハルベシ若事故アリ入營遅緩ニ及フキハ其事故ヲ生スル所ヨリ辨スベシ

但書中區括リト稱スル者ハ區ノ大小人口ノ疎密ニ由リニ區或ハ三四區括リ總テ府縣ノ便利ニ從フ

第二條 籤ノ番号ハ服役中ノ目的タルベキヲ以各個下寮ニ所持致スベシ

第三條 病氣或ハ事故出來期限通リ入營相成リ難キ者ハ其段詳細ニ書認メ區長戸長及ビ其病氣事故ニ係リタル者ハ証印ヲ取リ其筋ヲ經テ至急ニ其鎮臺ヘ届出ツベシ

第四條 常備軍服役在營中其身元轉居スルキハ其父兄或ハ親族ノ者ヨリ直ニ本人ニ通報シ本人ヨリ自己所属ノ下士ヘ届出ツベシ歸休中ノ者ハ第九條第一後備服役中轉居ノ届同断タルベシ最自己所属ノ下士ヘモ同様届出ツベシ

第五條 常備軍服役中歸休郷里ニ在リテ死没スル者ハ其戸主ヨリ其筋ヲ經テ鎮臺ヘ届出ツベシ

第六條 常備軍在營中病氣ノ者ハ軍醫ノ診断ヲ以テ病院ニ入レ治療セシメ其上ニテ兵役ニ堪ヘ難キ者ハ兵籍ヲ除スベシ最歸縣迄ノ旅費ハ定則ニ照準シ賜ハルベシ

第七條 父母ノ重病或ハ非常ノ事故出來一時止ムヲ得スレテ歸省ヲ願フ者ハ其親或ハ親族ノ者ヨリ府縣廳與書證印ヲ以テ管ノ鎮臺ヘ願出ツルニ於テハ診議ヲ遂ケ許可スベシ最滞郷日數ハ往來ヲ除クノ外ニ週間ヨリ長カルベカラズ

但旅費ハ往來共自辨タルベシ

第八條 第一後備軍ノ復習期限八年々十日以前ニ其鎮臺ヨリ布達シ旅費等ハ徴兵入費概則ニ照準シ里程ニ應シ相渡スベシ若病氣或ハ事故出來ノ者ハ第三條ノ通り届出ツベシ

第九條 後備軍服役中同府縣内ヘ轉居スルキハ左ノ第一式ノ通り戸長

陸

〇條

ノ姓名與書證印ヲ取り其筋ヲ經テ鎮臺へ届出ルベシ若他府縣へ轉  
スル片ハ同軍管ナレバ左ノ第二式ノ通り他軍管ナレバ同式中兵籍  
御送り方ノ字ヲ第何軍管第何後備軍へ御編入替ト認メ前手續キヲ  
以願ヒ出ツベシ

第十條 後備軍服役中ノ者若院省使廳府縣ヨリ登庸セント欲スル片  
ハ其官廳ヨリ其鎮臺へ掛合フベシ

第十一條 後備軍服役中死没ハ其戸主ヨリ其筋ヲ經テ鎮臺へ届出ツ  
シ若國禁ヲ犯シ或ハ逃走等ノ者アル片ハ其府縣廳ヨリ箇條書ヲ以  
届出ツベシ

第十二條 全國ノ男兒齡十七歳ヨリ國民軍籍ニ入り外寇又ハ有事ノ  
時ニ當リ隊伍ニ編入シ或ハ守衛トナシ或ハ征軍ナサシムベキヲ以  
テ十六歳ノ冬十一月十日マデニ其戸主ヨリ戸長へ届出ツベシ最  
家ノ主人タル者ハ自分ヨリ届出ツベシ戸長之ヲ取調へ所轄ノ區へ  
差出シ區長點檢ノ上區括リニシテ府縣廳へ差出タル翌年ノ成下簿  
ニ載セ之ヲ備へ置キ而國民軍人負表ヲ製シ陸軍省へ差出スベシ

第十三條 男兒二十歳ニ至ルハ兵役ニ就クベキヲ以毎年十二月廿五  
日迄ニ府縣廳ニ於テ十九歳ノ者ヲ調へ徵兵連名簿ニスルトス是  
故二十九歳ノ者ハ其年ノ十月十日迄ニ必ズ戸長へ届出ツベシ戸長之

ヲ取經メ其内免役ニ適スル者アルハ篤ト取調へ夫々箇條書相添へ  
區長へ差出スベシ區長十一月廿日迄ニ區括リシテ証印府縣廳差出シ府縣  
廳之ヲ點檢シ徵兵連名簿ニ載セ十二月廿五日迄ニ陸軍省へ差出ス  
ベシ最免役ニ適スル者ハ區々ヨリ差出シタル免役箇條書ヲ取糺シ  
免役連名簿ヲ作り各個箇條ヲ詳細ニ書載セ徵兵連名簿ト共ニ差出  
スベシ其中學徒ハ夫々其修業スル處ノ學校へ掛合ヒ教官ノ證書及  
科目免許書等取寄セ置キ徵兵使巡行ノ日差出スベシ若右證書科目  
書等之レナキ者ハ一月中ニ呼返シ置クベシ最洋行修業ノ者ハ此例  
ニ非ズ

第十四條 寄留スル者ノ子弟及ヒ厄介タル者ハ現今寄留スル府縣ノ  
兵籍ニ入ルベシ(但本籍ニ歸リ兵役ヲ勤メント欲スル者ハ十九歳十  
一月十日迄ニ其段ヲ戸長ニ届ケ戸長ヨリノ送り書ヲ以テ本籍ニ  
歸ルベシ)

第十五條 本年徵兵ニ當リ自己ノ便宜ニ由リ代人料金二百七十圓上  
納願出ル者ハ常備後備兩軍共之ヲ免ズ

第十六條 免役ヲ願出ル者ハ其親或ハ親族ノ者ヨリ徵兵使巡行徵兵  
檢査以前左之願書ヲ認メ戸長ノ與書證印ヲ以區長へ差シ區長ヨリ

陸

○條

徵兵署ニ差出スベシ

第十七條

徵兵ニ關スル事ニ付年齡及ビ父母兄弟ノ有無又ハ虛病其他詐偽スル者ハ官ヲ欺罔スルノ罪若又戸長或ハ區長取調ハ證印ノ上ハ其證印ヲナセシ官吏ハ粗漏ノ罪尚又徵兵ノ欺妄ヲ隱匿スル者ハ其罪最重ナルベシ右孰モ常律ヲ以テ其罪ヲ糺ス可キ

九年十月廿三日太政官 御達第九十九號

院省使廳府縣

陸軍武官恩給令罷役俸及恤金令及將官退職令等別冊ノ通被定候條此旨相達候事

但明治八年四月第四十八號達陸軍武官傷廢扶助死亡ノ者祭染家族扶助概則ハ相廢候事

第一條

陸軍恩給ハ軍人奉仕中諸種ノ功勞ニ依テ獲ル者ニシテ其種類ヲ別ツテ左ノ如シ

第一 恩給服役停年ト傷廢病トニ由ル者ナリ

其給額ハ服役ノ長短傷廢疾病ノ輕重其軍人ノ官階並ニ在職中ノ停年ニ從テ各差等アリ

第二 寡婦扶助料

其給額亦其夫ノ官階ト死没ノ緣故トニ由テ差アリ

第三 孤兒扶助料

其給額上ニ同シク差アリ

第四 罷役後恩給

上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役十五年以上ノ者ニ給スル所ニシテ其給額服役停年ノ長短ニ准ス

以上四種ノ恩給並ニ扶助料ハ大藏省ヨリ別途ニ支給スル者ニ

第五 罷役俸

上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役十一年ヨリ十五年未満ニテ罷役ニ入ル者ニ給スル所ナリ

第六 罷役恤金

恩典トシテ壹號休暇ヲ賜ヒ歸郷セシメタル下士兵卒並ニ同等ノ輩ニ給スル所ナリ

以上二種ノ給料ハ陸軍ノ各年定額表ニ載セテ陸軍省ヨリ支給スル所ニシテ罷役俸並ニ罷役恤金令アリ後ニ附ス

第二條

恩給寡婦扶助料罷役後恩給ノ三種ハ其本人ニ生涯之ヲ給スベシ孤兒扶助料ハ其孤兒男女共ニ二十歳ニ至レバ之ヲ止ム罷役俸ハ其上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役停年ノ半期ニ准シテ(タト)ハ服役停年十二年ナレバ其半期即チ六年ト(ニ)其年間之ヲ給シ罷役恤金ハ二ヶ年ヲ以テ限リトス然レモ之ヲ更新スルコトヲ得ベシ

陸

○條

第三條 凡ソ此各種ノ支給料ハ當該人名存生ノ中ハ之支給シテ停止スルコトナシ但公借隊内借財並ニ身代限ニ處セラル、時モ其引ク所給額五分ノ一ニ過ルヲ得ス

第四條 凡ソ陸軍恩給ヲ受ルノ權ハ次ノ事故アレハ之ヲ止メ或ハ其時間之ヲ停ム

第一 破廉耻甚キ者或ハ笞刑或ハ懲役實況以上ノ處斷受ル時

第二 事故アリテ日本タルノ分限ヲ失フ者

第三 政府ノ許可ナクシテ帝國外へ出ル者

第五條 恩給停年ニ基ク者ハ最下限ヨリ最上限マデノ差等アリ最上限ニ越ルコトハ此後第十一條第一節及第七十八條ニ揭示スル者ニ係ルノ外絶テ有ルコトナシ

第六條 最下限ヲ受ルノ權ハ上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役實期二十五年ニ滿ル者之ヲ獲ヘシ又上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役實期二十年ニ滿ルノ後一時ノ疾病ニ由リ三年以上非職タリシ者查問會議ニ因テ再ビ現役ニ復ス可カラザル者ナリト處次スル時ハ其官階ニ准スル最下限ノ恩給ヲ受ルノ權利ヲ有ス但シ從軍年ヲ算入スルノ恩典ナシ

下士兵卒服役實期十五年ニ滿ル者ハ最下限ノ恩給ヲ受ル權利ヲ有ス

第七條 恩給ノ最上限ハ服役四十五年ニ滿ルノ上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩三十五年ニ滿ルノ下士兵卒並ニ同等ノ輩之ヲ受ルノ權利ヲ有ス此故ニ上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ハ滿二十五年以上下士兵卒並ニ同等ノ輩ハ滿十五年以上毎年最下限ヨリ最上限ニ至ル差二十分一ノ比例ヲ以テ其受ル所ノ給額ヲ増加ズ但シ此年數ニ從軍年ヲ算入スルハ後ノ第二十四條ニ揭示スルガ如シ

第八條 戰地若クハ公勢中偶然ノ事故ニ由テ重傷ヲ受ケ不治ニ至ル者ハ恩給ヲ受ルノ權利ヲ有セシム 重病ノ人陸軍服役ノ疲勞危難ヨリ發シ不治ナリト認メラル者亦同シク此權利ヲ有セシム

第九條 其傷痍疾病或ハ盲目トナリ或ハ切斷ニ由リ又ハ其傷病ニ由リテ全ク一肢以上ノ用ヲ失フ者ハ直ニ恩給ヲ受クルノ權ヲ有セシム然レモ其傷痍疾病右ノ重症ニ比シテ一層輕キ者ハ次ノ事情アルニ至ラザレハ之ヲ有セシムルコトナシ

第一 上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ハ其傷病ニ因テ現役ニ堪ザル者年ヲ經ル雖モ竟ニ復役スベキ目途ナキ時

第二 下士兵卒並ニ同等ノ輩ハ其傷病ニ因テ服役スベカスシテ糊口ヲナスコト能ハザル時

陸

○條



第十條 上條ノ道理ニ基ツキ凡テ服役ノ事ニ關カラザル疾病其他體質薄弱若クハ老衰若クハ世上一般ノ疾病ニ罹ル者ハ此限ニアラス

第十一條 恩給ヲ給スルノ本則ハ其由テ以テ此ニ至ラシムルノ原因ノ輕重ニ准シテ差等アルコト次ノ如シ

第一 其兩眼ヲ盲シテ不治ニ至ルト並ニ切斷ニ由テニ肢ヲ亡スト此ニツニ罹ル軍人ハ何ノ官階ヲ論ゼズ停年恩給ノ最上限ノ上ニ上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ハ其給額百分ノ二十下士兵卒並ニ同等ノ輩ハ百分ノ三十ノ増額ヲ受ク但シ其服役ノ長短ヲ論ズルコトナシ

第二 一肢ヲ切斷シ若クハ全クニ肢ヲ用テ失フニ至ル軍人ハ何ノ官階ヲ論ゼズ唯最上限ノ額ヲ受ク但シ其服役ノ長短ヲ論ズルコトナシ

第三 其傷疾疾病全ク一肢ノ用ヲ失フニ至リ若クハ之ヲ失フコトナシモ之ヲ失フニ等シト認ムル所ノ軍人ハ何ノ官階ヲ論ゼズ又其服役ノ長短ヲ問ハズ先ツ停年恩給ノ最下限ヲ以テ之ヲ當テ而シテ後ニ服役ノ年度ニ照シ恩給最下限ヨリ最上限ニ至ル差ノ二十分一ヲ加ヘタル給額ヲ受ルノ權アリトス然レモ其給額最上限ノ高ニ至レハ其上増加スルコトナシ但シ此服役年數ニ從軍年ヲ算入ス

第四 其傷疾疾病前項ニ比スレハ一層輕キモノニシテ自己ノ用辨

ニ差支ナキモノハ最下限ノ額ヲ一時限リ給ス但シ服役停年從軍年ヲ算入スニ由リ最下限ノ恩給ヲ受クモノハ此一時限リハ給セス

ト雖モ其服役後恩給或ハ罷役俸並ニ恤金ヲ受ルニ止マルモノハ別ニ此一時限リヲモ給スベシ

第十二條 其他後ノ第七十九條ニ揭示スル所ニ條ル者ハ給額ノ差數五分ノ一ヲ之ニ増加スルコトヲ得ベシ

第十三條 恩給ヲ受クベキ夫ノ死後ニ於テ其夫ノ官階ニ屬セル停年恩給ノ最上限ノ半數ト定メ生涯之ヲ受ルノ權ヲ有スル寡婦ハ次ノ如シ

第一 戰地若クハ公務ニ於テ殺害ヲ受ケタル軍人ノ寡婦

第二 内地若クハ日本外ノ軍中ニ於テ或ハ戰爭ノ事故ニ由リ或ハハ傳染疫癘ニ罹リ其他服役ノ義務ヲ奉スル爲ニ死没タル軍人ノ寡婦

第三 戰地ニ於テスルト公務ニ於テスルヲ論ゼズ其傷疾ニ源因シテ終ニ死ニ至ル軍人ノ寡婦

第十四條 恩給ヲ受クベキ夫ノ死後ニ於テ其夫ノ官階ニ屬セル停年恩給最上限ノ四分一均シキ給額ヲ生涯受ルノ權ヲ有スル寡婦ハ次ノ如シ

第一 其夫既ニ恩給受テ死シ後ニ遺レル寡婦

第二 其夫未タ之ヲ受ケスト雖モ受テキ權ヲ有シテ死シ後ニ遺レ

陸 〇條

ハ寡婦

總テ寡婦ハ陸軍卿ノ許可ヲ受ケ合式ノ婚配ヲ行ヒ其夫現役ヲ去ル  
前即チ陸軍俸給ヲ離ル、時ヨリ一ケ年以前ニ嫁シタル者タルベシ  
然レ其夫致仕ノ以前ニ前時ノ配偶若クハ此配偶ヨリ生レタル兒子  
アレバ嫁時ノ年月ヲ查確スルニ及バズ

第十五條 寡婦其家ヲ去リ若クハ再婚スルハ扶助料ヲ望ムノ權ナ  
シ此場合ニ於テハ兒子亦復妾腹ヲ分タス其戸籍ニ登記セルモ、ア  
ル者ハ之ヲ孤兒ト見做スベシ

第十六條 其寡婦死去シ或ハ再婚等ノ事故アリテ其扶助料ヲ受ルノ  
權消絶スルハ其權其軍人ノ一子若クハ數子ノ幼年ナル者アレバ  
其數ニ拘ラズ是ニ轉移シ寡婦ノ受クヘキ扶助金ト拘シク年々其扶  
助料ヲ受クルコトヲ得ベシ

第十七條 此道理ニ基キ其軍人ノ死スル前ニ母ノ死シタル孤兒ハ其  
母ノ受クヘキ扶助料ヲ直ニ受クベシ

第十八條 凡ソ養子ハ唯嗣子タル者ニ限り廿歳未満ナレバ之ヲ受ク  
ルノ權利ヲ有ス若シ其軍人生前ニ其女子ハ養子ヲナスト雖モ未  
婚中ナレバ第十六條ノ例ニ准スベシ但シ其養子ニ婚配スレハ男女  
トモ其權消絶ス

陸

〇條

第十九條

此扶助料ハ孤兒幼年ノ間ニ限ル者ニシテ男女共ニ二十歳  
ニ至ルマデテ期トシ其期ニ達スレハ其權轉移テ次子ニ移ル者トス

第廿條

服役停年ニ付テ退職ノ恩給ヲ願フハ服役定期ニ全ク滿ツル  
ノ前ニ非レハ之ヲ願フコトヲ得ス

第廿一條

此故ニ各軍隊ニ於テハ毎年一次ノ外ハ退職恩給願ヲ軍人  
ニ許可セザルヲ以テ常則トス

其願書ハ總テ各年檢閱使定期檢閱ノ前一箇月ニ於テ証據ニ拱スヘ  
キ書類ヲ副ヘ之ヲ本隊ノ會計會議ニ移呈スベシ

此會議ニテ願人ノ申告シタル事實ヲ查照シ其服役ノ明細書並ニ願  
意ノ證據ニ拱スヘキ書類ニ封印シ其是非ヲ當人ニ説諭シ而シテ後  
ニ總テ此書類ヲ檢閱使ニ呈スベシ

第一

其下士以下隊内ニ在ル者定期十五年ニ滿ルノ時ニ入隊ノ約期  
モ盡ル者ニ就テハ此期限前ニ合式ノ願書ト證據ニ拱スヘキ書類ト  
ヲ併セテ入隊約期滿限ニ至ル日ニ之ヲ鑛臺ノ司令將官ニ呈スベシ

此場合ニ於テ該官ハ檢閱使ノ任ヲ行フベシ  
第二戰地ニ於ケル重傷重病ノ事故ニ基ツキタル恩給ハ總テ之ヲ急速  
ニ取扱フヘシ故ニ此場合ニ於テハ一團隊ノ首帥檢閱使ノ任ヲ行フ  
ベシ

第三 其他急速ヲ要スル場合ニ於テハ四季ノ閱兵ノ時ニ鎮臺ノ司令官將官自ら檢閲使ノ任ヲ行ヒ或ハ部下ノ司令官ヲシテ之ヲ代理セシムルコトアルベシ

第二十二條 凡ソ恩給ノ進達文ハ其縁故ヲ開列シ服役並ニ從軍ノ事實ヲ表章シテ願人ヲシテ恩給ヲ受領スルニ適當ナラシムルヲ以テ主トスベシ

第二十三條 其進達文ノ外ニ次ノ書類ヲ悉ク取揃ヘ一纏メトナシテ之ヲ呈スベシ

第一 願人ノ縁故ヲ開列シタル願書ハ會計會議又之ヲ所轄スル官解等ノ長官ニテ署名調印ス

第二 身元履歷書ハ郷貫職業移住年月等ヲ詳カニシ且生年ヨリ陸軍出身マデノ履歷ヲ表シ兼テ父母妻子等ノ姓名ヲ載セタル者

第三 服役並ニ從軍ノ明細書ハ隊中ノ帳簿ヨリ凡テ該名ニ關係スル條款ヲ抄出シタル者 但此書ニハ本人調印スベシ

第四 上包ハ會議又ハ此願書ヲ移轉スル官人ニテ作ル所ニシテ番號並ニ包中書類ノ番号ヲ表記シ願書並ニ附屬ノ諸書類ヲ之ニ包收シ仍ホ其遺脱ヲ防ク爲ニ絲帶ヲ施スベシ

第二十五條 此書類ハ檢閲使若クハ四季ノ閱兵ヲナス將官ノ閱兵期日一ヶ月前其管ノ司令官ニ送付シ司令官之ヲ合格ナリト認ムルハ檢印署名シ該臺ノ司令官將官ニ呈シ將官一覽ノ上異議ナキニ於テハ直ニ會議ニ返送シテ其檢閲ヲナス將官ニ呈セシムベシ

將官其人ノ名ヲ檢査スルノ後會議ヲシテ恩給許可ヲ請フノ進達帖ヲ作ラシメ而シテ監督查照ヲ遂ケ將官之ヲ可トスルノ後其帖ト諸書願並ニ其願書ニ就テ自己ノ意見ヲ記シタルト併セテ其包内ニ入れ之ヲ陸軍卿ニ呈スベシ

第二十六條 其軍人或ハ隊中ニ在リ或ハ他ノ僻署等ニ屬シテ遠隔ノ地ニ在リ送達爲シ易カラザルハ鎮臺ノ司令官將官ノ命ヲ以テ司令官ヨリ其出ス所ノ願書ヲ近傍ニ駐劄スル兵隊ノ會計會議ニ送達シテ事ニ從ハシム

第二十七條 陸軍卿ハ其軍人服役ニ堪エサル者アレバ公命ニテ之ニ退職恩給ヲ願ハシムルコトアルベシ

其願書送呈ノ法ハ前數條ニ擧ケタル所ニ異ナルコトナク又傷痍疾病ニ由ルモノハ後ノ第四十九條ニ擧ルガ如シ

上長官士官並ニ會計軍醫馬醫各部右同等ノ輩ニ對シテハ陸軍卿ヨリ旨ヲ諭准士官以下ノ服役十五年滿チタル者ハ其隊ノ長官其服役ニ堪エサル

陸 ○條

ヲ認メタル時ハ其旨ヲ諭シテ退職ヲ願ハシムルコトヲ得然レモ其願書ハ猶其部ノ檢閱使ノ手ヲ歷テ陸軍卿ニ呈スベシ	第二十八條 其他軍人ハ一定ノ年齢ニ至リタル時其退職恩給ヲ獲ルコトニ就テ定タル年限満期者ハ其服役ヲ辞シテ致任スルヲ例トス其年齡定限ハ左ノ如ク	監督 軍醫監 藥劑監	六十
參謀大佐 副監督 司契	五十七	軍吏正 軍醫正 藥劑正	五十四
大中佐 參謀少佐 監督補 司契副	五十四	軍吏 軍醫 劑官 馬醫	五十一
少佐 參謀大尉 軍吏副	五十一	軍醫副 劑官副 馬醫副	四十八
大尉 參謀中尉 軍吏補 軍醫補 劑官補 馬醫補	四十八	樂長 砲工上等監護 砲工兵監護監査 諸工長 同下長	四十五
中少尉	四十五	下士 兵卒 並ニ同等ノ輩	三十五
第二十九條 前條ノ年齢定限アリト雖モ猶任用ニ堪工若クハ材能特拔ナル者ニ於テハ上長官士官並ニ會計軍醫馬醫各部右同等ノ輩ハ陸軍	三十五		

二十一丁

卿ヨリ留任ヲ命シ准士官以下ハ所部ノ長官ヨリ請求シテ留任ヲ請フヲ得ヘシ但強テ致仕ヲ願フハ此例ニ在ラス

第三十條 其他軍法會議ノ列位要塞參謀科文庫主管等老練ノ人ヲ要スル職務ハ皆陸軍卿上條ノ例ニ准シ時宜ニ依テ之ヲ取捨スヘシ

第三十一條 ヲリ以下第九十六條迄畧之一

十一月二月七日連甲第四號 鎮臺府縣

徵兵抽籤之法ハ徵兵令第五章第五條之通可取扱之處本年ノ儀ハ徵兵連名簿記載ノ人實寡少ニ付常備補充定員ノ外剩餘之分悉皆補充兵申付候此旨相達候事

十一年八月三日太政官御布告第二十號

常備兵役ヲ竟ヘザル前分家致シ候儀相成ラズ尤モ徵兵令第三章免役概則第三第四第五條ニ掲グル者徵兵年齢ニ至リ同章第一第二條ニ照シ免役セラレタル者第五章第十一條但シ書ニ依リ除役セラレタル者及ヒ徵兵年齢ニ至ラズト雖モ第六章第十五條ニ照シ代人料金上納致ス者ハ分家苦シカラズ候此旨布告候事

六年七月四日太政官御達 陸軍省

招魂社大祭之節執行候打揚ケ煙火自今被廢止候事

但空中破裂不致仕掛ケ花火ノ類ハ不苦候條興行之節東京府及警保寮

陸 ○條

へ可相違事

海軍省

分局 軍務局 會計局 主船局 水路局 醫務局 兵器局  
東海鎮守府 横須賀造船所 兵學校 裁判所

○條制之部

七年三月布達第一號

海軍徽章有之服帽等其職ニ非入シテ私ニ着用并賣買典物共一切不相成  
候條此旨布達候事

十一年二月二十五日布達甲第一號

明治九年九月當省職制章程被相定候ニ付テハ從前諸寮司及部府等ニ係  
ル事務ハ左ノ諸廳ニ於テ管掌候條此旨布達候事

舊主船寮ノ事務ハ造船所及主船局ニ於テ之ヲ管ス○舊水路寮ノ事務ハ  
水路局○舊兵學寮ノ事務ハ兵學校○舊軍醫寮ノ事務ハ醫務局○舊武

庫司ノ事務ハ兵器局○舊水兵本部舊提督府ノ事務ハ鎮守府但下士  
以下徵募及家族扶助金其他履歷ニ關スル事務ハ分テ軍務局ノ所管トス

十一年四月十日達乙第二號

府縣

當省下士以下家族扶助金ノ儀家族之ナキ者ハ給セザル旨明治七年八月  
當省記登第四十二号ヲ以テ相達シ置候處未獨身者ノ内其附籍又ハ本人  
ノ附籍ト相唱候者往々之アリ候處自今右獨身ノ附籍者ハ家族扶助金  
差止候條此旨相達シ候事

十一年六月廿四日達乙第六號

當省所轄艦船各港海軍病院之ナキ場所ヲ云碇泊中乘組下士以下病氣ニ  
依リ艦船内ニ於テ治療整ヒ難キ節ハ各地公私病院ニ介治療方其艦船長ヨ  
リ地方廳或ハ病院へ依托致シ可ク付其旨相心得不都合之キ様取計ニ尤モ  
患者入院中其本艦船出港候節ハ其快復者歸京及死亡者埋葬方等其府縣  
ニ於テ取計ヒ且費用ノ儀ハ別紙假規則ニ照シ該廳ニテ一時繰替追テ診断並  
ニ勘定書相添當省醫務局へ報告致ス可シ此段豫相達置候事

患者入院費用定則

第一條 艦船乘組下士以下出張中海軍病院之ナキ場所ニ於テ病氣入院  
ノ節ハ該院ノ規則ニ依リ藥價及ヒ賄料等現費ヲ以テ支給スベシ但シ所  
轄限リ雇入ノ者身元引請人之ナキ地ニ於テ病氣入院ノ儀ハ總テ定員同  
様取計フヘシ○第二條 患者入院中ハ日給ヲ給セズ必用品代トシテ一  
日二錢ツ、ヲ給スヘシ但シ艦内作業中疵傷ノ者ハ全給ヲ給ス○第三條  
入院中該艦船出港ニ際シ乘組免セラレシ後快復退院セシ者ハ郵便

海軍省

○條制

汽船ニ乗セ歸京セシムベシ其費用ハ左ノ通り現費支給スヘシ但シ該港及ヒ横濱港船賃合セテ金廿五銭ヲ給ス又日用手當シテ該地發日ヨリ東京へ着日迄一日一人ニ付金拾貳錢五厘宛ヲ給スベシ

該港ヨリ横濱迄

横濱ヨリ東京迄

下等船賃

下等漁車賃

第四條 病者快復退院ノ末郵便汽船ニ乗組マセ歸京セシムル節ハ日當支給方ハ左ノ日積リヲ以テ相渡スベシ

長崎ヨリ

六日

函館ヨリ

東京迄 五日

下ノ関ヨリ

三日

神戸ヨリ

第五條 病者快復退院ノ末便船ノ都合ニ依リ該地滯留候節ハ其日數ニ應シ非役給並ニ定則ノ食料支給スベシ(但シ本文非役給食料ノ額ハ其都

度艦船長ヨリ通知致シ置クベシ)

十一年二月二十五日達ニ第一號

當省所轄各廳限リ傭入之者(艦船乗組定員ノ職名ヲ云フ身元引受人証書之儀從前書式一定無之不都合候條自今別紙書式雜形之通相定候間右ニ照準シ本人共ヨリ差出候節ハ区戸長ニ於テ捺印致候様可相達此旨相

達候事

但海軍ニ從事スル者ヲ以本文身元引受人ニ相立候共一切採用不致事

〔書式雜形略ス〕

十一年十月二十五日達

府縣

海軍募兵儀五年九月ノ第百廿七号當省達ノ通リ家内ノ事故ヲ以テ賜暇無之規則ニ候處父母病氣又ハ家督相續等ノ事故ヲ以賜暇或ハ免役等願出候者往々有之不都合至ニ候條自今右等ノ事故ヲ以テ願出候共當省本年ノ第七号達定則休暇ノ外一切不差許候尤父母老疾等ニテ家ニ侍養ノ子孫ナキ等真ニ慰諒スヘキ事實有之者ニ限リ臨時特別ノ詮議ヲ以テ聞届候儀モ有之候條戸籍書及病癒診斷書相添地方ニ於テ熟問確証ノ上願書可差出此旨相達候事

文部省

分局 東京大學 東京大學豫備門 東京内外語學校 東京師範學校

東京女子師範學校 大坂英語學校 大坂師範學校 東京博

物館 小石川植物園

條制之部

十一年三月十五日達第二號

明治七年文部省第十號ヲ以相達置候官立諸學校生徒募集報告ノ儀自今相廢止各學校ニ於テ公告可致候條此旨相達候事

同年同日同

明治八年文部省第四號ヲ以テ布達致置候官立師範學校卒業生徒人名報告之儀自今廢止候條此旨布達候事

同年同日同第三號

府縣

公立師範學校補助金之儀明治十一年七月ヨリ明治十二年六月マテ一周年金七萬圓配付候條此旨相達候事

十一年九月十日達第六號

府縣

公立學校開設ノ儀是迄文部省へ伺出候處自今不及其儀地方官ニ於テ可取計但公立學校教則及府縣ニ於テ編制セル管内學事規則ノ儀ハ文部省へ伺出此旨相達候事

同年同日同第七號

府縣

文部省明治七年第十二號達私學開業許可ノ書式廢止候條此旨相達候事

○圖書之部

八年六月布達第九號

當省藏版書籍翻刻ノ儀ニ付テハ昨明治七年第二十五號ヲ以テ及布達置

候處當省藏版ノ書籍ハ自今悉皆翻刻差許候條尋常出版ノ手續ヲ以テ可願出此旨布達候事

但當省藏版書目ハ可及報告候事

十年五月布達第四號

文部省藏版翻刻許可ノ圖書ニ就テ傍訓註解繪畫等ヲ加ヘ又ハ文字ヲ増減ノ原本ノ體面ヲ變換シテ刊行セントスル者ハ草稿ヲ以テ一應文部省へ伺出此旨布告候事

○曆時之部

七年八月布達第二十三號

當省藏板陰陽西曆對照表之儀ハ歲月比較ノ為ノ有用ノ書ニ付翻刻差許候條尋常出版ノ手續ヲ以可願出此旨布達候事

○工部省

- 分局 鐵道局 鑛山局 電信局 工作局 燈臺局
- 營繕局 書記局 會計局 檢査局 倉庫局

○鑛山之部

文部省

○圖書

工部省 ○鑛山

六年七月太政官御布告第二百五十九號

今般鑛山其他諸坑業ノ規則別冊ノ通改定候ニ付テハ凡坑物ニ關係ノ事件ノ全部自於  
ニ總管ニ候條自今金屬其外諸坑物營業ノ儀都テ同省ノ可申立候此旨布告候事

日本坑法

第一章 坑物

第一 正理ヲ以テ論スル時ハ此無機物タル物ハ(生活ノ機無キ諸物品都  
テ坑業ノ部分ニ屬ス此無機物品質ニ類ニ分ル即第一類ハ有鐵質第二  
類ハ無鐵質タリ凡諸金屬ノ天然本質ヲ以テ出ル者或ハ他ノ物質ト合  
化シテ出ル者ハ右第一類ニ屬ス然質物山塩燐酸石灰美石及玉璞ノ類  
ハ右第二類ニ屬シ本條舉ル所ノ有鐵質無鐵質トモ總テ是ヲ坑物ト称  
ス坑山坑業坑區坑産等皆之ニ做ヘ

第二 前ニ掲記セシ物類凡日本國中ニ於テ發見スル者ハ都テ日本政府  
ノ所有ニシテ獨政府ノミコレヲ採用スル分義アリ

第三 築石土砂粘土其他建築耕作所用ノ諸物品ハ都テ地主タル者ノ所  
有トス可シ

第四 日本ノ民籍タル者ニ非サレハ試堀ヲ作レ坑區ヲ借り坑物ヲ採製  
スル事業ノ本主或ハ組合人ト成ル事ヲ得ス坑産ノ割合及損益ニ關係  
スル所ノモノハ都テ組合トス若シコレヲ犯ス者ハ其業ニ屬スル所ノ

工

物ヲ官ニ没入シテ其業ヲ禁止ス可シ

第二章 試堀

第五 試堀ヲ作サント欲スル者ハ鑛山寮ニ願出許可ヲ得テ之ヲ行フ可  
シ試堀ヲ行フ爲ニ必要ノ地面他人ニ屬セハ其價金ヲ對談處分ス可シ  
地主ニシテ自ラ試堀ヲ企ル者ハ衆ニ超テ許可ヲ得可キ分義有リトス  
然レモ自ラ試堀ノ資本無クシテ他人ノ舉ヲ拒ミ或ハ不當ノ價金ヲ貪  
ラハ鑛山寮或ハ地方官ニテ正價ヲ裁決シテ其地ヲ買上ク可シ

第六 試堀ニテ坑物發見スル時ハ直ニ見本ヲ添テ鑛山寮ニ届出ツ可シ  
且試堀中ハ一月七月兩度毎ニ前六ヶ月間ノ行業日數及工數並産鑛量  
ヲ閱報ス可シ○凡産鑛ハ借區券ヲ第十款ニ出ツ得ル後ニ非サレハ恣  
ニ賣却スルヲ得ス若シ之ニ背カハ其全價ヲ没收ス可シ

第七 試堀ハ都テ一年間ヲ以テ期限トス若延期ヲ願出ルニ實ニ未タ閱  
坑ヲ沢スル事ヲ得サル事理判然タラハ是ヲ許可スル事有ル可シ

第八 試堀人廢業スル時ハ第三十七款廢坑則ノ如クス可シ○此時ニ産  
鑛ハ鑛山寮ノ許可ヲ得テ賣却シ第三十一款ノ坑物税ヲ納ムヘシ○試  
堀人損失ニ因テ廢業スル事實ニ判然タルニ於テハ坑物税ヲ免スルコ  
有ルヘシ

第三章 借區開坑

○鑛



第九 開坑スル者ハ先ツ坑區ヲ得可シ坑區ノ廣狹ハ其適實ナル起業ノ  
 目途ニ應シテ之ヲ得セシメ可シ○有鑛質坑ヲ開ク者ハ必製鑛ノ業ヲ  
 兼ヌ可シ○凡借區開坑ハ鑛山寮ニ願出ヘシ此願書ニ其得シト欲スル  
 坑區ノ測量圖ヲ添テ出ス可シ○試堀ヲ經テ借區願出ル者ハ其坑區中  
 別ニ地主有リト雖モ之ヲ拒ムヲ得ス尤其處分ハ借區券ヲ得ルノ後廿  
 二款ノ如クナル可シ

第十 願出ノ借區ハ鑛山寮官員之ヲ驗測シ標石ヲ植テ境界ヲ識別ス可  
 シ巡迴官員歸報ノ後許可ス可キハ工部全權ノ証印ヲ以テ借區券ヲ附  
 與ス可シ

第十一 凡借區ハ通常十五年間ヲ以テ定期トス之ヲ終ルニ至テ繼年期  
 ハ新ニ願出ツ可シ

第四章 通洞

第十二 通洞ハ坑道ハ縱横ニ小坑ヲ穿ツテ通常トス別ニ探鑛疏水運輸  
 等ノ爲メ地底ヲ横截シ一道ノ大坑ヲ穿ツアリ之ヲ通洞ト云我々借區  
 中ニ非スト雖トモ之ヲ企ル事ヲ得可シ此時ハ願書ニ目論見明細圖ヲ  
 添テ鑛山寮へ出ス可シ若其通洞他人ノ借區ニ互涉ス可キハ豫メ其借  
 區人ニモ報知可シ○通洞ハ高九尺幅六尺ヨリ減ス可カラス是ヨリ小  
 ナルハ通洞トセス

第十三 願出ノ通洞ハ鑛山寮官員實地勘踏歸報ノ後許可スヘキハ工部  
 全權ノ証印ヲ以テ免狀ヲ附與ス可シ免狀ヲ得ルノ後若目論見圖ニ違  
 ヒ方向ヲ轉シ或ハ距離ヲ延縮セント欲セハ更ニ鑛山寮へ願出許可ヲ  
 得テ之ヲ行フ可シ

第十四 借區人何レモ自ラ通洞ヲ開ク可キ資本有ニ非サレハ我區中々  
 リト雖モ他人ノ舉ヲ拒ム可カラス○通洞保全ノ爲メニ其周圍ノ土石  
 ヲ外ヨリ厚サ一間半以内ニ掘入ル可カラス然レ共其跡ニ自己ノ入費  
 ヲ以テ支柱ヲ構造シ崩潰ノ患無カラシムル者ハ此限ニ非ス(是ハ坑物  
 ヲ得シカ爲ニ一旦土石ヲ掘出入時ノ如キ是也)

第十五 通洞ニ因テ諸借區人便利ヲ得ル事有ラハ通洞發起人ニ其謝金  
 ヲ出ス可シ若シ之ニ就テ對該穩當ナラスハ鑛山寮ヨリ所断ス可シ○  
 通洞ヲ開ク者ハ借區人未定ノ所ニ於テハ通洞ノ周圍内ヨリ出ルタケ  
 ノ礫石ヲ取ル事ヲ得可シ他人ノ借區中ニ於テハ此礫石ノ一半ヲ借區  
 人ニ歸ス可シ

第五章 坑業

第十六 都テ坑業ニ付テハ坑物ヲ坑中支柱ノ爲ニ存ス可キ所ノ外ハ成  
 ル丈坑利ヲ遺ス事無ク取出ス可シ此法ヲ犯シ其他都テ坑ノ利用ヲ害  
 スルモノハ其輕重ニ隨テ罰金ヲ徵ス可シ

○鑛

工

第十七 試掘開坑或ハ通洞等ヲ企ルニハ舎屋鐵道河流及道路ノ如キ其害ヲ受可キ場所ハ度ヲ計テ之ヲ避ケ殊ニ城堡ハ七十間以内ノ地ヲ避ケ可シ○凡場所ノ主タル者應諾スルニ非スシテ此ヲ犯ス者有レハ城堡ハ其律ニ任シ餘ハ其損害ヲ償復スル一倍ノ費額ヲ取テ本費ハ其主ニ附與ス可シ

第十八 凡初發許可ヲ得シ坑物ノ外ニ別種ノ坑物ヲ見出ス者ハ速ニ鑛山寮ニ報知ス可シ之ヲ背ク者ハ其坑物又ハ代價ヲ取揚ケ可シ○如此類ノ借區稅ハ第卅一條ニ照準シ高價ナル方ノ例ヲ以テ納ム可シ

第十九 開坑人ハ歲々一月七月兩度毎ニ前六ヶ月間ニ產出セシ坑物量其賣出高並代價及行業日數工數ヲ具記シテ鑛山寮ニ報知ス可シ○有鑛質ハ坑產量並製出量且製出セシ混濁物二種以上ノ金屬ヲ含有スルハ其試驗ノ割合ヲモ具記シテ賣出高以下都テ前ノ如クス可シ右數量不正或ハ開報違期ノ罰ハ金五十円トス若シ賣出高并代價ヲ減書スル者ハ其減書セシ高ノ三倍ヲ徵收ス可シ

第二十 通例開坑又ハ廢礦ヲ採製スルニモ一年間ノ事業ハ地面五百坪ノ下ニ就テ仕建九一六三百日ヲ以テ成セル程ノ工數ヨリ減ス可ガラス若シ之背ク者實ニ百方免レ難ク妨礙判然タルニ有ラスバ其業ヲ禁止スヘシ

第二十一 坑業人ハ互ニ隣坑ノ風通シヲ便利ニス可シ且甲區ヨリ乙區ノ

地中ニ水道ヲ通シ地上ニ要路ヲ通セン事ヲ求ルニ於テハ不當ノ償金ヲ貪ル可ラス若相對ヲ以テ決セスルハ鑛山寮ヨリ所斷ス可シ○右堀通シニ付テ出ル鑛石ハ其所ノ借區人ニ屬ス可シ

第二十二 凡借區人ハ區上ニ於テ藏庫詰所作事場洗礦所鑛鑛所通路等其他坑業ニ必要ナル地面ハ地主タル者ニ豫メ償金ヲ辨ス可シ若シ異論決セスルハ鑛山寮或ハ地方官ニテ正價ヲ裁決シ其地ヲ買取ル可シ

第二十三 總テ坑區ヨリ隣區ニ患害損傷ヲ被ラシムル時ハ之ヲ償フ可シ若シ償金決セスルハ鑛山寮ヨリ裁決ス可シ

第二十四 凡借區人其坑業ヲ年限中他人ニ讓渡ス如キハ前以テ双方ヨリ鑛山寮ヘ願出許可ヲ請フ可シ若シ之ニ背ク者ハ其業ヲ禁止ス可シ

第二十五 凡借區年限終リ又ハ法ニ背ヒテ其業ヲ禁止セテレ或ハ自ラ廢業スルニ至ル者有レハ都テ其借區ハ政府ニ還復シ其事業ニ就テ如何ナル負債者有リト雖モ總テ其坑山ニハ關係セサル者トス此時ニ當テ地中ノ結構ハ坑山ニ屬シテ政府ノ有タル可シ○地上ノ營造ハ其主ノ取去ルニ任スト雖共其跡ノ地面ハ完全ニ修復ヲナス可シ

第二十六 坑業人ハ其鑛山地方ノ住民同様トス因テ其地方官ノ諸法令ヲ遵守ス可シ

第六章 廢業

○鑛

工

第廿七 坑業ヲ廢セント欲スル者ハ豎坑ノ口ヲ掩ヒ又柵圍ヒス可シ鑛山寮ヨリ其豎坑ヲ當然ニ堅固ニセシヤ且坑内ノ營繕完全存在スルヤヲ檢査ス可シ若疎漏有ラハ鑛山寮ニ於テ是ヲ繕治ス可キ費額ノ一倍ヲ徴收ス可シ

第廿八 鑛山寮ヨリ流水ヲ命スルニ背キテ其事ヲ行ハス之カ爲ニ坑中廢没スルニ至ル者ハ其業ヲ禁止ス

第七章 制鑛所建築

第廿九 凡開坑ハ坑山外ノ塲所ニテ有鑛質物ヲ製出セシ爲ニ建築ス可キモノ有ラハ先鑛山寮ニ許可ヲ請フ可シ

第三十 已ニ製煉セシ鑛物ヲ精製（荒銅ヲ丁銅棹銅ニ作り山吹金ヲ純金ニ製スル類ヲ云フ）スル職業ノ者ハ起業ヲ鑛山寮ニ報知シ六ヶ月毎ニ元鑛量并ニ製出品量等ヲ具記シ鑛山寮ニ閱報ス可シ

第八章 稅納

第卅一 鐵ヲ除ク外有鑛質物ヲ採取スル坑區ハ面積五百坪毎ニ一ヶ年金壹圓ツ、借區稅トシテ毎年一月ニ前一年分ヲ鑛山寮ニ納ム可シ（借區稅ハ地租ニ關係セス鐵及ヒ無鑛質ノ諸物品ヲ採取スル坑區ハ面積五百坪ニ付前條ノ半高ヲ納ム可シ即金五十錢トス）○廢礦ヲ採取スル坑區ハ面積千坪ニ付常例ノ稅額ヲ納ム可シ○開坑區面積五百坪廢礦區面積

工

千坪トニ足サルモノハ總テ右面積ノ比例ニ隨テ納ム可シ○借區初年ノ區稅ハ月割ニテ納ムベシ○前借區稅ノ外ニ採製セシ金屬及ヒ諸坑物ニ就テ代價百分ノ三ヨリ百分ノ二十迄ヲ坑物稅トシテ毎年一月七月兩度ニ鑛山寮ニ納ム可シ（但稅額ノ儀ハ其坑業ノ盛衰ニ隨ヒ鑛山寮ヨリ命ス可シ）

第卅二 試掘開坑或ハ通洞等ニ付テ前後諸條款ニ記セル稅或ハ罰金價金等ヲ納メサル時其業ニ屬シル所ノ運移ス可キモノ殘ラズ鑛山寮ヨリ入札拂ニシテ代價ノ中ヨリ不納高ヲ引去リ其殘金ハ之ヲ本人ニ還附ス可シ

第卅三 凡坑法ノ意旨ニ戾ル過失有ル者ハ輕重ニ隨テ罰金ヲ命ス可シ若事業疎略ニシテ人命ヲ失ハ、國律ヲ以テ論處ス可シ右章款ニ記載セル方法ハ明治六年九月一日ヨリ施行ス可シ從前ノ法則及ヒ舊習等若シ此法ニ背テ有ル者ハ都テ廢停タルヘシ

坑法附示

坑業及製鑛ノ業ヲ舉行スル者西洋ノ學術及ヒ工作ヲ用ヒシカ爲メ一定ノ給料ヲ以テ外國技術家ヲ雇入ル、カ如キハ我坑產損益及ヒ所有物ニ關係スル事無キニ因テ坑法第四款ノ禁ニ觸レズ然レ共之ヲ雇入ル、以前其職業給料及ヒ年限ヲ分明ニ記載シ其案紙ヲ鑛山寮ヘ送呈シテ結約

○鑛

ノ許可ヲ可請候事

七年十一月太政官御布告第百二十四號

坑物ノ儀ハ明治六年第百五十九號布告日本坑法ニ掲載ノ通政府ノ所  
有物タルハ勿論ニ付假令開坑ノ許可ヲ受候共其坑中將來開發ノ品ヲ引  
當ニ致シ外國人ヨリ金子借入又ハ先キ賣約定等ノ儀ハ不相成候條此旨  
布告候事

八年一月太政官御布告第二號

明治六年七月第百五十九號布告日本坑法第八章中ニ掲載有之候坑物  
稅收納ノ儀本年一月ヨリ當分ノ内相廢候條此旨布告候事

八年十月布達第二十六號

諸坑業人一坑山ヲ數人各自ニ分區營業候者双方坑區ノ中間ニ相當ノ距  
離無之候テハ不都合ニ付自今試堀並借區開坑共双方坑區ノ中間ニ拾間  
以上ノ距離相立可願出且現今彼此接續ノ坑區ハ更ニ右ノ距離取調圖面  
相添双方ヨリ減區可願出此旨布達候事

但右間地ニ於テ採鑛セサルヲ得サル節ハ双方借區人示談ノ上連名ヲ  
以テ增借區開坑可願出事

九年四月太政官御布告第四十九號

諸坑業稼ノ者身代限り處分ヲ受ケ候節ハ右處分相濟候迄稼業不相成候

條此旨布告候事

九年四月布達第八號

太政官第四十九號身代限り處分ヲ受ケ候者處分中坑業稼方不相成旨御  
布告ニ付右處分ヲ受候者ハ當省ヨリ下渡置候試堀借區假証券返納可致  
此旨布達候事

但身代限り處分濟ノ上再稼致度者ハ坑法ニ照準更ニ可願出事

○鐵道之部

五年五月太政官御布告第百四十六號

第六十一號布告鐵道規則別紙ノ通改正候條此旨相達候事  
但閱局日限ノ儀ハ治定ノ上追テ可相達候事

鐵道規則

第一條 賃金ノ事 何人ニ不限鐵道ノ列車ニテ旅行セント欲スル者

ハ先賃金ヲ拂ヒ手形ヲ受取ルヘシ然ラサレハ決テ列車ニ乗ルヘカラス

第二條 手形檢査及渡方ノ事 手形檢査ノ節ハ改テ受ケ取集ノ節ハ

渡スヘシ若シ檢査ノ節手形ヲ出サス或ハ取集ノ節手形ヲ渡サハル者

ハ更ニ最初發車ノステーションニステーショントハ列車ノ立場ニテ

旅客ノ乘リ下リ荷物積下ロシテナス所ヲ云フヨリノ賃金ヲ拂ハシム

工部省 ○鐵道

一シ尤途中ヨリ乗来リシ者ニテ其確証判然タルハ其乗リタル場所ヨリノ賃金ヲ拂ハシムベシ

第三條 途中入テ一シヨシニテ乗組并手形ノ事 途中入テ一シヨシニテハ列車中余地ノ有無ニ應シテ乗組ムヲ得ヘシ若シ其手形ヲ買取リシ總人数ヲ容ルヘキ余地ナキハ其中ニテ最遠キ地ニ赴ク手形所持ノ人々先ツ乗込ムヲ得ヘシ若シ又同里程ノ地ニ赴ク客数人アルハ其手形ノ番号ノ順序ヲ以テ乗ルヲ得ヘシ

第四條 偽欺ノ者扱方ノ事 何人ニ限ラズ賃金ヲ拂ハス列車ニテ旅行セント計リ或ハ迷ニ旅行シ又ハ其拂ヒシ賃金高相當ノ車ニ乗ラシテ更ニ上等ノ車ニ乗組ミ又ハ既ニ車ヨリ下ルヘキ場所ヲ過キ増賃金ヲ拂ハスシテ遠キ場所ニ到リ迷ニ其賃金ヲ免レント計リ又ハ既ニ拂ヒタル賃金ニテ到ルヘキ場所ニ到リナカラ車ヨリ下リ去ルヲ肯セス其外如何ナル仕方ニテモ賃金拂方ヲ逃レントスル者ハ夫々法ニ隨テ罰スヘシ

第五條 列車運轉中出入禁止ノ事 總シテ列車ノ運轉中ニ出入スルヲ又ハ車内旅客ノ居ルヘキ場所ノ外ニ乗ルヲ禁ス

第六條 痲瘡等ノ病人ヲ禁止スル事 痲瘡及諸傳染病ヲ煩フ者ハ乗車ヲ禁ス若シ此等ノ病人車中ニ在ラハ見當リ次第鉄道掛リノ者ヨリ

車外并鉄道構外へ退去セシムヘシ

第七條 吸烟并婦人部屋男子出入禁止ノ事 何人ニ不ステ一シヨシノ構内吸烟ヲ禁セシ場所并吸烟ヲ禁セシ車内ニテ吸烟スルヲ許サス且婦人ノ為ニ設アル車及部屋等ニ男子安リニ立入ルヲ許サス若シ右等ノ禁ヲ犯シ掛リノ者ノ戒メヲ用ヒサルモハ車外并鉄道構外ニ直ニ退去セシムヘシ

第八條 醉人及不行状人扱方ノ事 何人ニ不限總シテ列車乗組中又ハステ一シヨシノ并鉄道構内ニテ醉ニ乗シ安状ヲ現ハス者又ハ不良ノ行状ヲナス者ハ鉄道掛ノ者ヨリ車外及鉄道構外へ直ニ退去セシムヘシ

第九條 鉄道ニ属スル物品ヲ毀損スル時ノ事 何人ニ不限浪リニスルテ一シヨシノ其他鉄道構内ニ標識掲示セル書付等ヲ剝シ或ハ破リ又ハ列車ノ番号札ヲ取除キ或ハ車燈ヲ消シ又ハ各車ノ諸器械倉庫建家牆欄其他鉄道一切ノ附屬品ヲ毀損スル者ハ總テ法ニ隨テ處置スヘシ

第十條 機関車等へ乗込ヲ禁スルノ事 機関方並火夫ノ外ハ其傍ノ許ヲ得スシテ機関車又ハ炭水車ニ乗リ或ハ乗ラントナスヘカラス且車長及車掛ノ者ノ外其傍ノ許ヲ得スシテハ荷物車又ハ旅客ノ為ニ設サル車ニ乗リ又ハ乗ラントナスヘカラス若シ此禁ヲ犯シ鉄道掛リノ者ノ制止ヲ用ヒサルモハ直ニ其場ヨリ退去セシムヘシ

工

○電

第十一條 鐵道地所へ入り立入者取扱方ノ事 何人ニ不限ス  
シヨハ又ハ鐵道構内へ入り立入者ハ鐵道掛ノ者ヨリ即刻構外へ立  
去ラシムヘシ

第十二條 旅客ノ荷物紛失毀損取扱方ノ事 旅客手廻リ荷物其外所  
持ノ品アリハ紛テ之カ為ニ別段ニ貨金ヲ拂ヒ其受取証書ヲ取置カサ  
レハ若シ紛失毀損等アルハ政府ニ於テ關係セサルヘシタトヒ貨金ヲ  
拂ヒ証書ヲ取置トモ其毀損紛失等ヲ償フハ只旅客自用衣服ノ三ニ止  
マリ且償金モ五十圓ニ過ルコトナシ

第十三條 高金及ビ大切ノ物品紛失毀損ニ関スル事 金銀紙貨  
幣郵便切手為替會社通用券為替手形約定証書金銀受拂証書地所建家  
沽券諸繪圖書画古器金銀玉石鍍金及諸彫錫細工物時計類其衣類或  
ハ玩佩物ノ粧飾ニ混作ノ品類及硝子器類陶器漆器酒類蠶繭絹布生  
熟糸等ノ品物運送方ニ付テハ其品柄并價高等ヲ明白ニ其掛へ申立増  
賃金ヲ拂ヒ紛失毀損等受合シ分ノ外ハ紛テ政府ニ於テ之ヲ償ハス

第十四條 牛馬獸類運送ノ事 牛馬及其他ノ獸類ヲ運送スルニ其持  
主或ハ送り人ヨリ其獸類ノ價ヲ運送掛へ申出相當ノ増賃金ヲ拂ヒ受  
合証書ヲ取置ヘシ若シ増賃金ヲ拂ハス受合ヲナサルハ如何程高  
價ノ獸類紛失損害アルハ牛一疋金二十圓以上馬一疋或ハ乳牛一疋二

金五十圓以上羊或ハ豚一疋ニ金五十圓以上ヲ政府ニ於テ償フコトナシ  
第十五條 砲發ヲ禁スル事 何人ニ不限車内ハ勿論鐵道線及其他構  
内ニテ砲發スルヲ禁ス

第十六條 爆發質アル危害物運輸ヲ禁スル事 鐵道寮ヨリ追テ公告  
スルマテハ火藥及ビトロリヤムテロシンチイルノルンタイニ石炭油  
等ヲ云硝性并爆發質燃燒管等ノ物品ハ運輸セサルヘシ

第十七條 荷物目錄ヲ渡スヘキ事 運送ノ諸荷物ヲ鐵道掛ノ者へ引  
渡シ又ハ受取ノ度毎ニハ右荷主或ハ宰領人ヨリ其品柄數量及ヒ姓名  
ヲ記シテ掛リノ者へ差出スヘシ

第十八條 物品并畜類損害償方定限ノ事 鐵道ニテ運送スル物品并  
畜類紛失損害アリトモ鐵道掛リノ怠惰疎漏ヨリ起リシニ非サレハ政  
府ニ於テ之ヲ償フコトナシ

第十九條 荷物運送賃金ノ事 何人ニ不限荷物運賃ノ催促ヲ受テ尚  
拂ハサルハ其荷物ノ全部又ハ部分ヲ留置キ若又其荷物既ニ他所ニ  
運送セシハ其後同人附屬ノ荷物鐵道掛リへ送り來ルコトアルハ之  
ヲ留置キ同人へ告知ラセタル上ニテ滯金高程ノ品ヲ入札公賣シ其滯  
金下諸入費ヲ引取殘金殘品ヲ同人へ返スヘシ又時宜ニヨリ右ノ取計  
法ナサス法官ニ訴ヘテ賃金并入費等ヲ取立ルコトモアルヘシ

○ 錄

第二十條 規則ニ隨ハサル者ノ專 何人ニ不限諸事前条ノ規則ニ隨  
 ハスハ乗車及ヒ荷物ノ運送ヲ許サハルヘシ  
 第二十一條 規則等ノ變章布達ノ專 此規則中變章及加除アルトキ  
 ハ變章告達スヘシ  
 第二十二條 荷物運送時受取ノ專 諸荷物ノ運送ヲ引受ルヘハ列車中  
 餘地ノ有無ニ應スヘシ  
 第二十三條 此規則ヲ施行スルカタメニ夫々法官ニ訴ヘ犯罪人罰シ方  
 等ノ裁判ヲ乞フ手順ハ鐵道頭或ハ鐵道支配人ノ間ニテ其取扱アルヘシ  
 第二十四條 旅客并荷物ノ運賃ハ時宜ニ隨ヒ變章アルトモ其變章毎  
 ニ八二週日前ニ告達スヘシ尤鐵道頭鐵道支配方及運送頭取ノ間ニ於  
 テ前条ノ如キ告達ナク臨時ニ常例ヨリ下等ノ運賃ヲ以テ別ニ列車ヲ  
 仕立ルヘモアルヘシ  
 第二十五條 此規則來ル五月七日ヨリ施行スヘシ  
 右之條々此度確定候事  
 六年三月太政官御布告第百一號  
 壬申第四百十七号布告鐵道犯罪罰例別紙ノ通改正相成候條此旨相達候  
 事

鐵道犯罪罰則

第一條 鐵道掛ノ者總テ鐵道上ニ関カル事務取扱中醉ニ乘シ無狀ヲ現  
 ハスニ於テハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス若シ其職掌怠惰輕忽ニヨリ  
 鐵道旅客ノ危難トモナルヘキ取扱アルキハ其事情ニヨリ五百圓以内  
 ノ罰金又ハ三月以内ノ懲役或ハ禁錮ニ處ス  
 第二條 規則第四條ニ記スル処ノ不法ヲナス者ハ二十五圓ノ罰金或ハ  
 三十日ノ禁錮ニ處ス  
 第三條 規則第五條ノ禁ヲ犯スモノハ十圓以内ノ罰金ニ處ス  
 第四條 規則第六條ノ禁ヲ犯スモノハ拂ヒタル貸金ヲ没シ二十五圓以  
 内ノ罰金ニ處ス  
 第五條 規則第七條ノ禁ヲ犯スモノハ拂タル貸金ヲ没シ十圓以内ノ罰  
 金ニ處ス  
 第六條 規則第八條ニ記セル所行ヲナス者ハ拂タル貸金ヲ没シ二十五  
 圓以内ノ罰金或ハ三十日以内ノ禁錮ニ處ス  
 第七條 規則第九條ニ記スル処ノ不法ヲナスモノハ五十圓以内ノ罰金  
 又ハ六週間以内ノ懲役或ハ禁錮ニ處ス  
 第八條 規則第十條ノ禁ヲ犯スモノハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス  
 第九條 規則第十一條ノ禁ヲ犯スモノハ二十五圓以内ノ罰金或ハ二十  
 日ノ禁錮ニ處ス

○ 鍊

第十條 規則第十五條ノ禁ヲ犯ス者ハ二十五圓以内ノ罰金ニ處ス  
 第十一條 規則第十七條ニ記スル所ノ諸荷物品書其外ヲ故ラニ出サス  
 或ハ故ラニ欺偽ノ品物ヲ出ス者ハ三ヶ月以内ノ懲役又ハ禁錮或ハ其  
 品物一噸千七百斤ヲ云コトニ二十五圓ノ罰金ニ處ス一噸以下八十圓  
 尤一罰ノ贖金高五百圓ニ過ギス  
 第十二條 鐵道附屬品ヲ毀損スル者ハ第七條ニ照シ罰ヲ科スルノ外其  
 毀損物ノ代價ヲ償ハシムルヲアルヘシ  
 但其償金ノ追徴モ鐵道寮ヨリ法官ヘ乞フ代ハ法官ニ於テ追徴スヘ  
 シ

七年五月布達第十四號

明治六年第三百十六号ヲ以テ公布告相成候鐵道貨物運送補則并追加及ヒ  
 壬申九月相達候鐵道列車賃金表共別紙ノ通改正ノ上来ル六月十五日ヨ  
 リ施行候條此旨布達候事 別紙專之

○電信之部

六年八月太政官御布告第三百號

各所電信線架設ノ後追々落成候ニ付通信規則別冊ノ通相定候條此旨布  
 告候事

大日本政府電信取扱規則

○第一 電信ハ瞬間萬里音信ヲ通スル至緊至妙ノ機關ナリ然リトモ  
 不斷遲延ノ憂ナク誤謬ノ煩ナク全達センコトハ受合難シトス何ントナレ  
 ハ信線器機等不應ノ損傷ニ逢ヒ或ハ書寫ノ不明ヨリ不通遲延誤謬等ノ  
 事故アレハナリ是皆止マ得サルノ致ス所ニシテ此等ノタメ用辨チ欠キ  
 商業其他ニ付テ損失ヲ受ケ或ハ其事ヨリ起ル損失アリテ苦情ヲ訴ルト  
 金モ一切政府ニ於テ關係或ハ辨償セサルヘシ但其用弁ヲ誤ルコト實ニ我  
 政府ノ電信線ヨリ起ルコト明白ナル代ハ其通信料ヲ指戻スヘシ然レモ此  
 莫ハ政府ノ信線ニ係ル分ニシテ若シ他方ノ線ヲ連用スル代ハ其線  
 ニ係ル分ハ總テ出状人ノ損失ナルヘシ○第二 通信ノ賃料ハ出状人ヨ  
 リ前拂タルヘシ○第三 音信又ハ母歐時氏萬國電信ノ假字ヲ以テ傳送ニ  
 用ユヘキ諸邦ノ語若クハ羅匈語ヲ用ユヘシ○第四 出状人ヨリ頼三出  
 タル音信紙ハ句點ヲ除クノ外總テ賃料ヲ拂フヘシ尤音信初発ノ局名及  
 七年月日時刻符等ハ無賃ニテ届先ノ音信紙ヘ書入レ相渡スヘシ○第五  
 和文ハ宛名住所ヲ除キ假字二十字迄ヲ一音信ト定メ其餘八十字ヲ限リ  
 トス之ヲ増ス毎二賃料ヲ加フヘシ十字ニ滿タサルモ又同様ナリ横文ハ  
 宛名住所ヲ加ヘ二十語ヲ定メトシ其餘八十語ヲ限リトス之ヲ増ス毎二  
 賃料ヲ加フ十語ニ滿タサルモ又同様ナリ○第六 横文中辭ト雜リタル

工部省

○電信



ル数字ハ一字ヲ一語ニ充テ通算ス接續シタル数字ハ二字ヨリ五字迄ヲ  
 合セテ一語ニ充ツ六字以上モ此例ニ準スヘシ○第七 次第番号ノ順序  
 ナ表スルタメニ字ヲ數ニ添エルハ其一字ヲ數字一字トナシテ算ス  
 ハシニ添テ數字ニ充テ一語ノ價ヲ拂フカ如シ○第八 洋人ノ氏名ヲ畧シ  
 頭字ノ二字ヲ用ルハ二字ヲ三語ニ充テ算スヘシチヨンモリスチモト普  
 スルカ如シ○第九 七綴以下ハ一語トシ七綴以上ハ二語ト見做スヘシ  
 ○第十 横文中切要ノ語ヲ表スルタメニ毎字下ニ線ヲ引タル語ハ許多  
 ノ數ト魚モ各々二語ト算ス尤モ一文章下ニ一線ヲ以テスルハ只一語  
 ナ増スインウルトコトマ○並フラツケトモ同様ナリ○第十一 電  
 信ナキ遠方ノ地ニ通信ヲ乞フ者ハ郵便ヲ以テ送達ス仍テ届方便利ノ地方  
 ニ於テ受方ノ局ヲ定メ其局名ヲ宛名ノ下ニ書入スヘシ且ツ其語數丈ノ  
 賃料ヲ拂ヒ外ニ郵便ノ賃料モ加ヘ拂フヘシ○第十二 出状人返信料ヲ  
 豫メ拂ヒ置クモ妨ナシトス此時ハ其音信本文ノ終リ即チ出状人姓名ノ  
 前ニ幾語返信料拂濟ト記載スヘシ但二十語以下ノ答書ヲ得ント欲セハ  
 只返信料拂濟トノ三書入其語數ノ賃料ヲモ又拂フトス○第十三 返  
 信料前拂ノ高ハ出状人ノ元通信料三倍ノ價ニ越エヘカラス○第十四  
 前条ノ返信ハ通例ノ音信ト見做テ取扱フヘシ○第十五 誤謬ノ憂ヲ防  
 クタメニ音信ヲ繰返スヘシ得ヘシ此ヲ名ケテ書留電信ト云フ○第十六

工

○電

書留電信ハ局マニテ繰返シ誤謬ノ有無ヲ正シ而テ届渡シノ時刻並受取  
 人ノ姓名又ハ不届キノ事實等詳細出状人ノ報知スヘシ○第十七 書留  
 ト云語ヲ出状人姓名ノ直下ニ記載スヘシ且其賃料ヲモ拂フヘシ○第十  
 八 書留音信料ハ通常音信料ノ半價ヲ加フヘシ七年二月改正○第十九  
 音信中解シ難キ語アリテ再ニ通信ヲ乞フ者アルトキハ假ニ其賃料ヲ收  
 領シ往復ノ上若シ送致セム所ノ過失ニ決セハ其賃料ヲ返スヘシ或ハ送  
 ノ先方ニ届キシヤ或ハ不届キ其事實報告ヲ求メ得ヘシ此類ハ届先名宛  
 ノ直下ニ報知依頼ト記載シ通信料ヲ拂フヘシ然レトモ此カタメニ音信  
 ナ繰リ返スヘシナサス○第十九 前条ノ報知ヲ乞フ者ハ更ニ一音信料  
 賃料ヲ拂フヘシ○第二十 官報並私報トモ符徴ヲ以テ通信スルヘシ得  
 ヘシ其符徴ハ數字又ハ羅馬字ヲ用ユヘシ但シ數字ト羅馬字トヲ併用ス  
 ハ其一部分符徴ヲ以テ記スルモ妨ケナシトス然レトモ其一部分ノ三ニ  
 用ユルハ通用文ト符徴文ヲ以テ記スルタメニ(一)括弧ヲ以テ符徴文ヲ圍  
 三置クヘシ之ヲ算スルニ及テハ數字又文字小讀終點其他句讀等一切合  
 加シ之ヲ五除シ其尚ヲ以テ語數トス若シ分數アレハ一語ト見做シ右通  
 用文ノ語數ヲ加以其全本文ノ語數トス○第二十三 符徴電信ハ書留電信ト取扱

ノ法同一規ニシテ其賃料モ又同一ナリ○第九四 一音信ヲ其同邑中ニ住スル数名ヘ送達スルコトヲ得ヘシ尤寫シ手数料トシテ横文ハ每一通九五錢和文ハ每一通七錢ヲ拂フコトス其届賃料ハ定規ノ通り拂フヘシ○第九五 電信不通ノ節ハ音信ヲ最も近傍ノ通信無差支局ヘ郵便ニテ送達スヘシ○第九六 未タ傳送セサル間ハ出状ノ音信既拂フノ賃料共取返スコトヲ得ヘシ己ニ傳送中ナレハ其賃料ハ損失タルヘシ○第九七 音信ノ報知先ヘ達スルヲ留ント欲セハ新ニ賃料ヲ拂ヒ其赴テ未局ヘ申送ルヘシ○第九八 音信ノ送達ニ付不規則アルヲ出状人ヨリ歎訴スルハ當然ナレトモ其延引誤謬等ヲ申立ル片ハ必ス受取人ノ所持スル電信報ノ寫ヲ添テ引合フコトス○第九九 宛名住所等認方ノ誤謬ニヨリテ其音信ノ届先ニ達セサルハ本人ノ過チナレハ其誤謬ヲ改ント欲セハ更ニ其賃料ヲ拂フヘシ故ニ其名宛ハ充分ニマリアキコトニテ何府何區何番何某或ハ其職業會社ノ名号等マテ詳細ニ記スレハ其電信ノ速力ニ届キ誤ナク達スルニハ肝要ノコトナリ○第三十 誤謬ニテ受取タル賃料ニ不足アル片ハ出状人ヨリ之ヲ補ヒ拂フコトス若シ過余ナルモノアレハ之ヲ同人ニ還付スヘシ

七年八月布達第二十一號  
本年七月中第十八号ヲ以テ電信支線人民架設差許候ニ付テハ右規則別

冊ノ通確定候條此旨布達候事

電信私線規則

○第一條 電信機線架設ノ代民費又ハ商會等ヨリ私費ヲ以テ建築イタシ度旨出願ノ旨ハ許可スヘキ事○第二條 私線ヲ許可スルトモ必ス官線ニ接続セシムル事○第三條 官線架設アリテ來往ノ音信無差支場所東京ヨリ横濱ノ如キ遠京ヨリ長崎ニ至ル等ハ私線ヲ許ササル事○第四條 若シ官線ノ未タ設ナキ地方ニ於テ私線ヲ願フモノハ必ス便宜ノ官線ニ接続セシムル事○第五條 架線建築器械据付等電信寮ニテ處分シ其入費ハ願人ヨリ償却セシム○第六條 機関扱ノ者ハ當分電信寮ニテ相撰差出入ヘシ尤費用ハ願人ノ持タルヘキ事○第七條 私局用ノタメ技術修業為致度望ノ者ハ電信寮ニテ教授受ヘキ事○第八條 音信取扱并局詰心得方等總テ電信寮定規ノ通相守可申事○第九條 音信料ノ儀ハ各線ノ比較ヲ以官許ヲ經テ可相定事○第十條 官局ト私局ト往復スル音信料其料ノ三分一ヲ官局ニ納メ三分二ヲ私局ニ收入スヘシ○第十一條 何レノ地ヨリ発スル片官私線上ニ經過スル音信ハ其発信局ニ於テ定表ノ通全線ノ賃料ヲ取立官私收入ノ割合ヲ以計算スヘキ事

七年九月九日電信寮廣告

電機通信開業以來公私一般ノ便益ハ申迄モ無之目今一日モ不可欠之要

○電



電報追尾音信配達方法別紙ノ通相定本月十五日ヨリ施行候條此旨布達候事

一 信書届先ノ者他所へ轉居東京ヨリ横濱或ハ長崎へ其他同地方ニテモ他區へ轉居スルノ類又ハ旅行等ノ節右新居所へ其信書ヲ再送セント欲スルタメ出状人豫メ其愿アラハ頼信紙へ追尾ノ文字ヲ記入電信局へ頼出ヘシ此音信ハ受取人ノ旧住所ニ於テ届先ヲ書改サセ直ニ之ヲ其新名所へ送達スヘシ

但新名所ヲ申出サルカ又ハ再送スト由モ受取人ヲ尋得サル片ハ其信書ハ電信局へ留置クヘシ

一 追尾音信稅ハ初度ノ着信局マテ出状人ヨリ之ヲ收納シ且追尾ノ字數モ税金ヲ拂フヘシ

一 初度ノ着信局以外現届先マテノ音信料ハ受取人ヨリ收納スヘシ

一 何人ニテモ電報ノ來ルヘキ心當リアル者其次弟及ヒ轉徙ノ名所等ヲ豫メ電信寮へ陳述シ置キ其人へ宛タル音信到來次第之ヲ其殘置キタル名所へ前數条ニ據リ再送セラルヘシ

一 追尾ノ依頼ナキ通常音信ト由モ轉徙ノ居所分明者三里以内ハ逐所之ヲ送達スヘシ

○津港之部

二十三丁

五年十月太政官御布告三百二十二號

府縣

御國內海岸燈臺建築ノ儀ハ辛未五月中被仰出ノ旨モ有之候處向後内外船舶之航港并開港場之標的ヲ除ク外各地港内其他一隅便利ノ爲メ燈標ヲ設置致シ候儀ハ其地方ニ於テ公私ノ差別ナク便宜次第建築被差許候條願出候向ハ實地ノ摸樣詳細取調繪圖相添工部省へ可申出候尤燈標ノ形質點燈ノ方法ハ御國內齊一ノ規則ヲ以施行致シ候旨ニ付總テ同省ノ差圖ヲ請可取計事

但私費ヲ以建築ノ向ハ追テ稅則一定候迄外國船艦ヲ除クノ外出入津港々ヨリ年々其場所相當ノ燈費取立サセ不苦候條右取立ノ方法并ニ金高工部省へ可差届事(但書七年九月改正)

六年八月太政官御布告第二百九十號

各所設置ノ礁標浮標ハ内外航路一般ノ標的ニシテ最モ緊要ナルモノニ候然ルニ漁人等浮標へ船ヲ繫キ或ハ礁標ノ階梯ニ上リ候者間々有之趣右等ノ所業ヨリ竟ニ標的ヲ破損シ内外ノ航海者危難ニ陥リ候テハ以テ外ノ儀ニ付心得違無之様可致此旨布告候事

○司法省

分局 大審院 各上等裁判所

司法省

○津港

各地方裁判所

○條制之部

六年七月布達第百一十號  
 闘犬之儀各地方一般可爲嚴禁萬一今後違犯之者於有之ハ違式誣違條例  
 第四條及六十條ニ照シ罰金申付候上其犬ヲ取上ケ可及打殺候條此旨各  
 管下へ下へ不洩様可相達事

○貸借之部

六年三月布達第三十八號  
 金穀貸借利息ノ儀從來ノ仕來ニテ出訴前月迄ハ分面已計算致シ來候處  
 以來ハ裁判決定迄ノ利息ヲモ計算致スヘキ事  
 六年三月布達第四十三號  
 預ケ金穀 賣掛代金 諸職人手間代 地代 店賃 立香  
 金穀 敷金 証據金 受員金 手附金 小作金穀 村  
 入用割合金穀 雇人給金 飯料 諸品ノ損料 無利足貸金穀  
 右之類ニテ金穀等相渡スヘキ期限ニ臨ニ渡方延滞致シ候節ハ其期限  
 ノ日且期限ナクシテ金穀人用次第可相渡旨ノ約定ヲ爲シタル分ハ渡シ

司法省 ○條制

方ノ掛合ヲ受候日ヨリ何レモ利息ヲ生シ可申筋ニ付其節ハ双方示談ヲ  
 以テ利息ノ歩合ヲ定メ証書ヲ受取渡シ致スヘキ若シ其儀ナクシテ追テ  
 訴訟ニ及ラ時ハ明治六年第九十二號布告ニ因リ處分致シ候條此旨可相  
 心得候事  
 但債主利息ヲ請求シテ負債者承諾セサル時ニ限リ本文之處分ニ及ラ  
 へシ若シ双方示談整フカ又ハ債主ニ於テ請求ヲ爲サル分ハ此例ニ  
 非ス(但書七年八月追加)  
 六年三月太政官御布告第九十二號  
 金穀貸附ノ証文中ニ相當ノ利息又ハ利息トノニ記載致シ候者等間々有  
 之裁判上不都合ニ候條今後右様ノ類法律上ノ利息ハ金高一ケ年ニ付利  
 息百分ノ六ニ定メ裁判致シ候條此旨可相心得候事  
 六年十月布達第七十四號  
 明治六年當省第三十八號金穀貸借利息ノ儀裁判決定迄算計可致旨及布  
 達置候處右ハ貸借ノ金穀返濟ノ日又ハ身代限配當金處分濟ノ日迄利息  
 ヲ計算致シ候儀ト可相心得此旨布達候事  
 六年十月太政官御布告第三百四十一號  
 舊藩ニ於テ郷印証文ヲ以金子借入候向有之候處証文面相對私借ノ體裁  
 ナルヨリ金主其村方へ返濟ノ儀督促ノ未遂ニ相手取及出訴候共村方ヨ

リ舊藩へ轉貸致シ候証據有之分ハ直ニ金主へ公債ノ處分可及候條右ノ類ハ金主並村方トモ所持ノ証書寫へ勘定書相添へ至急其管廳へ差出管廳ヨリ添書ヲ以テ大藏省へ可差出候此旨布告事  
但証書寫就ニ差出有之分ハ再出不及候事

十年九月太政官御布告第六十六號  
利息制限法左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 凡ノ金銀貸借ノ利息ヲ分テ契約上ノ利息ト法律上ノ利息トス

第二條 契約上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニシテ元金百圓以下ハ一年ニ付百分ノ廿二割二分以下トス若シ此限ヲ

超過スルハ裁判上無効ノ者トシ各其制限ニマテ引直サシムヘシ

第三條 法律上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ利息ノ高ヲ定メサル

并裁判所ヨリ言渡ス所ノ者ニシテ元金ノ多少ニ拘ラス百分ノ六六分トス

第四條 第二條ニ依リ定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金棒利等ノ名目ヲ用ル者アルハ總テ裁判上無効ノ者トス

第五條 返還期限ヲ違フルハ負債主ヨリ債主ニ對シ若干ノ借金罰金違約金科料等差出スヘキトシ約定スルコトアルハ概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於テ該債主ノ事實受ケタル損害ノ補償ニ不當ナル

ト思量スルハ之レニ相當ノ減少ヲ爲スコトヲ得

○訴訟之部

五年四月太政官御布告第二百二十三號

舊藩諸藩又ハ舊藩下之者へ米金ヲ貸附領内又ハ知行所之郷印証文ヲ取置候事件ヨリ起ル訴訟ハ相對之濟方ニ申付來候處右返濟方相滯下方難決

不少哉ニ相聞候ニ付相對之示談難行届者ハ自今訴狀取揚裁判ニ可及候條來ル七月晦日限リ其筋へ可願出候事

五年五月太政官御布告第五百十九號

官莖族其他寺院ノ名目ヲ以金銀貸附置候事件ヨリ起ル訴訟ノ者相對ノ濟方申付來候處右返濟相滯難決之旨相聞候ニ付相對示談難行届者自

今訴狀取揚可及裁判候條其筋へ可願出候事

五年十月太政官御布告第三百號

一 華士族率へ掛リ候金銀貸借ハ明治二年己巳六月郡縣ノ制被仰出候以前ノ分ハ裁判ニ不及候事

一 靜岡及ヒ仙臺會津其外再立ノ藩々再立以前ノ金銀貸借ハ裁判ニ不及候事

一 自今貴賤上下一般ノ人民互ニ期ヲ約ノ金銀貸借ニ如シ期ニ及デ不返

時内証屢催促ヲナスト雖モ期月後滿五年ニ至迄一度モ訴出サル者ハ裁  
 判ニ不及候事(但當七月以前ノ貸借分ハ此限ニ非ス)  
 一 從前ノ今後共家祿ヲ引當ニ致シ候金銀貸借ノ儀ハ一切裁判ニ不及候事  
 五年十月太政官御布告第百二十七號  
 平民相互ニ金銀借貸慶應三年丁卯十二月晦日以前ニ係ル者ハ一般裁判  
 ニ不及明治元年戊辰正月元日以後ノ分ハ裁判ニ及候事  
 五年六月太政官御布告第百八十七號  
 今般華士族平民共身代限規則被相定候條左之通相達候事  
 但當壬申八月朔日ヨリ施行可致事

華士族平民身代限規則

平民身代限抵償トシテ差押ヲ可カラサル品類  
 ○時服着番共(男女共各)一通死○夜具男女共各一通死○本人ノ職業ヲ為  
 スニ必要ナル諸物品但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等職業ニ必要ナル書  
 類器械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任ス可シ其直  
 段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者道具屋ノ類一人宛差出シ外人札人ト共二人  
 札致サセ村町夜人ニ於テ給人札ヲ比較ニ高札ヲ以テ其價ヲ定ム可キ事  
 ○食料 家族ノ人口ヲ量リ一ヶ月間用フル飯米ヲ殘ニ置ク可キ事但男  
 丁ハ一日ニ五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合婦人如少ハ四合麥ハ八合雜穀

ハ一升二合麥ノ事○鍋釜及炊具各一通  
 トシテ差押ヲ可ラサル品類 ○家祿ノ頃五年十月御取消○大小類男子  
 一人ニ付各一腰死○冠服男子一人ニ付各一通死○時服着番共(男女共各  
 一通死○夜具男女共各一通死○本人ノ職業ヲ為スニ必要ナル諸物品但學藝  
 ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等ノ職業ニ必要ナル諸類及諸器械品物等其金額  
 五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任スヘシ其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ  
 者(道具屋ノ類)一人宛差出シ外人札人ト共二人札致サセ(村)町夜人  
 ニ於テ給人札ヲ比較ニ高札ヲ以テ其價ヲ定ム可キ事○鍋釜及炊具類各  
 一通 右身代限リノ節ハ三十日間裁判所門前高札場並ニ本人家宅へ掲  
 示ヲ出シ其次第傳兼日限中追願ノ者ハ取札ノ上可懸置事(但新聞紙ヲ刊  
 行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ)○前條ニ記スル所ノ引殘スヘ  
 キ必要物件ノ内未タ代價ヲ拂ハサル分ハ賣主ヨリ日限内訴出シハ現品  
 ヲ取戻ス事ヲ得ヘシ但現在着用ノ衣服夜具ハ此限ニアラス○身代限ノ  
 物件ハ入札拂出ス可シ尤金銀器等ノ定價判然タル物品ハ真價ヨリ低  
 ク賣拂フヘカラス且ツ賣拂金ノ總額ハ其者ノ負債及ヒ物件ノ諸費用ヲ  
 償フニ過ク可カラズ(但入札拂日ヨリ三日前ニ其品物及ヒ場所時刻ヲ  
 裁判所門前並ニ其者ノ居宅及ヒ各地士民群集ノ所へ揭示シ及ヒ新聞紙  
 ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ)且ツ貸主借主ヨリ差出セ

○訴

司

ヒシ監定ノ者モ他人ト共ニ入札致サセ村(町)役人ニ於テ給人札ヲ比較  
 ニ高札ヲ以テ其價ヲ定メ之ヲ現金ニテ取立裁判所へ差出スヘシ  
 五年六月太政官御布告第百八十八號  
 貸金銀滞出人ニ付身代限申付候節以來ハ當人宅并各府縣裁判所門前高  
 松場等三ヶ所へ別紙案文ノ通相認メ六十日(六年二月改正)ノ間揭示致  
 候上身代限濟方可申付尤右ノ趣傳兼日限中追願致候分ハ取立鬼置可致  
 事

揭示案 一七年七月改正

何附

何之誰

右之者儀何町(村)何ノ誰ヨリ何々(其事目ヲ掲ク)出訴ニ及ヒ吟味ノ上身  
 代限申付ルニ付若シ何ノ誰へ係リ金穀其他諸取引ノ訴有之者ハ當何  
 日ヨリ來ル何月何日迄日數六十日內ニ當裁判所へ訴出ツヘシ右日限  
 過去訴出ルニ於テハ此度身代散金ノ分配ニハ不差加者也

揭示案

何附

何之誰

右之者借金出入之末吟味ノ上身代限申付ルニ付所持品左ノ通來何日

二人札拂爲致候條入札致度相望者ハ當日何時同人方へ可罷出者也  
 一 建家土藏  
 一 所持品 何  
 右何月何日人札拂  
 五年九月連第九號  
 凡動産不動産取引之詞訟ヲ審判スルニ原告被告双方ノ内一方ノ者負公  
 事ニ決スル時ハ日切濟方申付候上仍ホ不相濟ニ於テハ身代限申付候方  
 法ニ有之候處自今日切濟方ノ舊法ヲ廢シ一方ノ者負公事ニ相決直ニ濟  
 方不相成候時ハ身代限ノ方法ヲ執行可致事  
 五年九月太政官御布告第百七十五號  
 父兄ト同居ノ子弟或ハ別居シテ財產ヲ異ニスルモノ又ハ父既ニ家格ヲ  
 其子ニ譲リ隱居別宅ニテ財產ヲ異ニスル者自今一已ニ金銀借受條分其  
 証券中本家ノ戸主保証ノ調印無之上ハ貸主ニ於テ本家ノ財產ヲ目的ト  
 一貸ニ與フル筋無之候ニ付若シ右等ノ者共返金相帶訴訟ニ及ヒ候節同  
 居ノ者ハ其身所持ノ品物而已分産異居ノ者ハ其財產ノニテ以テ之ニ當  
 テ身代限ニ裁判申渡候條爲心得此段相違候事  
 六年三月太政官御布告第八十八號  
 僧侶借財滯出入ニ付身代限規則左之通被相定候條此段相違條事

司

○訴



借借身代限規則

抵償トシテ差押ヲ可ラサル品類

○食料 寺内ノ人口ヲ量リ借借ハ一日ニ五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合  
 尼及婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一升ニ合宛一ヶ月間用フル飯米ヲ  
 殘ニ置クヘキ事○建物 法用ニ必要ナル箇所(但本堂等へ建添候ハ榮耀  
 ニ屬スル箇所ハ此限ニアラス)○寄附帳ニ記載スル部分○什物帳ニ區別  
 ニテ記載スル古來傳承ノ宝物並法用ニ必要ナル部分○法衣寺主並所化  
 及尼共各一通宛○時服着香共等主並所化及婦女共各一通宛○夜具等主  
 並所化及婦女共各一通宛○鍋谷及炊具類各一通○本人職業ヲ爲スニ必  
 要ナル金額五十兩ニ至ル迄ノ物品ヲ差除ク等其他ノ方法ハ華士族平民  
 身代限ニ同シ

六年七月太政官御布告第二百五十二號

負債者身代限ニ遇フ節其者へ對シ貸金穀其他義務ヲ得ヘキ者定約期限  
未滿内ノ分是置振左ノ通破定候條此旨相違候事

○第一條 貸金銀又ハ義務ヲ得可キ者定約期限未滿内ニハ訴出ルコトヲ  
 許ササル規則ナレヒ其負債者又ハ義務ヲ行フヘキ者右期限未滿内ニ身  
 代限ニ遇フ時ハ訴出ルコトヲ得ヘシ○第二條 定約期限未滿内ニ訴出者  
 ハ滿期後訴出ル者ト同一ノ權利ヲ有シ身代限財產羅賣金ノ分配ヲ受ル

司

○訴

コトヲ得ヘシ○第三條 請人證人等連印ニテ本人返濟相滯ルニ於テハ引  
 受返濟可致ノ明文之レアル證書ヲ取置タル者ハ本人身代限財產羅賣金  
 ノ分配ヲ受ケ尙ホ不足アラハ滿期ノ時ニ至請人証人ニ掛リ之ヲ訴ルコ  
 トヲ得ヘシ○第四條 身代限ニ遇フ者期限未滿内ノ者ニハ滿期ノ時ニ至  
 リ返濟セシト欲スル時ハ別段請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又ハ貨  
 物ト爲シ違變ナキヲ證明メ原告人ノ兼諾ヲ求ルヲ必要トス○第五條 負  
 債者滿期ヲ保スル爲メ改テ請人ヲ立請人ヨリ動不動産引當又ハ貨物  
 ト爲シ違變ナキヲ證明メ原告人ノ兼諾スル時ハ其原告人ハ此回ノ身  
 代限財產羅賣金ノ分配ヲ求ムルコトヲ得ヘカラス○第六條 定約期限未  
 滿内ノ債主ハ身代限ニ遇フ負債主ニ對シ期限未滿内ニ訴フルモ滿期後  
 ニ至リ訴フルモ其者ノ情願ニ任スト雖モ身代限ニ遇フ者ノ動不動産ヲ  
 引當又ハ貨物ニ取リ置タル債主ハ右動不動産ヲ身代限ノ羅賣ヲ爲スニ  
 付已レノ受取ル可キ金高ヲ求ルコトヲ得ヘキ而已ニテ羅賣ヲ爲スコトヲ拒  
 ムコトヲ得可ラス○第七條 動不動産引當又ハ貨物ニ取置タル者ハ其財  
 產羅賣金ノ内ニテ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ其定約ノ證書ニ據  
 リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ル可キノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ羅賣  
 金分配ノ規則ニ從ヒ引當又ハ貨物ヲ取置タル者ニ分配ス可キ金高ヲ引  
 渡スヘシ○第八條 引當又ハ貨物ヲ取置カサル金穀ノ債主定約期限未

満内ニ訴出ル時ハ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ定約ノ証書ニ據リ  
 處分ノ時迄ノ金高ヲ計算シ受取ヘキノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金  
 分配ノ規則ニ從ヒ處分ヲナス可シ  
 六年十二月太政官御布告第四百二十二號  
 地租不納ノ者身代限ヲ以取立ヘキ時ハ素ヨリ他ノ負債關係致ス筋無之  
 ニ付自今六十日間揭示スルニ及ハス直チニ處分可致候條此旨布告候事  
 七年九月達北三號  
 各裁判所 各府縣  
 金穀ヲ借リ返済ヲ爲シ能ハサル者裁判所ノ處分ニ因リ身代限ニ遭ヒ候  
 トキ所有物ノ内他人ヘ貸付置キタル金穀ノ証文之レアル節ノ取扱振明  
 治五年壬申第四十號ヲ以テ相違置候處詮議次第是通改其候條此旨相違置  
 ①第一條 各裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ爲スニ當リ身代限ニ遭フ者  
 ノ物件ノ内ニ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ヘ貸付置キタル金穀ノ証文有之  
 時ハ其証文ノ定約期限ノ満未滿ヲ論セス証文ニ記名シタル負債主ヘ眞  
 僞ヲ尋子無相違時ハ其負債主ヨリ証文面ノ通り可受取旨身代限ニ遭フ  
 者ノ債主ヘ申渡シ別紙雜形ニ做ヒ証文ニ裏書ヲ爲シ其債主ニ可相渡事  
 ②第二條 前條ノ場合ニ於テ債主ノ証文ヲ受取ルヲ好マサル時ハソ  
 ノ証文ハ身代限ニ遭タル者ニ所持致サセ置クヘキ事(但シ定約満期ノ証  
 文ニテ負債主ノ家産些少ナルモ身代限ニ遭フ者ノ債主ニ於テソノ負債

主ノ身代限ヲ以テ現金ノ割賦ヲ受度旨申立ルニ於テハ望ノ通處分スヘ  
 キ事③第三條 債主數名ニ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ヘ貸付置キタル  
 金穀ノ証文一通又ハ數通ナル時ハ數名ノ債主ニ入札致ダサセ落札ノ金  
 員ヲ以テ其落札シタル債主ト其他ノ債主トヘ金高ニ應シ配當シ其落札  
 ノ証文ニハ一通毎ニ第一條ノ方法ニ依リ處分スヘキ事(但シ數名ノ債主  
 盡ク入札ヲ好マサル時ハ第二條ノ處分ニ可及事)④第四條 証文ヲ落札  
 シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取リタルハ其金員中  
 ヲリ已レノ受取ルヘキ金高ト之ヲ受取ルニ付テノ諸入費ノ金高トヲ引  
 去リ其餘金ハ証文ニ記載ナル債主ニ返シ而シテ右ノ計算ヲ爲シタル  
 明細勘定書ト餘金ヲ返シタル受取書トヲ以テ裁判所ニ届出ツヘキ事  
 第五條 若シ証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ  
 受取トスルニ証文ニ記名シタル負債主モ亦タ身代限ニ遭ヒテ証文ニ  
 記シタル金員ノ全部又ハ幾部ヲ返シ能ハサルトキハ証文ニ記名シタル  
 負債主ヨリ証文ヲ落札シタル債主ニ對シ右ノ部分ノ金員ヲ身代持直次第  
 返済スヘキ旨ノ証文ノ裏書ヲ裁判所ヨリ受取ヲ得ヘキ事(但此時裏書ニ  
 身代限ニ遭タル者ノ裏書証文ヲ持出ヘシ裁判所ニ於テハ之ニ金員ノ差  
 引ヲ記載シニ通ノ証書ヲ一綴ニシテ下附スヘシ)⑥第六條 証文ヲ落札  
 シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ルヘキ期限ニ至ラサ

○訴

ル時証文ニ記載シタル債主即チ是ニ身代限ニ遭ヒシ人己ニ身代ヲ持直  
シタルトキハ直ニ其人ニ對シ再ヒ金穀ノ返済ヲ請求スルヲ得ヘキ事  
証文裏書雛形  
裏書ノ旨主何ノ誰儼年號月日身代限申付候ニ付此証文ハ入札ヲ以テ渡  
ス時ハ此間ニ入札ヲ以テノ五字ヲ書加フヘシ其府縣管下其國其郡其基町  
村何之誰ヘ相渡候條此証書ノ金額ハ右何之誰ヘ濟方致候上其段當裁判  
所ヘ可届出事

八年四月太政官御布告第六十三號

金銀其他借用証書中借主數名連印ニテ各自分借ノ員數ヲ記載セサル分  
ハ右連印中失踪又ハ死凶ニシテ相續人ナキ者等有之トモ其借用シタル金  
銀其他ノ總額ヲ其連印中現在ノ者ヘ償却可申付候條此旨布告候事(但右  
証書中分借ノ員數無之トモ別ニ分借ノ明証アルハ此限ニアラス

八年四月太政官御布告第五十三號

地所ノ實人書人ハ尋常ノ私約ト違ヒ戸長役場ノ帳簿ニ記載シテ與書割  
印モ之レアル公正ノ証書ニ付若シ身代限財產中實人又ハ書人ノ地所ア  
リテ其債主揭示中ニ訴出サル節ハ其地所羅賣代價ノ中ニテ債主受取ルヘ  
キ元金高ニ羅賣金配當ノ日迄ノ利息ヲ加ヘ第壹番ニ引去リ裁判所ニ於  
テ之ヲ糊封シ掛リ官負兩名調印ノ上戸長役場ニ預ケ置キ後日債主願

出次第相渡ヌヘク候條此旨布告候事

八年六月太政官御布告第百二號

明治六年六月第百九十五號布告金穀貸借請人証人辨償規則本年十月一  
日ヨリ左ノ通改正候條同日以後借用証書ヘ加印候者ハ改正ノ通可相心  
得此旨布告候事(一)八年七月改正

金穀貸借請人証人辨償規則

○第一條 金穀借用返済相滞リ本人身代限濟方申付候上不足相立候節  
ハ其不足ノ分請人証人ヘ濟方申渡シ猶不相濟ニ於テハ其請人(証人)ハ勿  
論其相續人ニ至ルマテ身代持直ニ次第皆濟可致事○第二條 借主逃亡  
又ハ死去跡相續人無之時ハ其請人証人ヘ濟方申渡シ候上不相濟ニ於テ  
ハ身代限申付猶不足相立候ハ其請人(証人)ハ勿論其相續人ニ至ルマテ  
身代持直ニ次第皆濟可致事○第三條 身代限申付候上不足相立身代持  
直次第皆濟可致旨左ノ雛形ノ通裁判所ニ於テ其原証文ノ裏ヘ記シ押印  
ノ上貸主ヘ可相渡置事

裏書雛形

第一條ノ節書式 表書ノ元利金何百何拾圓相滞ニ付借主何ノ誰身代限申  
付ル處不足相立(請人)(証人)何ノ誰ヲモ身代限ヲ以辨償爲致都合  
金何百何拾圓ニ相成ニ付右請取リ殘何百何拾圓(借主何ノ誰

○詠

請人(証人何ノ誰ハ勿論其相續人ニ至ルマテ身代持直ニ次第皆濟可致  
モノ也

年月日

某裁判所

第二條ノ節書式 表書ノ元利金何百何拾圓借主何誰逃亡(死去跡相  
續人無之ニ付請人)(証人何ノ誰ハ身代限ヲ以テ辨償申付ル處金何百  
何拾圓ニ相成ニ付右受取殘リ何百何拾圓(請人)(証人何ノ誰ハ勿論  
其相續人ニ至ルマテ身代持直ニ次第皆濟可致モノ也

年月日

某裁判所

五年十月布達第二十二號

本年二月太政官第二百九十五號ニテ被仰出候次第ニ付左ノ件奇心得事  
一人身ヲ賣買スルハ古來制禁ノ屢年期奉公等律名目ヲ以テ其實賣買  
同様ノ所業ニ至ルニ付娼妓藝妓等雇入ノ資米金ハ賍金ト見做ス故ニ右  
ヨリ苦情ヲ訴フル者ハ取札ノ上其ノ金額ヲ可取揚事

一同上ノ娼妓藝妓ハ人身ノ權利ヲ失フモノニテ牛馬ニ異ナラス人ヨリ  
牛馬ニ物ノ返辨ヲ求ムルノ理ナシ故ニ從來同上ノ娼妓藝妓ハ借入所  
ノ金銀并賣掛ケ帶金等ハ一切債ルヘカヲササル事  
但本月二日以來ノ分ハ此限ニアラス

一人ノ子女ヲ金談上ヨリ養女ノ名目ニ爲シ娼妓藝妓ノ所業ヲ爲サシムル

二十四下

者ハ其實際上則チ人身賣買ニ付從前今後可及嚴重之處置事

六年四月布告第六十九號

兩來郵便等ヲ以訴狀差出候者往々有之右ハ體裁ニ於テモ不都合ニ涉リ  
實際ニ於テモ裁判難相成候ニ付以來右等ノ書類指出候節ハ一切不取上  
其時々燒捨候條此旨相達候事

六年五月御布告第六十二號

夫婦ノ際已ムヲ得サルノ事故アリテ其婦離縁ヲ請フト雖モ夫之ヲ肯セ  
ルモ力爲メ數年ノ久ヲ經テ終ニ嫁期ヲ失ヒ人民自由ノ權理ヲ妨害ス  
ルモノ不少候自今右様ノ事件於右之ハ婦ノ父兄弟或ハ親戚ノ内附添直  
ニ裁判所ヘ訴出不苦候事

六年六月太政官御布告第二百五號

外國人訴訟規則別紙ノ通被相定候條此旨相達候事

外國人日本人ニ對シタル事件各開港場或ハ開市場裁判所ヘ訴出ル者ハ  
總テ左件ノ定則ヲ遵守スヘシ

聽訟手續

○第一章 訴訟ヲナス者ハ都テ書面ヲ以テシ原告人或ハ正ク法ニ隨テ  
委任ヲ受ケタル代人ヨリ左ノ箇條ニ從ヒ明細ニ認メ出スヘシ其訴狀或  
ハ他ノ書類ニテモ外國文ヲ以テ認アルモノハ裁判所ニテ要スル時ハ一々

司

○訴

日本文ヲ添へ出スヘシ

第一 原告人ノ本國并日本居留ノ住所氏名

第二 被告人ノ住所身分姓名

第三 求ル處ノ金額或ハ賠償ノ高

第四 訴訟ノ由テ生スル明細ナル情實

第五 取引中被告人ヨリ原告人ノ請取タル金及品物アレハ其品數ヲ

明細ニ記載スヘシ

○第二章 訴狀ノ書類ハ總テ本書ト真正ノ寫ト都合ニ通テ出スヘシ

○第三章 訴狀ヲ請取タル上ハ其証跡明確ナル片ハ直ニ其被告人ヲ

裁判所ニ呼出シ答辨ヲナサシムヘシ 証跡明確ナラサル片ハ裁判所

見込ヲ以テ原告人ヨリ證據金又ハ請合證書ヲ出セシ上被告及呼出スヘシ

○第四章 被告人ノ答辨モ亦自身或ハ正ク法ニ隨テ委任ヲ受タル代

人ニテ記名シタル書面ヲ以テ其訴狀中ノ件々ニ對シ一々答辨ヲ為スヘシ

○第五章 被告人ノ答書亦正副二本ヲ出スヘシ原告人一見セシテ

乞フ者アラハ副本ヲ以テ貸與ルヲ得セシムヘシ

○第六章 訴狀ハ被告人ヨリ書面ヲ以テ開申セル時日ヲ以テ順次ヲ

立テ裁判ヲ為スヘシ但事故アリテ原告人及被告人ノ双方或ハ其一方

ヨリ裁判猶豫ヲ願出ル時ハ此例ニ非

○第七章 審問及ヒ裁判ノ日限ハ前以テ双方ノ者共へ報知シ置キ一件  
始終ノ審問ハ凡テ之ヲ公ニスヘシ諸引合人ハ其訟庭ニ出テタル時ハ先  
引合トシテ差出セシ本人ヨリ引合人へ對シ一々其事蹟ヲ質問シ而シテ  
後相手方亦審問ニ乞ヒ右ノ引合人へ對シ真否ヲ質問スルヲ得ヘシ若シ  
又一方ノ人自ラ證明セシテ申立ル片ハ審問ノ令ニヨリ相手方之ニ對  
シテ質問スルヲ得ヘシ審問ハ此間何時ニテモ引合人ニ質問スヘシ引合  
人ハ引合ノ任ニ當ル前毫モ欺詐ヲ用ヒス誠實ニ應答ヲナスヘキヲ陳  
述スヘシ

○第八章 引合人ノ申立ヲ聞終リテ後尙一方ヨリ申立ルコトアリト乞フ  
時ハ其對論ヲ聞キ若シ双方ヨリ申立ルコトアル片ハ原告其對論ヲ始メ且  
ツ之ヲ終ルヲ得ヘシ

○第九條 原告人或ハ被告人孰レニテモ差出セル證據書ハ裁判所ノ免  
許ヲ得テ寫ヲ差出シ本書ヲ取下ルヲ得ヘシ

○第十章 譯官ヲ要スル片ハ双方自ラ之ヲ差出スヘシ若シ出シ能ハサ  
ルルキ裁判所ニテ相當ノ人ヲ得ヘキ片ハ裁判所之ニ命シテ辨セシノ其  
用ニ供セル方ヨリ相當ノ料ヲ差出サシムヘシ○第十一章 都テ訴訟ノ裁  
決ハ其裁判ノ條理ヲ書面ニ認メ訴狀ニ添へ置クヘシ孰レノ方ニテモ望  
ミアル時ハ右裁決或ハ意見ノ書及ヒ其訴訟ニ関シ差出セル書類ノ寫ヲ

司 ○訴

一見スルヲ得ヘシ○第十二章 裁決ノ後十日ヲ經サル内裁決ヲ受ケ  
シ方ヨリ相手方ニ掛合ノ上再ヒ裁判ヲ乞フ時ハ裁判所之ヲ聽用スヘシ  
尤裁判所ニテ以前ノ裁斷不當ナリト思フ時或ハ裁決ノ後新クニ所要  
ナル証拠ヲ得如此証拠ヲ差出スニ於テハ裁判所必ス以前ノ裁決ヲ更變  
スルノ理アリト思フ時ニ限ルヘシ

○第十三章 各開港場裁判所ニ於テ處斷ニル裁判ノ趣ニ不伏ナル時ハ  
司法省裁判所へ上告スルヲ得ヘシ

○第十四章 前條ノ如ク上告スルニハ裁決ノ後三ヶ月ヲ越ユヘカラス  
且右ノ情由豫メ相手方或ハ代人ノアル時ハ其代人ニ書面ヲ以テ告知ラ  
セ且其開港場ノ裁判所へモ豫メ其情由ヲ申立ヘシ但シ上告スルモノ故  
アリテ此期限ヲ延ニテ欲スルモノハ預メ金ヲナシ又ハ証書ヲ出シ豫  
メ願立ルルキハ事實不得止分ハ六ヶ月迄ハ裁判所之ヲ許容スヘシ既ニ上  
告ニ及フ時ハ其裁判ヲナシタル開港場或ハ開市場ノ裁判所ヨリモ司法  
省裁判所へ其情由ヲ告知シ双方ノ口書及其訴訟ニ関ニタル諸書付ノ寫  
ヲ差出スヘシ

○第十五章 裁判所ハ裁判ニヨリテ決定スル所ノ償還ハ速ニ之ヲ遂ケ  
ニムル様取計フヘシ

治罪手續

○第一章 日本人ノ罪科アルヲ外國人ヨリ申出ルルハ公然之ヲ吟味ス  
ヘシ原告人及其引合人トナルヘキト申出タルモノ或ハ被告人及ヒ其引  
合人タルヘキ者ヲ吟味スルヲ猶訴訟手續ニ於ケルカ如シ○第二章 裁  
判所ハ訴訟裁判ニ於ケルカ如ク罪科裁判ニ於テモ原告人或ハ被告人ヲ  
論セス何レノ方ニテモ其引合人トナルヘキ者ヲ呼寄セント欲スル片ハ  
其裁判所ノ權限ニ循ヒ之ヲ扶助ナスヘシ○第三章 罪科ノ裁決ハ書面  
ヲ以テシ被告人罪科ニ伏スルトキハ之ヲ普通至當ノ罪科ニ處スヘシ  
八年五月布達甲第三號

内國人ヨリ外國人へ係ル民事刑事ノ訴訟手續左ノ通相定候條此旨布達  
候事

一内國人原告ニテ外國人ニ係ル民事刑事ノ訴訟原告人其事由ヲ各開港開  
市場ノ府縣應ニ申出其應ノ添狀ヲ得テ被告人管轄ノ各國領事へ申訴スヘシ  
九年九月布達甲第十二號

明治八年當省甲第三號ヲ以テ布達候内國人ヨリ外國人ニ係ル民事刑事  
ノ訴訟手續中左ノ通相定候條此旨布達候事

第一條 内國人原告ニテ外國人ニ係ル刑事并民刑附帶ノ訴訟ハ檢事其  
他ノ警察官(東京ニテハ警視廳其他ノ府縣ハ地方官ニ於テ之ヲ兼ケ直  
ニ被告人管轄ノ外國領事工照會ニ裁判ヲ求ムヘシ

○訴

第二條 前條ノ場合ニ於テ犯罪ノ為ノ損害ヲ受タル者其償ヲ求ル民事ノ  
訴訟ハ總テ本人ノ望ニ任スヘシ

九年十月布達甲第十三號

昨明治八年五月當省甲第三號布達條中内國人ヨリ外國人ニ係ル民事ノ  
下刑事ノ二字ヲ刪除候條此旨布達候事

五年十一月布達第三十二號

郷印証文ニ舊領主舊地頭借用ノ金穀ニ無相違旨ヲ記載シテ其舊領主舊  
地頭之証印有之分ハ勿論假令証印無之トモ右ノ明文書加有之分ハ壬申  
十月八日第三百號ノ御布告ニ基キ裁判ニ不及候此旨相達候事

五年十一月布達第四十一號

太政官第三百號ノ御布告ニ基キ左ノ通可相心得此旨及布達候事

○第一條 華士族卒ハ掛ル金穀貸借ハ明治二年己巳六月廿五日以前之  
分ハ不取上翌廿六日以後ノ分ハ取上裁判スヘキ事(但華士族卒ヨリ平民  
ハ係ルモ本條ノ通タルヘシ)○第二條 預リ金穀ハ證文面預ケ金穀ノ名目  
ニテ利息有之又ハ預リ人ハ融通セシムル廉ヲ以テ禮金等ヲ請ル分ハ第  
一條ノ通心得ヘタ尤全ク預金ニテ利息禮金ヲ請ケサル分ハ及裁判若シ  
其金穀ヲ費用シ濟方不埒明時ハ斷獄課ヘ引渡ス可キ事○第三條 元士  
族卒當時歸農商ノ分及己巳六月ノ改革ニ付三代以下ニテ平民トナル者其旨

二十五日以前ノ証文ニテ其節士族卒ナレハ取上ヘカヲサレ事○第四條  
神職僧侶等ニ關スル分ハ貸借ノ節准士族卒ナレハ士族ヲ以テ取扱フ  
ヘキ事○第五條 明治二年己巳六月廿五日以前ノ金穀貸借ヲ新規証文  
ニ書改メタル分ハ不取上事○第六條 己巳六月廿五日以前ノ貸借ニテ  
華士族卒ハ掛ル分ハ御布告前審判又ハ對談日延中ト雖モ濟方不及裁判  
旨可申渡事○第七條 御布告前身分限申渡濟ノ分ハ申渡ノ通可及處分  
事○第八條 從前出訴吟味中和解シ家祿ヲ引當トナシ新規証文ニ改メ  
濟口聞届タルハ御布告ニ依リ不及裁判事○第九條 從前華士族ノ名目  
ヲ用ヒタル貸附金ハ第三百號ノ御布令ニ依リ取上ヘカヲサレ候事○第十  
條 動産ノ動産ヲ債主ニ質入シタル者ハ取上裁判可致事(附沽券狀ヲ  
債主ニ渡シ金穀ヲ借用セシ者モ本條ニ準シ質入ト看做ス可キ事

六年一月太政官御布告第九號

昨壬申歲第三百十七號平民相互金穀借貸慶應三年丁卯十二月晦日以前  
ニ係ル者一切不及裁判旨及布告候處動産金銀衣服家什等ノ搬運スヘキ  
物ヲ云フ不動産(土地家屋等)ノ運搬スヘカヲサレ物ヲ云フ實物ニ取候分  
ハ右期日以前ニ係ルト雖モ取上及裁判候條此旨相達候事

六年一月布達第四號

郷印証文ノ内當省壬申第三十二號ヲ以テ布達及置候處右ハ華士族卒ノ

私債ハ掛リ候儀ニテ舊藩債ハ格別ニ候條混同無之様可相心得候事  
六年一月太政官御布告第十號

金數貸附証文之内返濟期限無之歟又ハ出來次第返却可致等ノ証書取置  
後日訴出ルニ於テハ裁判申渡ヨリ十二ヶ月之内濟方可申付事

但從前今後共無年季貸附中内証屢返濟ヲ促スト雖モ滿五年ニ至ル迄  
一度モ不訴出者ハ裁判ニ不及候尤土地家屋等之貸債ハ不動産ニ屬ス  
ル儀ニ付滿五年ヲ過ルト雖モ可及裁判事

六年二月太政官御布告第五十一號

壬申二月十五日第五十號布告ノ通地所賣買被差許候上ハ質地ハ貸借上  
ノ事柄ニ付翌十六日以後ノ証書ニテ質地ヨリ起ル訴訟ハ糶賣ノ手續ヲ  
以テ濟方可申付事

但壬申二月十五日以前取引ノ質地ニテ年期明不受戻時ハ從前ノ通流  
地タルハキ事

六年三月達第四十六號

從前質地ヨリ起ル訴訟ハ証文中ニ年期明不受戻候ハ、流地ニ可致旨ノ  
文言有之分ハ期限ヨリニヶ月右文言無之分ハ十年ノ内訴出候ハ、受戻  
シ申付來候處當八月ヨリ流地文言有無ニ不拘年期明不受戻ニテ訴訟ヲ  
爲、時ハ明治六年第五十一號御布告ニ基キ二月又ハ八十年ノ猶豫ヲ

與ヘス直ニ糶賣ノ手續ヲ以裁判可致事

但原告被告双方熟儀ノ濟方ハ此限ニアラサル事

六年三月達第五十號

壬申第三百號御布告第三條但書ノ儀ハ左之通可相心得事

一 壬申七月以前ノ金數貸借ニテ既ニ同七月以前返濟期限過去タルハ同  
七月ヨリ五ヶ年ノ内訴出サル者ハ不及裁判事

一 壬申七月以前ノ貸借ニテ返濟期限同七月後ニ係リタルハ期限後滿五  
年ニ至ル迄一度モ訴出サル者ハ不及裁判事

六年六月太政官御布告第二百號

諸道各驛附屬村々助郷其他驛費ニ関スル滯金丁卯十二月以前ノ分ハ一  
般不及裁判候事

六年十一月太政官御布告第三百六十二號

金數貸借ヲ始トシ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ルマテ双方ノ者  
互ニ受取渡ノ期限ヲ定ノ條約ヲ結ヒ置キタルニ一方ノ者其條約ヲ破リ  
タル時ハ早速裁判所へ出訴イタシ不苦候處延期ノ勘辨ヲ加へ出訴ヲ見  
合候者モ有之是亦夕慈愛ノ人情ニテ尤ノ事ニ付早速出訴イタシ候トモ  
又ハ勘辨ヲ加へ候厄人民自由存セ出訴期限ノ法則不相定候處右延期勘  
辨中數多ノ歲月ヲ過去リ出訴イタシ候時ハ貸方借方請人証人ノ内死

○ 訴



人又ハ轉住又ハ失踪等ノ者モ右之事理曖昧ニ至リ裁判上ハ都合不少候ニ付  
訴訟ノ事柄ニ因リ夫々出訴ノ期限ヲ定候條來明治七年一月一日改リ後  
ニ結ヒタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過去リ出訴セザル者ハ自分條約ヲ取消シタル者  
ト看做シ受取ルヘキ者ハ受取ヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡スヘキ義務ヲ免レ  
候事ト相定メ候ニ付若シ出訴イタル候トモ取上不致候此旨布告候事

出訴期限規則

第一條 ○學藝ノ授業料○旅籠料○運送賃○飲食料○手附金○商人互  
ノ賣掛金○職人ノ手間代金○日雇人ノ給料○請負金○芝居等ノ木戸  
錢又ハ機數錢等○男女藝者ノ揚代金

右ハ六箇年限

第二條 ○醫師ノ診診及ヒ藥料○授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料  
○商人ヨリ商人ニ非サル者ヘノ賣掛代金○壹箇年期マテノ奉公人給料

右ハ一箇年限

第三條 ○期限ヲ定メタル貸附米金及ヒ利息アレハ其利息○期限ヲ定  
メタル預米金及ヒ利息アレハ其利息○家屋及ヒ土地ノ借賃○小作米金  
○証源金○敷金○物品ノ借賃又ハ損料○養育料○七ヶ年期マテノ奉  
公人給料○期限ナキ年金及ヒ一生涯ノ年金  
右ハ五箇年限

第四條 條約証書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ期限ト見做シ候故何時出  
訴致シ候テモ苦カラサル事

第五條 従前取結ヒタル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條  
約期限ノ切レタル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ期限ト  
見做スヘシ又従前取結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治七年一月一日後  
ニ及テ事件ハ條約期限ノ切レタル翌日ヨリ第一條第二條第三條ノ種  
類ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算致スヘキ事

但明治五年壬申 第三百號布告第三條ニ定メタル規則ハ格別ナリ  
トス

六年六月太政官御布告第百十二號

來ル七月十日以後ノ証書類及ヒ公私ノ文書ニハ總テ年號月日ヲ記載可致若  
シ疎漏ニシテ年月日ノ内何レニテモ略記シタル時ハ裁判上証據ニ相立候事

八年二月布告第一號

明治六年第二百十二號ヲ以テ年月日ノ内何レニテモ略記シタル諸証書  
類及ヒ公私文書等ハ裁判上証據ニ相立旨布告相成候ハ其証書全ク証  
據ニ相立サル儀ニハ之レナク只其年月日ノ早晚ヲ定ムヘキ証據ニ相立  
サル儀ニ候條右等ノ証書ヲ以テ年月日ノ早晚ニ拘ハラス其記入ノ事件  
ニ付訴訟ニ及フ片ハ取揚ケ裁判ニ及フヘク候條此旨布達事

○訴

六年十二月太政官御布告第四百五號  
勅奏任官及ヒ華族其外有位ノ輩訴訟關係ノ節家令執事等ニテ相辨ス可  
キ分ハ格別ナリト雖モ若シ本人呼出審問及ハス候テハ事實明瞭ナラサ  
ル時ハ民法裁判上ニ限り奏聞ニ及ハス直ニ本人呼出審問及フ可ク此旨  
布告候事  
但シ勅奏任官ノモノ呼出ヲ受ケタル時ハ其旨銘々ヨリ其奏職ノ官廳  
ヘ相届クヘキ事

七年三月太政官御布告第二十七號

預金穀ハ其証書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用ヲ爲サ、  
ルノ明文ナキ分ハ出訴候トモ本年五月一日ヨリ以後ハ貸金同様ニ裁判  
可致候條此旨布告候事

七年五月達甲第九號

今般裁判所取締規則左之通相定候條此旨相達候事

裁判所取締規則

○第一條 訟庭ハ訴訟口詰必ス出席シ詞訟人ヲ順次ニ呼込ニ裁判官ノ  
命ニ從ヒ失敬又ハ開ノヲアラサル様其取締ヲ爲スヘキ事○第二條 原  
被告人ヲ始メ代理人等總テ訟庭ニ出ル者ハ呼込ノ次第ニ從ヒ沈黙整列  
シ裁判官出席スレハ各々起テ禮ヲ爲ス可シ○第三條 原被告等共其事情ヲ餘

蘊ナク幾回モ詳細ニ陳述スヘシト雖モ互ニ先ツ發言スル者ノ言終リタ  
ル後ニ非レハ更ニ其言ヲ發ス可ラス○第四條 凡進退動作ハ輕躁ニ涉  
ラス言語ハ憤怒高激ニ涉ラズ諄々トノ其事情ヲ陳述シ且裁判官ニ對シ  
テ尊敬ヲ致スニ注意ス可シ○第五條 前條ニ記載ニタルト守ラズ裁  
判官ニ對シ尊敬ヲ欠クモノアルトキハ裁判官直ニ道責ヲ加フ可シ(但代  
言人此ヲ犯シ道責ヲ受ントキハ其事情ニ付代理人タルト得ス○第六  
條 謾罵ヲ加フヘキモノアルハ其裁判ヲ中止シ犯則ニ關係ナキモノ  
ハ一旦扣所ニ退カシメ然後犯則ノ者ヲ道責ス可シ○第七條 裁判官ヲ  
罵ル者アル時ハ前條ノ如ク其裁判ヲ中止シ之ヲ斷獄課ニ付シ本律ヲ科ス  
可キ事(但代言人此ヲ犯スモノハ本律ヲ科スルノ後三月ヨリ多カラサ  
ル時間代言人トナリテ裁判所ヘ出ルヲ得ス○第八條 裁判ノ時公聽ヲ  
許サレタル者ハ人々皆沈黙敬聽ス可シ(但裁判官審問ノ際公聽ノ者若シ  
紛開ニシテ審問ノ妨礙アリト思慮スルトキハ便宜ヲ以テ訴訟口詰ニ命  
シ公聽ノ者ヲ退カシム可シ第五條ヨリ此條ニ至ルマテ七年十月改正○  
第九條 刻限呼出ヲ受ケタル者疾病又ハ無據事故アリテ遲參又ハ不參ス  
ル片ハ其事實ヲ明細ニ記載シタル届書ヲ呼出刻限前裁判所ニ差出スヘ  
シ若シ刻限後届出ル歟又ハ無届ニテ遲參不參ヲ致ス者ハ斷獄課ニ廻シ  
違式ノ輕重ニ問ヒ相當ノ罰金ヲ科ス可キ事(七年七月増補同十二月改正)

○款

七年七月達第二十四號

各裁判所 各縣

今般人民ヨリ院省便府縣ニ對スル訴訟取扱ニ付假規則別冊之通相設候間以後右ニ準據可致候條此旨相達候事

人民ヨリ院省便府縣ニ對スル訴訟假規則

第一條 凡人民ヨリ院省便府縣ニ對シ一般公同ニアラサル人民一個ノ訴訟ハ司法官ニ於テ受理スヘシ其事件左ノ如シ但關區内又ハ幾個ノ人民共有ノ物及會社等ハ一個ノ人ト見做スヘシ

一 院省便府縣所有ノ土地ニ関シタル事

一 院省便府縣ノ會計及ヒ金銀貸借ニ関シタル事

一 院省便府縣ノ管轄スル建造物等ニ関シタル事

第二條 訴訟事件ニ付テ被告タル院省便府縣ハ其長官ヨリ其代人ヲ撰

ニ差出スヲ得ヘシ 其代人ノ外更ニ事件ノ証ヲ取ル爲ノ主務ノ官

更ヲ呼出サハルヲ得サルハ其本人ヲ呼出スヲモアルヘシ但委任以

上ニ係ル者ハ奏請ヲ經テ區處

第三條 裁判上院省便府縣ヨリ人民ヘ對シ償還スヘキ條理アルハ其

事由及ヒ裁判ノ見込ヲ具狀申稟ス可シ 若シ主務ノ官吏一己ノ失錯

ニ出テ其者ヨリ償還スヘキハ具狀申稟スルニ及ハスト雖モ事情止ム

ヲ得サル場合ニテ院省便府縣ヨリ償還セサルヲ得サルトキハ具狀

申稟スルヲ前項ニ同シ但具狀申稟ヲ經テ裁決スル者ハ之ヲ終審トシ更ニ控告スルヲ得ス

第四條 右ニ記載シタル場合ノ外人民一個ノ事ニ非サル一般公同ノ為

ニ起ル訴訟ニテ行政裁判ニ歸スル者ト雖モ當今其設置ナキヲ以テ之

訴ル者アルハ先以テ之ヲ具狀申稟正院ノ指圖ヲ乞ヘシ

一 官ノ會計ニ付一般ノ人民ニ関スル事

一 道路ヲ作ルニ付一般ノ人民ニ関スル事

一 工部ノ製造建築ニ付一般ノ人民ニ関スル事

一 此官廳ト彼官廳トノ間ニ起ル權限ノ事

一 行政官ト司法官トノ間ニ起ル權限ノ事

但右ノ裁判ニ付テノ手續ハ第二條第三條ニ同シ

ハ七年九月正誤ニ係ルモノ

七年九月布達第二十六號

明治六年第九十八號並ニ第二十二號ヲ以テ控訴ノ定限及布達置候處

右ハ其事件ニヨリ終審始審ノ權限左ノ通決定候條此旨布達候事

○第一 人民相互ノ訴訟○第二 院省便府縣ヨリ人民ニ對スル訴訟

但シ臨時出張ニ非スニテ各地方ニ於テ確定設置シタル院省便ノ支廳ヘ

對スル人民ノ訴訟ハ其支廳所管ノ裁判所ノ處分ニ歸ス○第三 裁判所

司

○訴

ノ設ケアル各府縣廳ト人民トノ間ニ起ル訴訟但人民ヨリ府縣ノ支廳ニ  
 對スル訴訟前條但書ニ同シ  
 右ハ各地方裁判廳ニ於テ始審ノ裁判ヲ爲シ若シ控訴ヲ行ハシムル時ハ司  
 法裁判所ニ於テ終審ノ裁判ヲ爲ス可キ事  
 ○第一 人民ヨリ院省ニ對スル訴訟○第二 院省便府縣各地方裁判所  
 ノ間ニ起ル訴訟○第三 裁判所ノ設ケナキ各府縣管下ノ人民ヨリ其各  
 府縣廳ニ對スル訴訟○第四 人民ヨリ舊藩諸藩ニ對スル藩債ノ訴訟○第  
 五 各地方裁判所ト人民トノ間ニ起ル訴訟  
 右ハ司法省裁判所ニ於テ始審ノ裁判ヲ爲ス可ク臨時裁判所ニ於テハ終  
 審ノ裁判ヲ爲ス可キ事  
 七年十月太政官御布告第百九號  
 各人民他ノ管轄ノ裁判廳ニ訴訟ヲ爲ス節ハ其者管轄ヲ受ル裁判廳ノ添  
 翰ヲ願ヒ受クヘキ成例ニ候處自今右添翰ヲ受クルニ及ハス候條此旨布  
 告候事  
 八年一月太政官御布告第六號  
 民法裁判上負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ採上ケサ  
 ル成例ニ候處本年三月一日ヨリ以後ハ左ノ通相改メ候條此旨布告候事  
 第一條 債主定期期限未滿内ニ負債者ノ失踪ヲ知ル時定期満期ニ至リ

二十五丁

直ニ裁判所ニ訴出ツヘキ事  
 第二條 債主未タ負債者ノ失踪ヲ知ラス定期満期又ハ出訴期限將ニ盡  
 シトスルヲ以テ裁判所ニ出訴シ裁判所ノ稟書ヲ以テ負債者ニ掛合始  
 テ其失踪ノ事ヲ知ル時ハ右稟書訴狀ヲ呈シ其旨届出ヘキ事  
 第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀採上ケ直ニ失踪者所管  
 ノ戸長ニ申付失踪ノ年月日ヲ説明シタル上債主差出シタル証書ニ負  
 債者何年何月何日家出ノ末行衛相分ラサルニ付追テ本人見當ルカ又  
 ハ三十六ヶ月ノ満月後跡相續ヲ爲ス可キ者ニ掛リ此稟書証書ヲ以テ  
 再訴致ス可キ旨ヲ記載シ訴狀下戻スヘキ事  
 第四條 債主ニ於テ前條ノ稟書証書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又  
 ハ搜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治六年十一月第三百六十二號布告出訴  
 期限ノ限内ニハ加算致サル事  
 八年二月太政官御布告第十三號  
 明治七年七月第七十五號布告訴文例中改定原告人被告人ニテ代書人ヲ  
 用ヒサル時ハ親戚又ハ朋友ノ者ヲ以テ差添人トナシ訴狀答書等ニ連印  
 セシムヘキ旨記載候處自今原告人被告人訴狀手續ニ差支サル者ハ差添  
 人ニ不及候條此旨布告候事  
 八年二月太政官御布告第三十號

○訴

民事訴訟審判ノ儀人民一般傍聽被差許候條此旨布告候事

但男女ノ間ニ起リシ風儀ニ関スル訴訟ハ此限ニアラス

八年四月布達甲第二號

本年第二十號御布告ニ付テ左通各裁判所傍聽規則相定候條此旨布達候事

一傍聽セシヨリ願フモノハ裁判所庶務課ニ名刺(住所)氏名ヲ出シ其許  
可ヲ得テ訟庭ニ出ツヘキ事但當日訟庭ノ都合ニヨリ其數ヲ減省シ又

ハ一同差許サルノモ之アルヘシ

一傍聽人訟庭ニ就クノ心得ハ七年甲第十九號當省達第八條并ニ但書ノ  
通タルヘキ事

八年五月太政官御布告第八十三號

明治廿年正月一日以後同七年八月三十一日以前ニ取結ヒタル諸約定ニテ印  
紙ヲ貼用セヌ或ハ界紙ヲ用ヒタル證書ヲ取置クカ又ハ附込ノ諸帳簿ニ  
押印ヲ受ケサル者ハ聽訟裁判上無據事故ノ有無ニ因リ採上クルト採上  
ケサルトノ別之レアリ候處七年七月第八十一號布告ヲ以テ証券印稅規  
則改定相成候ニ付テハ六年六月一日以後七年八月三十一日以前ノ分ト  
雖モ右規則ニ準シ證書受取主或ハ帳簿主ニ於テ舊規則相當ノ印紙ヲ自  
分ニテ貼用押印ノ上訴出ル時ハ採上裁判ニ及ヒ候條此旨布  
告候事

八年五月布達甲第五號

各人民ヨリ院省使府縣等ニ對スル訴訟ハ當分各上等裁判所ニ於テ受理  
候條此旨布達候事

八年十一月布達甲第十四號

各人民ヨリ院省使府縣等ニ對スル訴訟受理ノ儀ニ付本年甲第五號ヲ以  
及布達置候處就中八年十二月改正人民ヨリ開拓使ニ對スル訴訟ハ東京  
上等裁判所ニ於テ受理候條此旨布達候事

八年六月太政官御布告第一百十號

讒謗律別冊ノ通被定候條此旨布告候事

讒謗律

○第一條 凡ソ事實ノ有無ヲ論セズ人ノ榮譽ヲ害スヘキノ行事ヲ摘發  
公布スル者之ヲ讒毀トス人ノ行事ヲ舉ルニ非ラスシテ惡名ヲ以テ人ニ  
加ヘ公布スル者之ヲ誹謗トス著作文書若クハ畫圖肖像ヲ用ヒ展觀シ若  
クハ發賣シ若クハ貼示シテ人ヲ讒毀シ若クハ誹謗スル者ハ下ノ條別ニ  
從テ罪ヲ科ス○第二條 第一條ノ所爲ヲ以テ乘輿ヲ犯スニ涉ル者ハ禁  
獄三月以上三年以下罰金五十圓以上千圓以下三罰并ヒ科シ或ハ偏ヘニ  
一罰ヲ科ス以下之ニ倣ヘ○第三條 皇族ヲ犯スニ涉ル者ハ禁獄十五日  
以上二年半以下罰金十五圓 百圓以下○第四條 官吏ノ職務ニ関

司

○許

シ讒毀スル者ハ禁獄十日以上二年以下罰金拾圓以上五百圓以下誹謗スル者ハ禁獄五日以上一年以下罰金五圓以上三百圓以下○第五條 華士族平民ニ對スルヲ論セシ讒毀スル者ハ禁獄七日以上一年半以下罰金五百圓以上三百圓以下誹謗スル者ハ罰金三百圓以上百圓以下 第六條 法ニ依リ檢官若クハ法官ニ向テ罪犯ヲ告發シ若クハ証スル者ハ第一條ノ例ニアラス其故造誣告シタル者ハ誣告律ニ依ル 第七條 若シ讒毀ヲ受ルノ事刑法ニ觸ル者檢官ヨリ其事ヲ糾治スルカ若クハ讒毀スル者モヨリ檢官若クハ法官ニ告發シタル時ハ讒毀ノ罪ヲ治ルヲ中止シ以テ事案ノ決ヲ俟テ其被告人罪ニ坐スル時ハ讒毀ノ罪ヲ論セス若シ事刑法ニ觸レズモ單ヘニ人ノ榮譽ヲ害スル者ハ讒毀スルノ後官ニ告發スト雖モ仍ホ讒毀ノ罪ヲ治ム 第八條 凡ソ讒毀誹謗ノ第四條第五條ニ係ル者ハ被害ノ官民自ラ告クルヲ待テ乃チ論ス

八年十二月太政官御布告第九十六號  
今般訴訟用罰紙規則別冊ノ通相定來明治九年二月十五日ヨリ施行候條  
此旨布告候事

○訴訟用罰紙規則

第一條 凡訴訟ヲ生シ公裁ヲ仰カントスルハ此規則第九條中第一項第二項第三項第四項ニ照準シ原被告人共裁判所ニ差出ス訴答及証書ノ

寫等一切ノ書面ハ其類ノ罰紙ヲ用フヘキ事但訴答等ノ表紙書式等ハ訴答文例ノ通タルヘキ事 第二條 訴答文例中原告人一取ルヘキ被告人住所書付并此書付ヲ得ル爲メ町村役場ノ文通ハ第九條中第五項ノ罰紙ヲ用フヘキ事 第三條 訴訟中其事ニ關シ証據ニ爲サントスル原被告人互ノ文通モ第五項ノ罰紙ヲ用フヘキ事若シ此罰紙ヲ用ヒサル者ハ裁判上証據タルノ効ナキモノトスヘキ事 第四條 人民ヨリ官府ニ關涉スル訴訟ニ付官府ヨリ裁判官ニ差出ス書面モ同ク此規則ニ照シ罰紙ヲ用フヘキ事 第五條 以上掲ケル罰紙ヲ用ヒサル書面ハ裁判官受理セサル事 第六條 裁判所ヨリ原被告人或ハ引合人等呼出狀ハ都テ第五項ノ罰紙ヲ用フヘキ事 第七條 訴訟用罰紙ハ買求差支無之様各府縣管下適宜ノ場所へ賣捌所相設クヘキ事 第八條 賣捌所ハ訴訟用罰紙賣捌所ト大書シ官ノ焼印アル看板ヲ掲ケヘキ事

第九條 訴訟用罰紙用方并種類定價左ノ通

第一項金穀ノ類	金 拾圓	定價壹枚
	米 五石	金壹錢
	雜穀拾石	未滿 黃色罰紙
	但シ一枚十六行十五字詰以下皆同シ	

司

○訴

金 拾四以上百四	未滿	黃綠色罽紙	同	金貳錢
米 五石以上五石	未滿	橙黃色罽紙	同	金三錢
雜穀拾石以上百石	未滿	綠色罽紙	同	金四錢
金百四以上五百四	未滿	黑色罽紙	同	金五錢
米五十石以上二百五石	未滿	青色罽紙	定價壹枚	金壹錢六厘
雜穀百石以上五百石	未滿	紫色罽紙	同	金壹錢四厘
金五百四以上千四	未滿	紅色罽紙	同	金壹錢二厘
米二百五石以上五百石	未滿	以上	同	
雜穀五百石以上千石	未滿	以上	同	
金 千四	未滿	以上	同	
米 五百石	未滿	以上	同	
雜穀千石	未滿	以上	同	
第二項 人事ノ類(但家督相續養子雇人等ノ事ニ關スル訴訟ヲ云フ)				
第三項 土地并建物ノ類(但地所境界田畑建家等ノ訴訟ヲ云フ)				
第四項 雜事ノ類(但以上三項ニ關セサル一切ノ訴訟ヲ云フ)				

第五項 文通ノ類(但裁判所ヨリ原被告人等呼出狀其外(町)村役場及				
○第十條 裁許狀罽紙ノ種類定價左ノ通				
第一項 金穀ノ類				
金 拾四	未滿	黃色罽紙	定價壹枚	金貳錢
米 五石	未滿	黃色罽紙	定價壹枚	金三錢
雜穀拾石	未滿	黃綠色罽紙	定價壹枚	金四錢
但シ一枚十二行十二字詰以下皆同シ				
金 拾四以上百四	未滿	橙黃色罽紙	同	金五錢
米 五石以上五石	未滿	綠色罽紙	同	金五錢
雜穀拾石以上百石	未滿	綠色罽紙	同	金五錢
金百四以上五百四	未滿	綠色罽紙	同	金五錢
米五十石以上二百五石	未滿	綠色罽紙	同	金五錢
雜穀百石以上五百石	未滿	綠色罽紙	同	金五錢
金五百四以上千四	未滿	綠色罽紙	同	金五錢
米二百五石以上五百石	未滿	綠色罽紙	同	金五錢
雜穀五百石以上千石	未滿	綠色罽紙	同	金五錢
金 千四	未滿	綠色罽紙	同	金五錢

司

○訴

米五百石  
雜穀千石  
以上 黒色罫紙 金六錢

第二項 人事ノ類 青色罫紙 定價壹枚 金三錢二厘

第三項 土地并建物ノ類 紫色罫紙 同 金二錢八厘

第四項 雜事ノ類 紅色罫紙 同 金二錢四厘

○第十一條 裁許狀ハ其類ニ照準シ此罫紙ヲ用フヘキ事○第十二條 訴訟中裁判所ヨリ原被告人等呼出ニ用フル罫紙員數ノ定價及原被告人  
一 下附スル裁許狀罫紙員數ノ定價ハ曲者ヨリ三日内ニ裁判廳ニ辨納ス  
ヘキ事○第十三條 官許賣捌所ノ外ニテ訴訟用罫紙ヲ販賣スル者ハ其  
品取上ケ販賣シタル罫紙代ノ百倍又其情ヲ知テ之ヲ買フ者ハ其品取上  
ケ買受ケタル罫紙代ノ五拾倍過料可申付事○第十四條 罫紙ヲ贋造ス  
ル者又ハ贋造セシ品ト知テ之ヲ賣買スル者ハ都テ其品取上ケ九拾圓以  
内ノ過料可申付事○第十五條 前條ニ掲グル犯則人ヲ見認メ訴出ル者  
ハ事實取糾シ相違ナキニ於テハ賞トシテ其過料ノ半高下ケ與フヘキ事

九年二月太政官御布告第二十號

訴訟用罫紙規則明治八年十二月第九十六號ヲ以テ布告候處遠隔ノ地  
方廳右規則施行ノ期日マデニ罫紙受取方行届サル向ハ罫紙受取賣捌所  
設置候マデノ日ヲ限リ該地ニ於テ爲シタル訴訟ハ罫紙ヲ用ヒザルモ其

効ヲ有スヘク候條此旨布告候事

九年三月布達甲第二號

明治八年太政官第九十六號公布訴訟用罫紙ヲ刑事ノ告發狀等ニ相用  
候者有之哉ニ候處右ハ民事訴訟ニ限リ候儀ト可相心得此旨布達候事

九年五月太政官御布告第七十三號

各地方ニ於テ訴訟用罫紙賣切レ之レカ爲メ出訴人期限ノ盡ントスル時  
ハ尋常白紙ニ相認メ罫紙賣切候旨添書シ出訴可致此旨布告候事

九年二月太政官御布告第十八號

明治六年七月第二百四十七號布告訴答文例中代言人ノ條來三月卅一日  
限廢シ候條此旨布告候事

但代言人ノ儀ニ付テハ別ニ司法省ヨリ布達可有之事

九年二月布達甲第壹號

今般代言人規則別紙之通相設ケ候條來ル四月一日ヨリ以後ハ右規則通  
リ免許ヲ經サル者ヘ代言相頼候儀不相成候條此旨布達候事

但四月一日以後代言人無之且ツ本人病疾事故ニテ不得已場合ニ於テ  
ハ其至親(父子兄弟或ハ叔姪ノ内之ニ代ルヲ得ヘク若シ至親無之者ハ  
區戸長ノ証書ヲ以テ相當ノ代人ヲ出スモ亦不苦

○代言人規則

司

○訴



○第一條 凡ソ代言人タラントスル者ハ先ツ專ラ代言ヲ行ハント欲ス裁判所ヲ示シタル願書ヲ記シ所管地方官ノ檢印ヲ乞フヘシ地方官之ヲ檢査スルノ後狀ヲ具シテ司法省ニ出ス然後其許スヘキ者ハ司法卿之レニ免許狀ヲ下附ス

○第二條 代言人ヲ檢査スルハ左ノ件々ニ照スヘシ

一、布告布達沿革ノ概略ニ通スル者 二、刑律ノ概略ニ通スル者

三、現本裁判上手續ノ概略ニ通スル者 四、本人品行并履歷如何

○第三條 免許ヲ與フヘカラサル者左ノ如シ

一、懲役一年以上實決ノ刑ニ處セラレ者

二、身代限ノ處分ヲ受ケシ者

三、其地方内ニ定マリタル住居アラサル者

四、官職アル者但准官吏タル者モ亦同

五、諸官員華士族及ヒ商家其他一般ノ雇人タル者但雇主承諾ノ証書アル者ハ此限ニアラス

○第四條 既ニ免許狀ヲ与フレハ之ヲ司法省并各裁判所ノ代名人名表

ニ登載ス但免許狀ヲ得タル者ハ必ス該地方裁判所ノ區内九年十一月改

正ニ住居スヘシ尤既ニ該裁判所ニ免許ヲ得レハ其管下支廳ハ遠近ニ拘

ハラズ代言ヲ爲ヌヲ得ヘシ ○第五條 免許狀ヲ得タル者ハ免許料トシ

金拾圓ヲ司法省ニ納メレム但免許ハ一年ヲ以テ限リトス若シ引續其職務ヲ行ハント欲スル者ハ満期ノ節更ニ免許ヲ受ヘシ但書九年四月改正 ○第六條 代言人代言ヲ爲スハ必スシモ同管轄ノ者ニ限ラス都テ双方ノ協議ニ任ヌヘシ但免許セラレタル該裁判所ノ外ハ代言ヲ爲ヌヲ得スト雖モ其或ハ控訴等ニテ從前手續ヲ以テ地ノ裁判所ヨリ上等裁判所ニ出ルカ如キハ此限ニアラス ○第七條 代言人ヨリ訴訟本人ニ對シ不正不實ノ証アルハ本ヨリ何時ニテモ裁判所ヘ其由ヲ届ケタル上ニテ代言ヲ辭シ更ニ他ノ代言人ヲノ代言セシムルヲ得ヘシ ○第八條 代言人ハ訟庭ニ於テ其訴答往復書中ノ趣意ヲ辨明シ裁判官ノ問ニ答フル者トス若シ其辨論端緒ヲ失シ詞訟ノ本旨ヲ紊乱シ裁判ノ妨碍トナルハ裁判官コレヲ制止スルヲ得ヘシ ○第九條 月刑除 ○第十條 裁判官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ訟庭上原被双方互ニ辨論スルヲ得ス ○第十一條 告達諸規則ノ付裁判官ニ向テ旨趣ヲ陳述スルヲ得ヘシト雖モ其是非及ヒ立法ノ原旨ヲ論議スルヲ得ス ○第十二條 代言人疾病事故アリテ本日出席スル能ハレハ必ス裁判所ヘ其旨ヲ届出ヘシ若シ代言人故ナク出頭セスシテ聽訟延期スル時ハ訴訟本人ノ爲メ并ニ相手方ノ爲ニ延期ヨリ生シタル費用ヲ償ハシムヘシ ○第十三條 代言人ノ謝金ハ代言人其訴訟本人トノ協議ヲ以テ其高ヲ豫定スル者トス

司

○訴

第十四條

- 一 訟庭ニ於テ國法ヲ誹議シ及ヒ官吏ヲ侵凌スル者
- 二 訟庭ニ於テ臆度詐偽ノ辨ヲ爲ス者
- 三 相手方ヲ惡言凌罵シ其面目名譽ヲ汚ス者
- 四 謝金ヲ前收シ又ハ過當ノ謝金ヲ貪ル者
- 五 他人ノ貸借取引等ノ詞訟ヲ買取リ自己ノ利ヲ圖ル者
- 六 詞訟ヲ教唆スル者
- 七 故ラニ時日ヲ遷延シテ訴訟本人ノ妨碍ヲ爲ス者
- 右ノ如キ者ハ其輕重ヲ測リ裁判官直チニ之ヲ罰スルヲ得其罰目左ノ如シ
- 一 譴責
- 二 停業(一月以上一年以上以下)
- 三 除名(三年ヲ經シ後ニ非サレハ復代理人タルヲ許サス
- 但其罪重キ者ハ律ニ依テ處断シ本條罰目ト併セ科スルヲ妨ケス
- 尤第三條第一項ニ觸ル者ハ更ニ代理人タルヲ許サス
- 第十五條 此規則ニ掲ケル所ノ者ハ他ノ法律成規ニ觸ル事ナシ
- 第十六條 外國人原告ノ時ニ限リ被告ニ於テ外國人ヲ代理人トノ答辨ヲ爲サシムルハ苦シカラス(九年七月追加)
- 九年四月布達甲第四號
- 本年當省甲第二號布達中之儀付左之通可相心得候此旨更ニ布達候事

布達但書ニ代人ノ機掲載候處尚ホ一般人民ノ雇人十ヶ月以上不斷雇置候者ニ限リ至親同様代人トナスヲ得ニ總テ代人并代理人ヲ出ス場合ニハ委任狀ヲ渡シ又ハ訴狀與書可致儀ト心得ヘシ

規則第六條控訴代言ノ儀但書ニ掲載候處其初告ノ代言ヲ爲シタル事件ニ付大審院へ上告ノ代言ヲ爲ス者モ同断ト心得ヘシ

九年九月布達甲第十一號

當省本年甲第一號布達第五條但書一年トハ月數ヲ通算シ十二ヶ月ヲ以テ期トシ則免許狀ニ登記セシ月ヨリ起算ス

代言人免許願狀本年ハ來十月限其管轄廳へ差出スヘシ來十年ヨリハ一年兩次三月九月ト定ム此ノ限月ニ非サレハ出願ヲ許サス(但已ニ免許狀ヲ與タル代言人ニシテ期限後引續其職務ヲ行ハンコトヲ望ムモノハ本文兩月内ニ豫メ願狀ヲ地方廳へ差出スヘシ

右布達候事

九年十一月布達甲第十五號

一 代言人試験ヲ受ケ落第シタルモノ再試験ヲ願ハントスルハ次ノ期月ヲ待ツベシ

一 再度以上落第セシモノハ再度ノ期月ヨリ第三四月期月ニ至ラサルハ試験ヲ願フコトヲ得ス

司

○訴

一 試驗再度以上ニ係ル者ハ其旨ヲ願狀ニ附記スベシ

右布達候事

九年十一月布達甲第十六號

一 代官人本貫族藉轉換ノ節ハ地方廳ヲ經由シテ當省へ届出ヘシ

但該裁判所ハ本文之儀且住居移轉之節毎ニ本人ヨリ直ニ届出ヘシ

一 姓名ヲ改メタル代官人ハ免許狀ハ書換地方廳ヲ經由シテ當省へ願出ベシ

一 免許狀書換ヲ願出ル節從前ノ免許狀ハ直チニ返納ニ不及追テ書換ノ

免許狀ト交換返納スベシ

一 右書換願中ハ地方廳ニ於テ改名ヲ聞届タル証ヲ所持スレハ從前ノ免

許狀ヲ以テ代官ヲ爲スハ苦カラズ

右布達候事

十年五月布達甲第二號

代官人滿期ニ至リ尚引續キ免許願出ノ者其免許狀付與候迄ノ間ハ右滿

期以前出訴及取掛リノ事件ニ限り代官苦カラス候條此旨布達候事

但再々免許セサル者ト雖モ本文同様心得ヘシ

九年四月布達甲第五號

訴訟入費償却規則左ノ通改正候條此旨布達候事

第一條 訴狀其外書類認料、壹枚十六行十五字詰ニ付拾錢但シ壹枚以

下モ同價

右定限 第一原告人ノ訴狀ノ正本副本 第二被告人ノ答書ノ正本

副本 第三訴狀亦ハ答書中ニ記載シ難キ證據ノ書類ノ寫

第四審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル證據ノ書類ノ寫

第五訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被告及方往復ノ文書

第二條 証人并引合人差添人手當 一日ニ付五拾錢

但シ八里以外ヨリ罷出止宿ノ者ハ貳拾五錢ヲ増ス

右定限 裁判所ニ出席ヲ爲シタル日

第三條 証人并引合人差添人滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當一

日ニ付五拾錢

第四條 証人并引合人差添人旅費 滿八里ニ付拾錢、歸路モ同斷

但シ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付拾錢

右定限 第一、兩線ノ官道甲路ハ遠クシ路ハ近キ時ハ現ニ甲路ヲ

經ルト雖モ乙路ヲ以テ計算ス可シ 第二本條ハ日本國管内ヲ

通行スル者ノ爲メ設ク

第五條 原告人又ハ被告人直ナル者ノ手當 一日ニ付五拾錢

但シ八里以外ヨリ罷出止宿スル者ハ貳拾五錢ヲ増ス

○ 訴

第六條 原告人又ハ被告人直ナル者八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手  
當一日ニ付五拾錢

第七條 原告人又ハ被告人直ナル者旅費 滿八里ニ付拾錢（歸路同斷  
一但シ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付拾錢

右定限 第四條ニ同シ  
第八條 通辨雇料一日ニ付三圓

右定限 第二條ニ同シ往復旅費ヲモ定額ノ通り計算ス一シ  
第九條 翻譯料 壹枚ニ付（拾六行拾五字詰貳圓）但シ壹枚以下モ同價

右定限 第一條ニ同シ  
第十條 測量繪圖認料

右定限 第一長二百間ニテ盡ル時ハ百間ニ付壹尺ノ割西ノ内  
壹枚ニ付拾錢 第二長六百間迄百間ニ付五寸ノ割同拾貳錢 第  
三長千二百間迄百間ニ付三寸ノ割同拾四錢 第四六千間迄百間  
ニ付貳寸ノ割同拾七錢 第五長壹方貳千間迄百間ニ付壹寸ノ  
割同貳拾錢 第六長壹萬貳千間以上百間ニ付五分ノ割同貳拾四  
錢  
一測量ニ及ハサル見取繪圖ハ間數ノ長短ヲ論セス大凡見積ヲ以テ簡  
便ニ圖引致ス可シ

但西ノ内壹枚ニ付拾錢

第十一條 使賃 滿一里毎ニ拾錢壹里未滿ハ五錢（但シ歸路モ同斷）

右定限 第一裁判所ニテ示談中双方兼諾ノ上原告被告双方又ハ  
一方ノ者ヨリ遣シタル使賃 第二裁判所ニテ示談中原告又ハ被告  
一方ノ者掛裁判役ノ檢印ヲ經タル使賃 第三原告又ハ被告一方ノ  
者出訴中違約ノ出席セザル時掛裁判役ノ檢印ヲ經テ違約ヲ責ムル  
使賃 第四原告被告双方ノ爲メ又ハ一方ノ爲メニ雙方又ハ一方ノ  
者ノ申立ニ因リ裁判所ヨリ臨時ニ遣シタル使賃

第十二條 郵便及ニ電信料 定價  
右定限 第十一條ニ同シ

第十三條 身代限ヲ爲スニ付裁判所又ハ縣廳又（町）役場ニ納ム可キ評  
價人鑑定人等ノ日雇賃金ノ諸入費及ヒ身代限諸雜費 臨時計算ヲ以  
テ定ム

右ハ前數條ノ入費ニ先ツテ取立ツ可シ  
九年四月布達甲第六號

本年當省甲第五號布達改正訴訟入費償却規則中第三條第六條ノ儀ハ追  
テ相違候迄執行及ハス候條此旨布達候事  
九年九月太政官御布告第百十四號

司

○訴

今般府縣裁判所ヲ改メ地方裁判所ヲ置キ分割金之通被定候條此旨布告候事

東京裁判所 東京府 千葉縣

屬

京都裁判所 京都府 滋賀縣

大坂裁判所 大坂府 堺縣 和歌山縣

横濱裁判所 神奈川県 福島縣

米澤裁判所 山形縣 福島縣  
〔九年十二月福島ニ移シ福島裁判所ト被稱〕

静岡裁判所 静岡縣 山梨縣

松本裁判所 長野縣 岐阜縣

函館裁判所 北海道 (從前管轄内)

神戸裁判所 兵庫縣 岡山縣

新潟裁判所 新潟縣

長崎裁判所 長崎縣 福岡縣

熊本裁判所 熊本縣 茨城縣  
〔九年十月茨城ニ移シ水戸裁判所ト被稱〕

浦和裁判所 群馬縣 埼玉縣

〔九年十一月熊谷ニ移シ熊谷裁判所ト被稱〕

青森裁判所 青森縣 秋田縣

〔九年三月弘前ニ移シ弘前裁判所ト被稱〕

一ノ関裁判所 岩手縣 宮城縣

〔九年十一月仙臺ニ移シ仙臺裁判所ト被稱〕

岩國裁判所 山口縣 廣島縣

〔九年十一月廣島ニ移シ廣島裁判所ト被稱〕

金澤裁判所 石川縣

名古屋裁判所 愛智縣 三重縣

〔九年八月岐阜縣管轄美濃飛騨兩國裁判事務自今名古屋裁判所ト被稱〕

松江裁判所 島根縣

松江裁判所 愛媛縣

高智裁判所 高智縣

熊本裁判所 熊本縣 六分縣

鹿兒島裁判所 鹿兒島縣

九年九月大政官柳布告第百十五號

今般府縣裁判所ヲ改メ地方裁判所ヲ置候ニ付各上等裁判所分轄左之通  
相定候條此旨布告候事

東京上等裁判所 東京裁判所 横濱裁判所 椽木裁判所

浦和裁判所 名古屋裁判所 静岡裁判所

新瀉裁判所 松本裁判所

大坂上等裁判所

京都裁判所 大坂裁判所 神戸裁判所

金澤裁判所 松山裁判所 高知裁判所

松江裁判所 岩國裁判所

宮城上等裁判所 青森裁判所 一ノ關裁判所 米澤裁判所

函館裁判所

長崎上等裁判所 長崎裁判所 熊本裁判所 鹿兒島裁判所

九年九月達第六十六號

地方裁判所

今般第百十四號御布告ヲ以テ地方裁判所改置候ニ付テハ左之通可相心得此旨相達候事

一各管下便宜ノ地ヲ擇ヒ區畫ヲ定メ支廳ヲ設ケ代理官ヲ置キ當分府縣裁判所章程ニ照シ事務可取扱事但其代理タルモ死罪並懲役終身ノ批可ヲ乞フヘキ者ハ都テ本廳所長ノ處分ニ屬ス其他事情繁難ナル者亦

所長ノ次ヲ取ルヘシ

一 本廳並支廳管内ニ區畫ヲ定メ區裁判所ヲ置キ勸解等ノ事務取扱ヘキ事(裁判支廳假規則ヲ改メテ區裁判所假規則トシ更ニ別冊ノ通改正ヲ加ヘ候條都テ右ニ照準施行スヘシ

區裁判所假規則

○第一條 區裁判所ハ土地ノ便宜ニ隨ヒ其區ヲ畫シ之ヲ置クヘシ但シ本支廳所在ノ地ハ其廳内ニ於テ一庭ヲ設ケ若クハ日時ヲ分テ該廳ノ庭ヲ用ヒ區裁判所ノ勢ヲ行ハシムヘシ○第二條 民事ハ金額百圓ヲ以テ極ト爲ス百圓以下ハ該地方ノ便宜ニ隨ヒ其程限ヲ定ムルヲ得ヘシ但シ其土地人事等ニ係ル者モ便宜ニ隨ヒ極ト爲ス三年以下ハ地方ノ便宜ニ隨ヒ其程限ヲ定ムルヲ得ヘシ○第三條 刑事ハ懲役二年ヲ以テ極ト爲ス三年以下ハ地方ノ便宜ニ隨ヒ其程限ヲ定ムルヲ得ヘシ其或ハ事情繁難ナル者ハ審察ヲ具メ本管廳ノ次ヲ取ルヘシ○第四條 民事ニ於テ控訴スル者ハ明治八年第九十三號布告ニ照シ直チニ號布告ニ照シ直チニ上等裁判所ニ出サシムヘシ○第五條 違刑罪ヲ除クノ外刑事ニ於テ上告スル者ハ明治八年第九十三號布告ニ照シ直チニ大審院ニ出サシムヘシ○第六條 凡ソ民事ニ係ルモノハ金額ノ多少事ノ輕重ニ拘ハラズ詞訟人ノ情願ニ任セ之ヲ勸解スヘシ○第七條 勸解ヲ乞フ者ハ訴訟ヲ作ルニ及ハス直チニ該廳ニ願出テ其事由ヲ陳述スル

司

○評

ヲ得セシムヘシ○第八條 勸解ハ雙方トモ必ス本人自カラ出頭セシム  
ヘシ(但シ疾病事故等ニテ己ヲ得サル時ハ其代人トシテ親戚又ハ定マリ  
タル人ヲ出サシムヘシ)○第九條 凡ソ勸解ハ必スモ定規ニ拘ハラサ  
ル者トス(但勸解ト雖モ其ノ不參若クハ遲參ニ係ハル者ハ裁判所成規ニ  
據リ處分スヘシ)

地方裁判所

九年一月達第六十七號

支廳光區裁判所稱呼ノ儀ハ總テ其地名ヲ冠シ何裁判所何地名支廳何地  
名區裁判所ト相稱可申此旨相達候事

九年十一月達甲第拾七號

民事ノ詞訟ハ可成丈ケ一應區裁判所ノ勸解ヲ乞フ可ク此旨諭達候事

十年一月太政官御布告第十二號

預ケ金敷ノ訴訟ハ其証書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用  
ヲ爲サハル明文アルモノハ年數ニ拘ハラヌ受理スヘキ成規ニ候處自今  
或拾年以前ニ係ルモノハ一切裁判不及候條此旨布告候事

十年一月太政官御布告第五號

凡ソ裁判ノ呼出ヲ受タル者疾病等ノ事故アリ遲參又ハ不參スル時ハ其  
事故ヲ詳記シ呼出刻限マテニ其裁判所ニ届出ヘシ若シ右刻限ヲ過キテ  
届出ル歟又ハ無届ニテ遲參不參スル時ハ裁判官ニ於テ直ニ五錢以上拾

圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

右布告候事

十年二月太政官御布告第十七號

保釋條例別冊ノ通創定候條此旨布告候事

保釋條例

○第一條 保釋トハ刑事被告人ヲシテ保証人ヲ立テ保証金ヲ出シ審訊

中ノ繫留ヲ免レシムルモノヲ云フ○第二條 裁判官ハ被告人ノ遁逃シ

或ハ罪証ヲ隱滅スルコトナキヲ察スレハ懲役終身以上ニ該ルヘキ者及ヒ

光キニ重罪ノ刑ニ處セラレタル者ヲ除ク外保釋ヲ許スヘキモノトス

○第三條 被告人タル者及ヒ其保証人タラント欲スル者ハ何時ニテモ

保釋ヲ願フコトヲ得ヘシ 裁判官ハ速ニ之ヲ許否スヘシ事由ナクシテ遷

延五日ヲ過ルコトヲ得ス○第四條 保証人ハ貳名以上トス然レモ裁判官

ノ見込言リ入ニテ老分ナリト認ル時ハ此例ヲス○第五條 保証金高ハ被告人ノ罪情ノ

輕重及ヒ被告人ノ貧富ニ應シ裁判官相當額ヲ定メ被告人及ヒ保証人連帶シ之

ヲ出サシム○第六條 保証人ハ被告人ヲ何時ニモ裁判所ニ出シ頭セシムルノ

責ニ任スヘシ○第七條 保釋ヲ得ルノ被告人其任所ヲ定ムルハ裁判官ノ

兼諾ヲ得ヘシ且事故ナクシテ擅ニ他出スルコトヲ許サス○第八條 保證

人ハ被告人ノ遁逃シ及ヒ罪証ヲ隱滅セントスルヲ察スレハ直チニ官ニ

司

○訴

告クヘシ若シ事急ナル時ハ自ラ拘引スルコトヲ得ヘシ 此場合ニ於テ保  
 證人保釋ヲ辭スル時ハ其保証金ヲ還付シ被告人ハ更ニ他ノ保釋ヲ願フ  
 コトヲ得○第九條 被告人裁判所ノ呼出ヲ受ケテ出頭セサル時ハ直チニ  
 之ヲ逮捕セシメ再ニ保釋ヲ許サス仍ホ保証金ハ官ニ没ス(但劇病等不  
 得己事故アルモノハ此限ニアラス)○第十條 被告人保釋中逃走スル者  
 ハ脱摑越獄ヲ以テ論ス其保証人逃走スルヲ覺ラサル者ハ保証金ヲ官ニ  
 没シ故縱スルモノハ主守不覺失因律中故縱スル者ヲ以テ科斷ス仍ホ保  
 証金ハ官ニ没ス○第十一條 保証人タルヘカラザル者左ノ如シ  
 第一 被告人ノ犯罪ニ付關係アル者 第二 懲役五年以上ノ  
 刑ニ處セラレシ者 第三 老幼婦女其他不能力者  
 ○第十二條 被告人保釋中壹名ノ保証人其保証ヲ辭スルカ又ハ亡歿ス  
 ル時ハ更ニ他ノ保証人ヲ選ムヘシ○第十三條 被告人ノ裁判言渡ヲ受  
 ル時ハ保証金ハ直ニ還付スヘシ○第十四條 若シ裁判官私警ヲ懷挾シ  
 故ラニ保釋ヲ許サ、ル時ハ故禁無罪人律ヲ以テ論ス○第十五條 裁判  
 不服ヲ以テ大審院ニ上告シ告中拘置セラル、者モ亦此例ヲ通シ用フヘシ

附則

違警罪又ハ其他ノ刑事被告人ニテ從事親戚又ハ書記區戸長預ケ等ノ先  
 規アルモノハ此保釋條例ト並ヒ行フコトヲ得

十一年十一月二日達下第三十九號 大審院 諸裁判所  
 刑事被告人ニ保釋差許候節ハ保証人ヨリ被告人所轄ノ警視署(各地方  
 ニ於テハ警察署)へ届出サセ且保釋中異狀アレハ是亦保証人ヨリ直チニ  
 同署へ届出候様取計フヘシ此旨相達候事  
 十年二月大政官御布告第十九號  
 明治八年五月第九十一號布告大審院諸裁判所職制章程同年同月第九十一號  
 布告控訴上告手續別冊之通改正候條此旨布告候事(但巡回裁判規則判  
 事職制通則ハ削除候事)

大審院職制  
 長 一人 一等判事ヲ以テ之ニ充ツ  
 院長ハ課ヲ分チ主任ヲ命シ隨時各庭ニ臨ミ民刑事事件ヲ聽理スルコトヲ  
 掌ル

判事  
 第一 民事刑事ノ上告ヲ判理シ裁判ノ不法ナル者ヲ破毀シ及ヒ内外  
 交渉ノ事件重大ナルモノ差ニ判事ノ犯罪ヲ審判スルコトヲ掌ル  
 第二 死罪ノ案ヲ審閱スルコトヲ掌ル

大審院章程

○訴



○第一條 大審院ハ民事刑事ノ上告ヲ受ケ上等裁判所以下ノ審判ノ不法ナル者ヲ破毀シテ法憲ノ統一ヲ主持スルノ所トス○第二條 審判ノ不法ナル者ヲ破毀スルノ後宅ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシム又便宜ニ大審院自ラ之ヲ判決スルヲ得○第三條 己ニ宅ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシムルノ後其裁判所亦大審院ノ旨ニ循ハザル時ハ大審院更ニ自ラ之ヲ判決ス○第四條 陸海軍裁判所ノ裁判權限ヲ越ニル者ハ其裁判ヲ破毀メ之ヲ當然ノ裁判所ニ付ス○第五條 各判事ノ犯罪其違警犯并除ク外大審院之ヲ審判ス○第六條 内外交渉民事事件ノ重大ナル者ヲ審判ス○第七條 各上等裁判所ヨリ送呈スル所ノ死罪按テ審閱シ批可シテ送還ス其否トスルモノハ更ニ律ヲ擬シテ還付ス

上等裁判所職制

長 一人 勅任判事ヲ以テ之ニ充ツ

所長ハ課ヲ分チ主任ヲ命ジ隨時各庭ニ臨ミ民事事件ヲ廳理スルヲ掌ル

判事 第一 管内ノ控訴ヲ受ケ之ヲ覆審スルヲ掌ル 第二 管内

死罪ノ獄ヲ判決スルヲ掌ル

判事補 事ヲ判事ニ受ケ審判スルヲ掌ル

屬

上等裁判所章程

○第一條 上等裁判所ハ地方裁判所ノ裁判ニ服セシテ控訴スルヲ覆

審ス○第二條 各地方裁判所ヨリ具スル所ノ死罪ヲ判決シテ大審院ノ

批可ヲ取リ然ル後原裁判所ニ付シテ宣告セシム○第三條 各地方裁判

地方裁判所職制

長 一人 奏任判事ヲ以テ之ニ充ツ

所長ハ課ヲ分チ主任ヲ命スルヲ掌ル他ハ判事ニ同シ

判事 民事ヲ初審シ刑事懲役以下ヲ審判スルヲ掌ル

判事補 事ヲ判事ニ受ケ審判スルヲ掌ル

屬

地方裁判所章程

○第一條 地方裁判所ハ一切ノ民事及ヒ刑事懲役以下ヲ審判ス○第二

條 地方裁判所ニ於テ審判シタル民事ハ輕重トナク皆初審トス○第三條

民事ノ内外交渉シタル者ハ其輕キハ直ニ之ヲ判決シ其ノ重キハ一面之

ヲ聽理シ一面之ヲ司法卿ニ具申スヘシ○第四條 死罪ハ審訊シテ文案證

憑及擬律案ヲ具ヘテ上等裁判所ニ送送シ其行下ヲ得テ宣告ス○第五條

○訴

控訴上告手續

第一章 控訴ノ事

○第一條 凡リ地方裁判所ノ初審ニ服セスシテ再ヒ上等裁判所ヘ訴ヘ  
 覆審ヲ求ムル者之ヲ控訴ト云○第二條 控訴ハ民事ニ止マリ刑事ニ及  
 ハス○第三條 控訴ハ一タヒスルコトヲ得再ヒスルコトヲ得ス○第四條  
 地方裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ受ケタル時原告被告ノ双方又ハ一方ノ  
 者其裁判ニ不服ナル時ハ裁判言渡ヨリ第七日マテニ裁判言渡ノ翌日ヨ  
 リ數乙裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ其翌日ニ至リ控訴スルコトヲ得ヘシ但シ  
 訴訟ノ案件商事ニ係リ急速ニ控訴スルコトヲ要スルノ場合ニ於テハ七日  
 内ト雖モ控訴スルコトヲ得○第五條 地方裁判所ノ裁判言渡ヨリ三箇月  
 (三十日)ヲ以テ一月トスヲ過ルルハ控訴スルコトヲ許サズ但シ地方裁判所  
 ヨリ上等裁判所ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キトキハ期限三箇月以外八里  
 毎ニ一日ノ猶豫ヲ増スヘシ○第六條 控訴ヲ爲ス者ハ其初審ヲ受ケタ  
 ル地方裁判所ニ届ケ出ツヘシ但シ添翰ヲ乞フニ及ハズ○第七條 前條  
 ノ届ヲ受ケ取リタル地方裁判所ハ裁判言渡ノ執行ヲ停止スヘシ若シ  
 上等裁判所ノ請求アル時ハ地方裁判所ニ於テノ訴狀答書書裁判見込  
 等ヲ差出スヘシ○第八條 上等裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照  
 準スヘシ

第二章 上告總則ノ事

○第九條 各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審ニ向テ取消ヲ求ムル者  
 是ヲ上告ト云  
 ○第十條 上告スルコトヲ得ルノ事件ハ  
 第一 裁判所管理ノ權限ヲ越ユ 第二 聽斷ノ定規ニ乘ク  
 第三 裁判法律ニ違フ  
 ○第十一條 大審院ハ上告ヲ受クルノ所ニシテ控訴ヲ受クルノ所ニア  
 ラス故ニ控訴スヘキノ事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ之ヲ弁ケテ理セ  
 ス○第十二條 陸海軍ノ裁判權限ヲ越ル者ハ之ヲ大審院ニ上告スルコ  
 トヲ得○第十三條 凡ソ上告シタル者己ニ大審院ノ判決ヲ經レハ更ニ訴  
 フルコトヲ得ス

第三章 民事上告ノ事

○第十四條 民事ノ上告スルコトヲ得ル者ハ己ニ上等裁判所ニ控訴シ其  
 審判ヲ經タル者ニ限ル  
 ○第十五條 上告ヲ爲ント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二月内ニ上告狀ヲ  
 大審院ニ捧クヘシ而同時被告人ニ通知スルヲ要ス若シ原裁判所ヨリ大  
 審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ時ハ二月ノ外八里毎ニ一日ヲ増ス此定  
 期ヲ過レハ上告スルコトヲ許サズ

○ 訴

上告狀中ニハ必ス左ノ事實ヲ記載スヘシ

- 第一 原告人ノ住所身分氏名
- 第二 代言人アレハ其任所身分氏名
- 第三 被告人ノ住所身分氏名
- 第四 証人又ハ引合人アレハ其任所身分氏名
- 第五 地方裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日
- 第六 上等裁判所ニ控訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

上告狀ハ正本一冊及ヒ副本五冊ヲ差出スヘシ  
上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ差出スヘシ

- 第一 地方裁判所於テノ訴狀及ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫
- 第二 上等裁判所於テノ訴狀及ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫
- 第三 上告狀中ニ憑據トナス書類ノ寫ノ各書類ニ番號ヲ朱書シ編シテ一冊ト爲シ又ハ葉數多ニ付編シテ幾冊トナシタル者
- 右ノ訴狀又ハ答書及ヒ憑據ノ書類ノ寫ヲ所持セサル者ハ原裁判所ニ出願シ裁判所ノ簿冊ヲ訟庭ニ取テ見坐ノ日前ニ於テ之ヲ寫シ取ルコトヲ得ヘシ

若シ原裁判所ニ於テ書類寫取ノ出願ヲ許サハルニ因リ上告人其寫ヲ出シ能ハサル時ハ其旨ヲ上告狀中ニ記載スヘシ

○第十六條 上告者ハ其上告狀ニ添テ金拾圓ヲ大審院ニ預クヘシ若シ其金高ヲ預ケサル片ハ上告ヲナスコトヲ得ス

- 第一 若シ上告ヲ取上ケサル片ハ其預リ金ヲ没入ス
- 第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ預リ金ヲ還付ス
- 第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ付ケテ原裁判ヲ破毀セサル時ハ預リ金ヲ没入シ又訴訟入費規則ニ照メ被告人ノ費用ヲ償ハシム(被告人トハ上告者ノ相手方ヲ云)

○第十七條 上告ヲ爲ス者ハ先ツ原裁判所ニ届出ツヘシ原裁判所ニ於テハ書類ヲ三日内ニ大審院ニ遞送スヘシ

○第十八條 上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停メス大審院ニ原裁判ヲ破毀スルニ至ル即日原裁判所ニ通報シテ(大審院ヨリ郵便ヲ發ス)執行ヲ止メ更ニ審判落着ノ日ニ至テ前ノ執行ヲ取消シテ後ノ裁判ヲ執行セシムヘシ但内國人ヨリ裁判外ノ人民ニ對シ又ハ裁判外ノ人民ヨリ内國人ニ對スル上告ハ原裁判所ノ執行ヲ停ムヘシ

○第十九條 上告狀ハ原告人自ラ之ヲ捧クルモ又ハ代言人ヲメ之ヲ捧ケシムルモ本人ノ意ニ任ス

○第二十條 大審院ニ於テ判事審廳ニ不當ナル上告ナリト決時ハ何ヤノ理由ヲ以テ上告ヲ受理セサルノ旨ヲ言渡スヘシ

○第二十一條 判事審廳メ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ旨ヲ言渡シタル時ハ其後三日内ニ被告人呼出狀ヲ仕出ス可シ此呼出狀ニハ上告狀

○訴

ノ副本ヲ添フヘシ○第廿二條 被告人ハ呼出狀ヲ受取リタルヨリ三十日内ニ答辨書ヲ作り自身又ハ代理人ヨリ之ヲ大審院ニ捧クヘシ但被告人ノ住所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キハ八里毎ニ一日ヲ増スヘシ○第廿三條 大審院ニ於テ被告人ノ答辨書ヲ受取リシキハ院長ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ主任ヲ命ジ一件書類ヲ取纏メ遅緩ナク一件始末書ヲ作ラシメ然ル後ニ原被告對審ノ日ヲ豫定シ三日以前ニ原被告對審ノ呼出狀ヲ原被告双方ニ送達スヘシ○第廿四條 原被告對審ノ節ハ判事席ニ臨ミ最初ニ主任判事一件始末ヲ宣讀シ次ニ原告ノ陳述次ニ被告ノ陳述次ニ原被告交互ノ論辯ヲ審聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト次スルハ何ヤノ理由ヲ以テ原裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付更ニ其裁判所ニ裁判ヲ受クヘキ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ旨ヲ言渡スヘシ○第廿五條 若シ原告人ノ上告理ナシト次スルハ何ヤノ理由ヲ以テ上告ヲ行ハル旨ヲ言渡スヘシ

第四章 刑事上告ノ事

○第廿六條 違警罪及ヒ死罪ヲ除クノ外一切ノ刑事皆上告スルコトヲ得

○第廿七條 刑事ニ付上告スルコトヲ得ヘキノ人

第一 刑事ノ言渡ヲ受ケタル者 第二 檢事(檢事ナキノ地方ハ警察官之ニ代ルコトヲ得)

二十七丁

○第廿八條 刑ノ言渡シヲ受ケタル者上告ヲ爲サント欲スルハ其言渡ヨリ第三日迄ニ(三日間ハ決行セス)上告願狀ヲ其裁判所ニ捧ク又第十日迄ニ上告趣意明細書ヲ捧クヘシ(但裁判所ハ決放ヲ執行スル處ノ地方官ニ其事ヲ達スヘシ)○第廿九條 檢事ノ上告セント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二十四時ノ内ニ上告ヲ爲スコトヲ刑ノ言渡シヲ受タル者ニ達シ又第十日迄ニ上告趣意明細書ヲ作り之ヲ司法卿ニ送達スヘシ(但檢事ハ上告ヲ爲スコトヲ決放ヲ執行スル所ノ地方官ニ通知スヘシ)○第三十條 檢事及ヒ刑ノ言渡ヲ受タル者上告ノ期ヲ過ル時ハ上告ノ權ヲ失フヘシ○第三十一條 決放ヲ執行スル所ノ地方官ハ刑ノ言渡ヲ受タル者若クハ檢事ヨリ上告スルコトヲ達シタルハ決行ヲ止メ以テ上告ノ落着ヲ待テ獄舎ニ於テハ其刑ノ言渡ヲ受タル者ヲ別舎ニ勾置スヘシ(別舎ナキ者ハ便宜ニ隨ヒ監護スルヲ要ス)○第三十二條 刑ノ言渡ヲ受タル者自ラ上告狀ヲ書記スルコト能ハサル時ハ代理人ヲ獄中ニ延キ(獄中ヲ劃ソテ應接所ヲ設ケ他ノ囚人ト混セサルヲ要ス)上告趣意明細書ヲ代書セシムルコトヲ得其代理人ハ明細書ヲ本人ト共ニ姓名ヲ記ス可シ本人自ラ姓名ヲ記スルコト能ハサルハ其事ヲ肩書スヘシ(但代理人ヲ獄舎ニ延クハ之ヲ看守者ニ告ケ看守者ハ之ヲ裁判所ヘ届クヘシ)○第三十三條 刑ノ言渡ヲ受タル者幼年十五年未滿ヲ云フニシテ上告ヲ爲スノ權利アルコトヲ知ラサルハ其

○訴

親族五等親ヲ云代リテ爲ニ上告スルヲ得○第卅四條 裁判所ニ於テ上告趣意明細書ヲ受取タルハ其文書類ヲ分セテ三日内ニ之ヲ大審院ニ送送スヘシ○第卅五條 大審院ハ上告ヲ審察シ上告不當若クハ理由ナシト決スル時ハ理由ヲ付シタル判文ヲ原裁判所ニ發付シ上告人ニ傳達セシメテ後決行セシム上告理アリテ決スルハ原裁判ヲ破毀シテ更ニ之ノ裁判所ニ移シ若クハ大審院自ラ之ヲ審判スヘキノ旨ヲ判シ若クハ單ニ其擬律ヲ平翻シテ原裁判所ニ發付シ處分セシム其判文ハ並ニ理由ヲ付スヘシ○第卅六條 檢事上告スル時ハ趣意明細書及ヒ其文書類ヲ直ニ司法卿ニ送送シ司法卿ハ上告趣意明細書及ヒ其文書類ヲ相當ノ檢事ヲシテ之ヲ大審院ニ付シシテ大審院ニ於テ判文已ニ成ルハ司法卿ヲ經由シテ原裁判所ニ付シ履行セシム

十年三月太政官御布告第三十一號

控訴上告手續中民事上告者預ケ金ノ償還テ相違候迄差出スニ及ハサル旨明治八年第百號ヲ以テ布告候趣今般控訴上告手續改正候ニ付右布告ハ自カラ消滅候儀ト可相心得此旨布告候事

十一年七月太政官御布告第四十九號

民事刑事事ノ上告シテ已ニ裁判ヲ經タル者司法卿其裁判ヲ允當ナラスト思量スル者アル時ハ檢事ヲシテ再審ヲ求メシムルコトヲ得ヘシ

右布告候事

○太政官

十一年十二月二日太政官御布告第三十六號

帶勲有位ノ輩新年并紀元節天皇節參賀 儀三 通被定候條此旨布告候事

- 一 非役勲六等以上在京ノ輩ハ參内拜賀シ地方廳ヲ經テ賀表ヲ上ルヘシ
  - 一 但在官職ト雖モ判任以下ハ仍ホ非役ニ同シ
  - 一 非役勲七等以下同正七位以下ハ其參賀ニ地方廳ニ參賀スヘシ
  - 一 但等外吏タルノ類ハ仍ホ非役ニ同シ
  - 一 勲三等以上從三位官居中仕切門迄乘車馬ヲ得ヘシ
  - 一 但在官職ノ廉ヲ以テ參上ノ節ハ其官職ノ本分ニ從フヘシ
  - 一 勲六等以上從六位以上ハ皇居御門内迄乘車馬寄ヨリ昇降ヲ得ヘシ
  - 一 但在官職ノ廉ヲ以テ參上ノ節ハ上ニ同シ
- 十一年十二月四日太政官達
- 官省使府縣
- 明治十年五月第四十三號達大藏省中一等監吏補以下官等左之通改定候條此旨相違候事
- 但月俸服制等ノ儀ハ從前之通

太政官 ○附錄

一等監吏補 等外一等〇二等監吏補 等外二等  
 三等監吏補 等外三等〇四等監吏補 等外四等  
 十一月二十五日太政官御達第五十號 官省院使府縣  
 參謀本部被置候條此旨相達候事  
 同年同月六日陸軍省達 參謀局

其局被廢候條此旨相達候事  
 但第一課長以下諸官員ハ儀ハ追テ何分ノ儀相達候迄參謀本部ノ指揮  
 ヲ受テ相勤可罷在事

本部 長 次官 各一名 管東局 管西局 總務課  
 附地圖編算翻譯測量文庫等ノ諸課アリ六課

十一月二十九日太政官御布告第三十七號

明治九年十二月第百五十四號布告西洋形船水先免狀規則別冊ノ通改正  
 候條此旨布告候事

西洋形船水先免狀規則

第一條 明治十二年一月一日ヨリ以後下ニ記載スル海港即チ水先區ニ  
 於テ西洋形船舶ノ水先人トナリ營業スル者及ヒ西洋形船舶ノ水先船  
 トシテ使用スル諸船ハ此規則ニ從テ發行スル免狀ヲ交付スヘシ  
 第二條 水先ノ事業ニ關係シタル諸般ノ事務ハ內務省ノ統轄ニ屬シ同

省ニ於テハ充分其筋ニ明カナル者ヲ撰ミ此規則ニ準據シテ各試驗出  
 願人ヲ試驗スヘシ  
 第三條 免狀ハ左ニ記載ノ海港即チ水先區ニ於ケル水先人ニ交付シ且  
 現況ニ從テ其他ノ地方ニ於ケル水先人ニ交付スヘシ  
 第一 東京灣  
 即チ伊豆國石廊岬ヨリ同國神子本島及大島波浮港ヲ通過シ  
 テ安房國野島岬ニ至ル一線ヲ以テ疆界線トス  
 第二 和泉灘  
 即チ紀伊國宮岬ヨリ淡路國潮岬ノ仁頃ニ至ル一線ヲ以テ其南  
 界ヲ畫シ北ハ淡路國極北ノ部ニ於ケル東經百三十五度ノ所ニ  
 於テ畫シタル一線ヲ以テ疆界線トス  
 第三 和泉灘ヨリ瀬戸内ヲ通過シテ長崎迄  
 第四 長崎港  
 即チ肥前國福田村ヨリ同國伊王島ノ極北ヲ通過シ同國沖島及  
 ヒ香燒島ヲ經テ同國深堀ニ至ル一線ヲ以テ疆界線トス  
 第五 津輕海峽  
 即チ陸奥國尻矢崎ヨリ渡島國惠山崎ニ至ル一線ヲ以テ其東界ヲ畫  
 シ陸奥國大間村ヨリ同國龍飛ニ至ル一線ヲ以テ其南界ヲ畫シ同國

太  
 ○附

龍飛塔ヨリ渡島國白神塔ニ至ル一線ヲ以テ其西界トス

第四條 各海港即チ水先區内ニ供備スヘキ免許水先人ノ負數ハ其海港即チ水先區ノ現況ニ從フヘシ

第五條 水先人ノ免狀ヲ出願スル者ハ自己ノ技業及ヒ性質殊ニ平素ノ行狀ニ係リ確實ナル履歷証書ヲ豫テ其本貫又ハ寄留地ノ地方官廳ヲ經テ内務省ヘ差出シ置キ或ハ試験開場ノ時ニ於テハ直ニ試験官ヘ差出スヘシ

第六條 水先人タル者ハ年齡二十二歳ニ滿テ少クモ一ケ年間ハ一百噸以上ノ西洋形船ニ於テ船長若クハ一等運轉手ノ職ヲ執リシ者若クハ六ケ年間航海ニ從事シ其中一ケ年間ハ自今營業免許ヲ受ケントスル水先區内ニ於テ既ニ水先見習人トナリ航海ニ從事セルモノニ限ルヘシ但シ其水先區内ニ在ル諸港灣海峡及ヒ碇泊場ハ勿論危險ノ場所及ヒ之ヲ避ルトメノ重立タル記標或ハ方位又ハ潮ノ満干潮流燈光浮標礁標ノ位置ニ悉皆通曉シ且大船ヲ指揮シテ之ヲ運轉スルニ充分適當セリト試験官ヲ満足セシムルトヲ要スヘシ

第七條 受験人試験ヲ受テ正シク須要ノ條件ニ叶ヒタルト試験官之ヲ認ムル時ハ其旨ヲ内務省ニ報告シテ直ニ免狀ヲ交付スヘシ但シ此免狀ハ翌年一月一日以後ハ全ク其効力ヲ有セザルモノトス

太

○附

第八條 免狀ノ書狀ヲ請願セントスル者ハ毎年十一月一日以前其願書ヲ内務省ヘ差出スヘシ但シ之ヲ許可シ或ハ許可セザルトハ都テ内務省ノ意見ニ因ルヘシ

第九條 免狀ヲ遺失スルモノ又ハ磨損スルモノハ其事由ヲ記シタル願書ヲ内務省ヘ差出シ書替新免狀ヲ申請クヘシ

第十條 水先人ハ始メテ其免狀ヲ願受ル時金十圓又其書替毎ニ金一圓ノ手数料ヲ上納スヘシ

第十一條 水先人ノ試験ヲナス時ハ定日ヨリ少クモ十四日前其旨ヲ和洋兩種ノ新聞紙ヲ以テ公告スヘシ此公布ニハ其免許ヲ與フヘキ人數ノ限リ及試験ノ場所月日ヲモ記載スヘシ

第十二條 試験出願人ノ履歷証書ヲ以テ充分満足ノモノト爲ル時ハ其出願ノ順次ヲ以テ其姓名ヲ登簿シ登簿ノ順次ニ從テコレカ試験ヲナスヘシ

第十三條 此規則ニ從テ水先免狀ヲ受ケタル外國人ハ其執業上ニ限リ日本帝國内何レノ海岸ト雖モ上陸シ且其出發地ニ陸路歸ルヲ得ルノ特許ヲ與フヘシ

第十四條 第三條ニ規定セル水先區内ニ於テ無免許ノ水先人船舶ヲ嚮導スル片免許水先人ヨリ其船舶ノ嚮導ヲナサント申入レ又ハ其爲メノ信号ヲナス片ハ何時ニテモ免許水先人ヘ其職ヲ讓ルヘシ其職ヲ讓ルヲ拒ミ仍ホ其船舶ヲ嚮導シ或ハ免許水先人ト詐稱シ正當ナラザル免

狀ヲ用ユル者ハ五拾圓以内ノ罰金ヲ科スヘシ

第十五條 水先料ハ別表ニ記ス金高ニ超過ス一カラス但シ表中記載セザルモノハ其距離ノ遠近ニ隨テ船長ト水先人ノ間ニ相當ノ約束ヲ以テ定ムヘシ

第十六條 二人以上ノ免許水先人同時ニ於テ船舶ノ嚮導ヲ申入レ又ハ其信号ヲナス片ハ最初現ニ乗船シタル者其嚮導ヲ爲シ其水先料ヲ收領シ得ヘシ

第十七條 免許水先人水路嚮導専用ノ水先船ハ第十九條第一節第二節ニ示セル式ノ如ク之ヲ製シ其免狀ヲ内務省ニ願出ツヘシ内務省ハ檢査ノ上其免狀ヲ與フヘシ但此免狀ハ水先人免狀同様其効一ケ年ニ限ル者トシ年々其書替ヲ願出ツヘシ

第十八條 各免許水先船ハ免許ヲ得タル區域内ニ於テ其水路嚮導専用ノ爲ニ港灣稅噸稅燈臺稅等ノ諸稅ヲ免スヘシ

第十九條 各水先船ハ左ノ徵候ヲ以テ區別スヘシ

第一 水先船ノ外部ハ總テ黑色タルヘシ

第二 船尾及ヒ大帆ノ上部ニ於テ國字及ヒ羅馬字ニテ免許水先船ノ文字並ニ其番号ヲ明瞭ニ書スヘシ

第三 免許水先船ニ免許水先人ノ乗込アル時ハ桅上或ハ船首或ハ竿若クハ

他地誌ノ易キ場所ニ於テ日出ヨリ日没マテ水先旗ヲ翻揚スヘシ但シ水先旗ハ明治十年一月甲第一号海軍省布達ニ照準スヘシ

第四 免許水先人ノ乗込ミタル免許水先船ハ夜間其停留場ニ碇泊中モ亦運用中ニ於ケルモ地中ノ各所ヨリ認メ易キ桅上ニ於テ日出ヨリ日没マテ透明ノ白燈ヲ掲ケ又十五分毎ニ閃光ヲ發スヘシ而シテ總テ其他ノ時間ニ於テハ風帆船同様尋常ノ燈ヲ掲クヘシ

第二十條 日中ニ於テ左ニ記載スル信号ヲ表示スル時ハ水先ヲ要求スルノ信号ト認ムヘシ

第一 前掲ニ於テ其船ノ船首旗英語「ヤツク」又ハ國旗ヲ掲揚スル

第二 萬國普通ノ水先信号工工ノ符字ヲ掲示スル

夜間ニ於テ左ノ信号ヲ同時若クハ別特ニ表示スル時ハ水先ヲ要求スルノ信号ト認ムヘシ

第一 十五分毎ニ青燈ヲ掲出スル

第二 須臾ノ間歇ヲ以テ凡ソ一分時ノ間透明ナル白燈ヲ上甲板ノ舷部ニ於テ射發スル

第二十一條 各免許水先人ハ其免狀ハ勿論此ノ規則ノ寫ヲ一通ツハ交付スヘシ故ニ其筋ノ官吏又ハ雇主ヨリ其書類ノ閱覽ヲ要スル時ハ直ニ之ヲ示スヘシ若シ之ヲ拒ム時ハ内務省ニ於テ其執業ヲ停止シ或

太

○附



ハ其免狀ヲ取上クヘシ  
 第二十二條 此免狀ハ他人ニ貸與シ或ハ讓與スヘカラス若シ貸與シ或ハ讓與スル時ハ内務省ニ於テ其免狀ヲ取上クヘシ  
 第二十三條 内務省ニ於テ免許水先人其本分ノ職務ニ堪ザルカ若クハ亂醉又ハ不行跡アルカ或ハ故ナクシテ其職務ヲ執ルコトヲ嫌ヒ若クハ之ヲ怠リタルコトアリト思惟スル時ハ同省ヨリ吏員ニ命ジテ之ヲ審問セシメ其次第ニ隨ヒ其執業ヲ停止シ或ハ其免狀ヲ取上クヘシ〔水先料〕  
 十一年十二月七日太政官御達第五十一號  
 官省院使府縣  
 參謀本部中左ノ官被置候條此旨相違候事  
 參謀本部長 參謀本部次長

陸軍參謀本部ノ條例

○第一條 參謀本部ハ東京ニ於テ之ヲ置キ近衛各鎮臺ノ參謀部ヲ統轄ス  
 ○第二條 本部長ハ將官一人勅ニ依テ任ス部事ヲ統轄シ惟幕ノ機務ニ參畫スルヲ司ル  
 ○第三條 次長一人將官ヨリ之ヲ任ス本部長ト相終始シテ部事ヲ整理ス但之ヲ置クハ事務ノ繁閑ニ從フ而シテ其官階モ豫メ定メ時宜ニ依ル  
 ○第四條 凡ソ平時ニ在リ陸軍ノ定制節度團隊ノ編制布置ヲ審カニ預シテ地理ヲ詳密ニ材料ヲ料量シ戰區ノ景況ヲ慮リ兼テ異邦ノ形勢ヲ洞悉シテ參畫ニ當リ遺算ナキハ本部長ノ任ニシ

テ之ニ就テ其ノ利害ヲ陳スルヲ得  
 ○第五條 凡軍中ノ機務戰畧上ノ動靜進軍駐軍轉軍ノ令行軍路程ノ規運輸ノ方法軍隊ノ奏着等其軍令ニ關スル者ハ專ラ本部長ノ管知スル所ニシテ參畫シ親裁ノ後直ニ之ヲ陸軍卿ニ下シテ施行セシム  
 ○第六條 其戰地ニ在テハ凡テ軍令ニ關スル者親裁ノ後直ニ之ヲ監軍部長若クハ特命司令將官ニ下ス是カ為メニ其將官ハ直ニ大憲下ニ屬シ本部長之ヲ參畫シ裁ヲ仰クコトヲ得  
 ○第七條 此事情ノ洞悉ヲ詳密ナラシムル爲メ本部長ノ下ニ管東管西ノ二局ヲ置キ本部長大中佐ノ中各一人ヲ選ミ局務ヲ督理セシム  
 ○第八條 管東局ハ近衛及ヒ東京仙臺鎮臺ノ參謀部ト通報シ專ラ第一第二軍管並北海道ノ地理政誌ヲ詳カニ且兼テハ樺太滿州堪察加西伯里ニ及ボシ有事ノ日ニ於テ其參畫ノ圖略ニ備ヘシム  
 ○第九條 管西局ハ名古屋大坂廣島熊本鎮臺ノ參謀部ト通報シ專ラ第三第四第五第六軍管ノ地理政誌ヲ詳カニ且兼テハ朝鮮ヨリ清國沿海ニ及ボシ有事ノ日ニ於テ其參畫ノ圖略ニ備ヘシム  
 ○第十條 右二局ニ各參謀科佐尉官數員ヲ置キ局務ニ服事セシメ又四兵隊中ヨリ器幹アル少尉ヲ拔擢シ准參謀若干名ヲ置キ局務ニ從事セシム凡テ此將校ハ時々各科ノ諸隊ニ派遣シ若クハ其將校ト交任セシメ其進歩ニ准シテ其進級ヲ律ス  
 ○第十一條 毎年各軍管ニ於テ野營演習等ノ舉アレハ本部ノ將校ヲ派出シテ之ニ從事セシメ又時トシテ

太  
○附

ハ各管ノ將校ヲ派遣シテ地理政誌ノ實驗ニ服事セシム○第十二條 謀報ノ事モ亦此ニ管ニ區分シ各其管ノ局長之ヲ主任ス○第十三條 凡テ第四條ノ事項ニ就テ參畫スヘキ事アレハ本部長次官各局大中佐官ヲ集メテ圖誌ニ據リ審實シ可否ヲ議シ申奏スヘシ○第十四條 本部長ノ下別ニ一課ヲ置キ總務課トシテ部内ノ庶務會計等ノ事ヲ司ラシム課長副官中少佐ノ内一人之ヲ總理シ課内書記若干員ヲシテ人員布令並ニ圖籍版刺等ヲ分掌セシメ又會計官ヲシテ給料其他諸費計算ノ事ヲ掌ラシム○第十五條 以上二局一課ヲ以テ部ノ本體トシテ其支部トシテ參謀伴屬ノ諸課ヲ置ク其一ヲ地圖課トシ其二ヲ編纂課トシ其三ヲ翻譯課トシ其四ヲ測量課トシ其五ヲ文庫課トス○第十六條 此伴屬諸課ハ本部ノ管東管西二局ノ佐尉官ヲ以テ其課長ニ任シ若シハ他ノ陸軍將校其技術ニ通スル者ヲ選シ之ニ任ス必ズ一定セズ時ノ宜シキニ從テ皆本部長ノ命ヲ奉シ其課僚技術上ノ功程ヲ督視ス○第十七條 伴屬諸課ノ課僚ハ各自ノ技術ニ通スル人ヲ選シ事業ノ多少ニ准シ若干員ヲ置ク間々一時ノ備役ニ出ル者アリ唯專功ヲ以テ其功程ヲ立ツ○第十八條 其他部内使役スル給仕小使役夫等ハ皆總務課ニ屬シテ之ヲ管理セシム○第十九條 地圖課ハ地圖畫圖石版彫刻電氣量寫真術等凡テ模寫ノ用ニ供スル器械ヲ收藏シ從テ其術ノ工夫ヲ課定シテ各自ノ便用ニ供ス○第二十條 幕僚參謀部並

ニ各地管所ノ將校官暇ニ於テ測量記述スル所ノ各地方ノ圖稿等ハ皆此課ニ致シテ查實シ逐次ニ本圖ニ加書シ改正ヲ加ヘテ完備ニ至ラシムルヲ主トス○第二十一條 測量課派出ノ委員ヨリ本課ニ送致スル所ノ測量圖稿ハ先ツ該管ヲテ點檢ヲ歷ル後地圖課ニ移シ本圖ヲ改正シ或ハ繕寫收藏ス○第二十二條 編纂課ハ本部并外邦ノ政誌地理ニ関スル者並各國ノ兵制内外各地ノ戰史等ヲ類纂編輯シ或ハ本部長ノ命ニテ特ニ一種ノ編述ニ從事スルヲアルヘシ○第二十三條 翻譯課ハ歐米各國ノ書籍兵事軍務ニ益アル者ヲ譯出シ或ハ本部長ノ命ニテ特ニ一種ノ翻譯ニ從事スルヲアルヘシ○第二十四條 測量課ハ本部長軍卿ト合議シ上ニ地方ニ就テ測量スルヲアル時ハ該課ノ委員數人ヲ派出シ實地ニ就テ測量セシメ料稿ヲ該管ニテ算查考定スルノ後成功ニ就ク者ハ地圖課ニ移シ本圖ニ記上シ改正補足セシム○第二十五條 文庫課ハ以テ陸軍ノ圖籍文書ノ學術ニ供スル者ハ諸局ニ散屬スル日用品ノ外悉ク陸軍文庫ニ收藏シ本部長ノ命ニ依テ主管ノ管スル所トシ其類分彙別ヲ正シクシ搜索ニ便ナラシム○第二十六條 凡ソ書籍出納ノ法ハ符號ヲ照シ各其部内ニ藏シ本簿ニ照會シ差異無ラシメ出納ノ度毎ニ本簿ニ勘合シ日月姓名ノ遺失ナカラシム○第二十七條 其他詳委ノ事項ハ皆各課ノ條則ヲ以テ之ヲ規律ス其東西兩管局ニ於テ將校ノ出入並ニ准參謀ヲ教授スル方法モ亦是ニ同シ

太

○附

十一月十六日大政官御達第五十三號

部	本	謀	參
局長	次官	本部長將官	東中佐
一人	一人	一人	一人
課	課	課	課
課長	課長	課長	課長
若干人	若干人	若干人	若干人
西局長	西局長	西局長	西局長
若干人	若干人	若干人	若干人
課	課	課	課
課長	課長	課長	課長
若干人	若干人	若干人	若干人

各府縣

十一月廿日大政官御布告第三十九號

戶長職務ニ勉勵スル者ハ一ヶ月給料ノ高ヲ超ヘサル金額ヲ以テ賞賜スルヲ得但シ其費用ハ地方税ヨリ支出スベキ者トス此旨相達候事
地方税中營業稅雜種稅ノ種類及ビ制限左ノ通相定候條此旨布告候事
第一條 營業稅分ツテ三類トス其稅額第一類ハ金十五圓以内トシ第二類ハ金十圓以内トシ第三類ハ金五圓以内トス其目左ノ如シ
但國稅アルモノヲ除ク
第一類 諸會社及ヒ諸卸賣商
第二類 諸仲買商
第三類 諸小賣商及ヒ雜商
第二條 雜種稅ハ其種類ニ依リ各個ニ稅額ヲ定ム其目左ノ如シ
船明告船船云云ノ分車馬車人カ車荷積中車荷積大車荷積馬ノ類 國稅ノ半額以内
諸市場演劇其他諸興行并遊覽所 上リ高百分五以内
諸遊技場 大弓揚子 一ヶ年金二十圓以内
料理屋 西洋料理 待合茶屋 遊船宿 芝居茶屋 人寄席 一ヶ年金十圓以上
貨屋 兩換屋 酒漕店 一ヶ年金十五圓以内
古着古金古道具類 旅籠屋 諸飲食店 一ヶ年

太

○附

金十圓以内

湯屋 理髮床 雇人請宿 一ヶ年金五圓以内

遊藝師匠 遊藝稼人 相撲 一ヶ年金十二圓以内

俳優 一ヶ年金六十圓以内

附間 藝妓 一ヶ年金四十二圓以内

水車 一ヶ年金五圓以内

乘馬 附烟波 一ヶ年一頭ニ付金壹圓以内

屠牛 一頭ニ付金五十錢以内

第三條 漁業稅採藻稅ハ各地從來ノ慣例ニ依リ之ヲ徵收スヘシ若シ其例規ヲ改正シ又ハ新法ヲ創設セントスルモハ府知事縣令ヨリ内務

大藏兩卿一稟議スヘシ

第四條 府知事縣令ハ府縣會ノ決議ヲ以テ第一條第二條類目中ニ於テ賦課スル者ヲ取捨スルヲ得

第五條 府知事縣令ハ其賦課スヘキ各業ノ盛衰ヲ視察シ府縣會ノ決議ヲ以テ稅額制限内ニ於テ各個ノ稅額ヲ査定スヘシ

第六條 一軒内ニ於テ數種ノ營業ヲ爲スモノ又ハ卸賣仲買小賣ヲ兼スルモノハ其稅額ノ最モ多キモノ壹個ノミヲ徵收スヘシ

第七條 凡ソ稅額ハ一ヶ年ヲ以テ其制限ヲ定ムト雖モ各地ノ便宜ニ依リ

二十八丁

年額ニ準據シ日稅月稅トシテ之ヲ徵收スルコトヲ得

第八條 第四條第五條ニ於テ確定シタル課目課額ハ府知事縣令ヨリ内務大藏兩卿ニ報告スヘシ

十一年十二月十五日大政官達第五十二號

官省院使府縣

監軍本部被置候條此旨相違候事

監軍本部

十一年十二月十三日御達

其部條例別冊之通被定候條此旨相違候事

監軍本部條例

第一條 監軍本部ハ東京ニ於テ之ヲ置キ平時ニ在リ日常本邦全陸軍ノ檢閲並ニ軍令出納ノ事ヲ綜轄ス  
第二條 監軍部長ハ勅ニ依テ之ヲ任シ直ニ大藏下ニ隸シ各之ニ屬スルニ軍管内ノ檢閲軍令ヲ分掌ス  
第三條 第一第二軍管内ノ檢閲軍令ヲ掌ル者ヲ東部監軍部長トシ第二第四軍管内ノ檢閲軍令ヲ掌ル者ヲ中部監軍部長トシ第五第六軍管内ノ檢閲軍令ヲ掌ル者ヲ西部監軍部長トス但北海道ノ監軍ハ當分東部監軍部長ヲ兼帶セシム  
第四條 此三部ノ監軍部長ハ皆師團司令長官即チ中將ニシテ有事ノ日ニ在テハ旅團司令長官即チ鎮臺司令長官ノ統轄スル常備現役ノ二旅團並其管域二軍管内ノ第一後備軍ヲ統率シテ方面ノ敵衝ニ出ルヲ任トス但勅ニ依テ至高ノ司令長官ヲ置クハ是ニ隸屬スヘシ  
第五條

三部監軍部長平時其軍令出納並現役及第一後備檢閱ヲ擔任スルガ上ニ  
 上條ノ旨趣ニ基ツキ又現役第一後備ノ人員ヲ點檢シテ出師人員簿ヲ作リ  
 時ヲ逐ヒ點檢補足シテ不虞變應シ得滯莫ラシムルヲ任トス○第六條 凡  
 軍令ノ出納ニ關スル事進軍駐軍轉軍行軍ノ令軍隊發差ノ令並平時例外調練ノ  
 事皆該部ヲ經由シテ令下取決ス但兵界ノ機密ニ參畫スルハ參謀本部長ノ專任  
 トシ平時陸軍一切ノ點檢經理會計等ノ項ヲ主管シ戰時供給ノ事ニ任スルハ陸軍卿  
 ノ官責ニ至三區域ヲ嚴シ相混ズルヲ其ラシム○第七條 凡檢閱ノ事定期ヲ立  
 テテ勅ニ依テ隨次ニ巡行シテ之ヲ行フ然レモ秋季ニ於テハ殊ニ定則ノ  
 閱兵ヲナシ軍隊規律ヲ奉ズル程度ヲ監シ將校下士ノ能否勤怠ヲ察シ以  
 テ次年進級點檢ノ用ニ供ス此檢閱ハ三部彼是互換シテ巡檢スルノミナ  
 ラズ又近衛學校諸官廨ハ三部ニ分割シテ巡檢スベシ而シテ近衛諸隊ノ  
 檢閱ニ在テハ車駕親臨ノ前ニ於テスルヲ法トス但秋季ノ檢閱ニハ別ニ  
 砲工歩騎ノ將校並會計軍醫馬醫諸官ヲシテ隨行セシム○第八條 檢閱  
 ノ方法ハ率テ比年施行スル例ニ準ズト雖凡漸次ノ進歩ヲ徵スル爲ナル  
 ヲ以テ亦一定ノ例格ナシ但預メ陸軍卿及ヒ參謀本部長ト合議シ規格ヲ  
 制シ親裁ヲ經テ前以テ布告シ期ニ從事セシム○第九條 管内鎮臺司令  
 長官ヲシテ年毎ニ一次其管下所轄ノ將校ノ品行並材幹ノ優劣ニ就テ表  
 明申報セシム以テ廢補ノ參考ニ供ス○第十條 其他軍紀ニ關スル隊内

懲罰並各鎮臺下軍法會議ノ判決ハ鎮臺ヨリ四季毎ニ之ヲ申報セシム以  
 テ參考ニ供ス○第十一條 凡ソ三部ノ監軍部長ハ軍令ヲ出納スルノ外  
 其管下ニ軍管並其方面ノ地理ヲ詳カニシ參謀本部長ト謀議シ方面警動  
 ノ日ニ當リ遺策莫ラシム○第十二條 各軍管内若クハ其方面ニ於  
 テ警動ノ事アレハ鎮臺若クハ其管所ヨリ報告皆陸軍卿ト本管監軍部長  
 ト一而告ノ例ニ從フ然レモ監軍部長巡行中ナラズシテ東京ニアル時ハ  
 事ノ便宜ノ爲メニ連名ノ牒告ヲ以テ之ヲ陸軍省ニ送致スベシ○第十三  
 條 凡ソ三部ノ監軍部長ハ各自其幕僚參謀部ヲ置ク平時ニ在テハ參謀  
 大小佐一人同大中尉一人傳令使佐尉官一人並下士若干ヲ置ク○第十四  
 條 其戰時ニ當テハ要スル所ノ參謀官及ヒ會計官軍醫馬醫等ハ豫メ參  
 謀本部ニ於テ製スル所ノ出師名簿ニ依リ補足ス○第十五條 凡ソ  
 本部内ノ用度ヲ辨ズル爲メニ本部内ニ於テ三部相通シテ會計官ヲ置キ  
 軍吏一名書記二名派出シテ以テ會計ノ事ヲ司ル○第十六條 此例内第  
 三條ニ掲グル北海道ノ兵備ニ至テハ未タ全ク各軍管ト同一ノ緒ニ就カ  
 サルヲ以テ時宜ヲ權リ多少出入ノ例規ニ遵フ  
 十一年十二月廿四日太政官御達第五十四號 官省院使府縣  
 宮内省中侍補被廢更ニ侍補併ニ侍從長被置官等職制左ノ通被定候條此旨  
 相達候事

太 ○附

侍補 勅任官 侍從長 五等官  
 侍補 常侍規諫關失ヲ補益スルヲ掌ル  
 侍從長 常侍奉仕兼テ侍從ヲ監スルヲ掌ル

内務省

十一年十一月廿八日東京府布達甲第六十八號  
 本年八月第九一號藥用阿片賣買并ニ製造規則公布及ヒ内務省甲第二十  
 七號同規則施行日限明治十二年五月一日ヨリ布達相成リ候ニ付テハ医  
 師病院并ニ藥舖營業者及ヒ阿片製造ノ者ハ左件ノ通り相心得ニシ此旨  
 布達候事  
 藥舖營業者及ヒ阿片製造者ニ於テハ現在所持ノ阿片ノ試驗ヲ要スルモ  
 ノハ來ル十二月限リ内務省司藥場ニ差出スルニ同場ニ於テハ試驗ノ上  
 相當品ハ小品分チ印紙ヲ貼用シ之ヲ下渡シ其買上ヲ望ムモノハ定價ヲ以テ  
 買上ノ品位不相當品ハ其理由ヲ記シテ持主ニ返付スルニシ○藥用阿片賣捌キヲ  
 特許スルニキ藥舖ハ各郡區内ニ於テハ選定ノ上其住所姓名ハ追テ報告スル  
 醫師病院及ヒ一般藥舖等ニ於テハ同規則第八條ニ據リ特許藥舖ニ就キ之ヲ購求  
 スルニシ○特許藥舖ニ於テハ同規則第十條ニ據リ毎半年分拂ヒ受并ニ賣捌ノ總高等明  
 細表正副二通毎年一月八月兩度ニ當廳ニ差出スルニシ

十一年十一月廿八日内務省達乙第七十九號

府縣

本年第十九號公布中左ノ條々處分方為心得相違候事  
 一 地方稅ヲ不納スルモノ十年第七十九号公布ニ據リ財産公賣徵收スル  
 モ猶不足スルキハ其欠額ハ管内一般損失トシ賦課スルニシ  
 一 地方稅年度尾ニ至リ其一年度間ノ出納實賣ニ就キ殘額アル時ハ之ヲ  
 翌年度ニ繰越スルニシ若シ一年間ノ出納實賣ニ就キ不足ヲ生スルキハ  
 翌年度分ヲ以テ其欠ヲ補フニシ  
 十一年十二月四日東京府達乙第四十三號 郡區役所  
 墳墓土葬許否ノ儀ハ普テ朱引ノ内外ニ依リ區域相定リ居候儀ニテ今般  
 改正郡區ノ經界ニ拘ハラヌ從前ノ朱引經界ノ通タルニキハ勿論ニ候得  
 共自然郡區改正ノ際隨テ土葬區域モ變換候様相心得候者有之候テハ不  
 都合ニ付心得違ノ者無之様郡區内ニ可申示置為念此旨相違候事  
 十一年十二月六日内務省達乙第八十號 府縣  
 本年第十七號公布及ヒ第三十二號公達中左ノ條々處分方心得ノ為メ相  
 違候事  
 一 第十七號公布第六條每町村ニ戶長一員ヲ置ク云々右戶長旅行病氣息  
 引等ニテ不在ノ節ハ用機筆生又ハ手傳人等ヲ以テ其職務ヲ取扱ハシ  
 ムルヲ得

内務省 ○附録

第三十二號府縣官職制中郡區長ニ於テ處分ノ後報告スル條件及ヒ府知事縣令ヨリ特ニ委任スル條件ヲ除ク外部下人民ノ願伺書等ハ長官定ニテ差出サスルシ其郡區役所ヲ經由スルト否サルトハ地方ノ便宜ニ從フ可シ

一 郡區吏員任免ノ際赴任或ハ飯御又ハ其申付ノ節居住地ヨリ本廳迄出頭スル旅費ハ地方稅規則第三條第七項ニ照準シ其給額ハ府知事縣令ニ於テ適宜ニ制定ス可シ

一 郡區長書記ハ一般ノ官吏ト同ク商賈ノ營業相成ラサル儀ト心得ヘシ

一 三長ノ職務行政事務ヲ取扱フニ當リ過失アラハ官吏懲戒例ニ依リ處分スルシ

十一年十二月四日內務省達シ第八十一號

府 縣

本年第三十二號公布中左ノ條項處分心得ノ爲メ相違候事

一 郡長職制中第六項ニ郡長ハ町村戶長ヲ監督ス云々郡長ハ行政事務委任ノ權内ニ付テハ戶長ニ命令スルノ權アリト心得可シ

一 郡區長ノ席類ハ拜命ノ前後ニ依テ定ム可シ

十一年十二月四日警視本署布達甲第六十三號

冰製造人并發賣人取締規則左ノ通相定候條此旨布達候事

冰製造人并販賣人取締規則

第一條 凍冰ヲ製造セシト欲スル者ハ毎年其製造場ノ圖面并ニ貯藏スル所ノ地名ヲ詳記シ警視本署一願出許可ヲ受クニシ

第二條 卸賣營業ヲナサント欲スルモノハ其製造人及ヒ製造場ノ地名ヲ詳記シ前條ノ手續ヲナスニシ

第三條 製造人ハ其製造場ノ裝置等出張検査官吏ノ指揮ヲ受クニシ

第四條 製造場ハ時々検査官吏ノ巡視スルモノトス若シ有害物ヲ混入スルカ或ハ不潔ノ製ト見認ムルハ其製造ヲ差止メ又ハ投棄ヲ命スルコトアルニシ

第五條 凍冰貯藏スルキハ其時々所轄分署一届出他管下ヨリ輸送スルモノハ其管轄廳許可ノ証ヲ添エニシ検査ヲ受クニシ若シ其凍冰惡製ト見認ルルハ第四條ニ準シ處分スルコトアルニシ

但貯藏場不潔ナルルキハ修理又ハ場所替ヲナサシムルコトアルニシ

第六條 卸賣小費ノ店頭ニ何地製造ノ冰ト大書シタル看板ヲ掲ケ行商ハ荷ビ(漏箱等)ニ表出スルニシ

十一年十二月六日東京府布達甲第七十二號

本年甲第四十一号布達郡區長掌管ノ條件ヲ其郡區内ニ施行スル文書ハ郡區長ノ各印ヲ用ヒ右條件ニ付人民ヨリ指出スヘキ願伺届等ノ書面ハ郡區長ノ各定ヲ用ユニシ此旨布達候事

内 ○附

同年同月同日同府達

郡區役所

各町村戸長事務取扱所ノ義戸長役場ト相唱可申且役場ニ於テ地所建物  
船船等貸入書并賣買等公証之節與書加印ハ戸長實印ヲ用ヒ割印ハ役場  
印ヲ可相用此旨相達候事

但戸長役場印ハ方一寸ト定メ其管理スル町村名ヲ列記シ該郡役所ニ  
於テ調製付與取計印影可屈事

郡區役所

十一年十二月五日東京府達

諸願同屆書式之儀ニ付明治九年十二月當廳乙第八十三号ヲ以相達置候  
中郡區役所又ハ戸長ヲ經由スルモノハ自今宛名ノ後ニ前書云々ニ付與  
印云々ト記載署名押印可致尤特ニ書式アルモノハ其書式ニ照據候儀ト  
可相心得此旨相達候事

同年同月同日同府達

郡區役所

公債証書ヲ以テ抵當トナシ金錢借入候者金主ハ對シ借用証文差入候儀  
普通ノ手續ニ候處金主ノ求ニ應シ右借用証書ノ外白紙又ハ文字記入セ  
サル証券野紙ハ實印ヲ押捺シ借用証文ニ添ヘ金主ハ差入候向モ多数有  
之哉ニ相聞一右ハ実印ヲ他人ハ相預ケ候ト同様ノ儀ニテ法律上不可有  
之事ニハ候得共萬一心得違ヨリ右様致置候テハ他人右印紙ハ何様ノ文  
面記入被致候モ其事件承諾セシ者ト同様相成意外ノ迷惑ヲ醸シ候モ難

圖次第ニ付公債証書所持ノ者ハ懇篤及示諭將來決テ右等ノ不都合無之  
様可取計此旨相達候事

十一年十二月九日内務省達乙第八十二號

府縣

本年第三十二號公布中左ノ條々處分方心得ノ為メ相達候事

一郡區長郡區書記ノ滿年賜金ハ地方稅ヨリ支給スヘシ

一府縣官ヨリ郡區長郡區書記ニ轉任スル者并ニ郡區長郡區書記ヨリ府  
縣官ニ轉任スル者ハ各々其原任ノ勤績ニ依リ其際一旦打切滿年賜金  
ヲ給スヘシ

十一年十二月九日警視局達甲第六十四號

政談講學ヲ目的トシ演說等若クハ論議スル會場ヲ開設セントスル者ハ  
左ノ手續ヲ以警視分署一可届出此旨布達候事

但現今開場ノ者ハ本文ニ準シ可届出事

第一條 凡政談講學ヲ目的トシ衆人ヲ聚メテ演說若クハ論議スル者ハ  
豫メ會主及會員三人以上ノ連名ヲ以テ届書ヲ出スヘシ

但定日時ナキ者ハ開會ノ日ヨリ少クモ三日前ニ届書ヲ出スヘシ

第二條 届書ニハ會合ノ趣意場所及定日時又ハ定日時ナキ事及ヒ會主  
ト會員三人以上ノ住所屬族姓名ヲ明細ニ記載スヘシ

十一年十二月十日警視局達第百七十一號

○附



外國人取扱心得第四十四條左ノ通過加候條此旨相違候事

但明治九年六月達第十六號ハ廢止ノ義ト可心得事

第四十四條 居留地外ニ僑寓スル外國人及ヒ其雇人并同居ノ内國人共

族籍姓名等取調出入毎ニ相對借家ハ該地主又ハ差配人ヨリ直ニ所轄

分署ニ届出官舎ハ該官廳ノ通知ニ依リ本署ヨリ相違スベシ故ニ巡查

ニ於テハ猶其現狀探知ノ爲メ常ニ持部内ヲ注意シ若シ無届等ノ者ヲ

ル時ハ其事詳細取調速ニ本署ニ申出ニシ

十一年十二月十一日東京府達乙第四十六號 郡區役所

地方税ヲ不納スル者明治十年第七十九號公布ニ據リ處分スベキハ勿論

ニ候得共財産ヲ公賣徵收シ猶不足ヲ生スルキハ其欠額ハ管内一般ノ損

失トシ賦課スベキ等ニ付其時々本廳ニ可届出此旨相違候事

十一年十二月十三日内務省達乙第八十四號 府 縣

本年第十九號公布中左ノ條々處分方心得ノ爲相違候事

一 是迄府縣税支拂爲換方一府縣税ヲ以テ給料支給シタル分地方税施行

ノ上モ同様取扱ハスベキニ就テハ右給料ハ地方税費目第七項郡區役

所諸費ハ内ヨリ支出スベシ

但郡區役所ニ爲換方ヲ置ク節モ本條ノ通タルニシ

一 地方税費目中第十二項ヨリ長以下給料云々戸長給料ノ額ハ府知事縣令

ノ權ヲ以テ適宜ニ之ヲ定ムニシト雖戸長職務取扱諸費ハ府縣會ニ

付シ其多寡ヲ議定スルヲ得セシムニシ

十一年十二月十三日警視局達乙第三十四號 郡區役所

市街ニ於テ火ノ番ノ者鉦鼓又ハ鐵棒等ノ鳴物不相用様諭達可致旨本年

四月乙第十五號ヲ以テ相違置候處拍子木相用ト候ハ不苦儀ニ候條此旨

爲心得相違候事

十一年十二月十三日警視局達 各分署

消防番械ノ内龍吐水玄蕃桶挑燈等ノ記章區々相成候趣自今左ノ雛形ノ

通相定候條改製可致尤龍吐水玄蕃桶ノ儀ハ破損修繕等ノ節ヨリ改製可

致此旨相違候事(龍吐水雛形略ス)

但挑燈橫線ノ儀ハ從前ノ通ト可心得事

第一方面 挑燈 四一拵 第二方面 挑燈 二拵 十五分

第三方面 挑燈 三拵 二十 第四方面 挑燈 四拵

第五方面 挑燈 五拵 五分 第六方面 挑燈 六拵 四分

玄蕃桶ニ龍吐水記章ニ準シテ書記スベシ(挑燈雛形略ス)

同年同月同日同局達 各分署

第六方面消防組纏色連印左ノ圖面ノ如ク改正候條此旨相違候事

但管轄消防夫一爲心得可相違事(圖面畧ス)

内 ○附

十一年十二月十六日內務省達乙第八十五號

府縣

本年第三十二號公達中左ノ條々處分方心得ノ爲メ相違候事

一凡ソ府知事縣令ヨリ專任ヲ得タル條件ニ付郡區長ヨリ人民ニ許可ヲ  
予ル者ハ郡區長ノ名ヲ以テシ其免許鑑札モ郡區長ノ名ヲ以テスニシ

但當分在來ノ分ハ舊鑑札ヲ用ニルモ妨ケス

一町村戸長ノ役場ハ其町村ノ便宜ニヨリ私宅ニ於テ事務ヲ取扱ハシム  
ルモ苦カラス

十一年十二月十七日東京府達乙第四十八號

郡區役所

郡區長一般掌管事務之外明治十二年一月ヨリ特ニ左ノ件々委任候條此

旨相違候事

委任件

一士族平民籍ノ編入願ノ事 一士族除族跡襲族願ノ事

一失踪人ノ家名ヲ相續スル願ノ事 一失踪人ノ養子ヲ離縁スル願ノ事

一失踪人ノ子ヲ他人ノ養子トナシ或ハ出稼セシムル等願ノ事

一失踪人ノ妻ヲ離縁スル願ノ事 一失踪人ノ妻ヲ離縁スル願ノ事

一國民軍名簿編制并加除ノ事 一國民軍名簿編制并加除ノ事

一社寺ノ建物修繕新築又ハ取毀願ノ事(但式内及國史現在ノ神社此限ニ非ス

十一年十二月內務省達

府縣

我有版權ノ圖書ニシテ外國人ノ翻刻ニ係ルモノハ內國人民ニ於テ販賣

一派出說教願ノ事 一改葬願合葬届及改宗届之事

一例規ニ依リ貧民ハ施療券ヲ付與スル事

一新調修繕諸車及五十石未満ノ新調船免稅船ヲ檢スル事

一五十石未満ノ船及諸車賣買讓渡願并訖事件及遺失舟車等ニ係リ他管

應ト往復スル事 一解船破船届ノ事

一諸酒釀造受賣行商鑑札願ノ事 一清酒ヲ除クノ外諸酒造高ヲ檢査ス

ル事 一牛馬賣買營業鑑札願ノ事 一煙草營業鑑札願ノ事

一府稅アル諸營業鑑札願ノ事(但東京警視本署所轄ノ者ハ此限ニ非ス

一公立小學教員旅行願ノ事 一公立小學暑中休暇期日及授業時間繰

替并臨時休業願ノ事 一官有地拜借料ヲ徵收スル事

一官有地拜借人所持ノ建物ヲ賣買スルル其奥印ヲナス事

一藝娼妓他管内ハ出稼願ノ事

十一年十二月十八日警視本署布達甲第六十六號

政談講學ヲ目的トシ演說若クハ論議スル會場ヲ開設セントスル者ハ警

視分署ニ可届出旨本月甲第六十四号ヲ以テ布達候處警察官吏ヲシテ會

場ニ監臨セシメ候條爲心得此旨布達候事

内 ○ 附

不相成ハ勿論ノ事ニ候得共尚心得違之者無之様兼テ其旨相諭置可申此旨相達候事

十一年十二月二十日東京府達

郡區役所戸長役場并六郡内公立小學校

昨明治十年丙第百八十二號ヲ以テ相達候巡迴訓導心得別紙ノ通改正候條此旨相達候事

巡迴教員心得

○第一條 巡迴教員ハ其受持各學校ノ授業ヲ整頓シ及ヒ教員ニ欠令アルルルハ補授スルヲ以テ責任トス

○第二條 巡迴教員ハ必ス其ノ受持各學校ノ區域内ニ住居又ハ寄宿スルモノニ限ル

○第三條 受持各學校ノ在勤ハ其緩急整不整ヲ見計リ適宜出校ス

○第四條 受持各學校ノヲ要ス

○第五條 痛氣忌引其他事故アリテ欠勤スルルハ其都度學務課ニ届出

○第六條 毎月末日正午十二時迄ニ府廳ニ出頭シ各巡迴教員ノ實踐ノ景況及ヒ授業ノ得失ヲ陳述ス

○第七條 毎月巡迴日誌ヲ製シ置キ前條出廳ノ節之ヲ學務課ニ出ス

十一年十二月九日東京府庶務課達

各郡區

本年九月當府甲第三十五号布達ノ趣モ有之代言免狀ノ義左ノ通り御取扱有之度為念及御通知候也

一免狀ハ本月中本人ノ下附受印取置候事

一免許料ハ明治十二年一月一日ヨリ十日内ニ收入本府會計課ニ上納ノ事

一舊免狀ハ一月十日迄ニ引上ケ本府庶務課ニ還納ノ事

十一年十二月九日警視局達

各分署

巡查志願書式之儀ニ付テハ本年三月廿六日第六十号ヲ以テ相達置候處今以認メ方區々相成不都合候條以後薦學致候即ハ第六十號達ニ相違無之様精々取調可差出此旨相達候事

十一年十二月廿五日東京府布達甲第七十六號

組稅徵收方ノ儀ニ付本年甲第五十六號ヲ以テ布達及ヒ置候處來ル明治十二年一月一日ヨリ左ノ諸稅ヲ除クノ外國稅地方稅共都テ郡區役所ニ於テ徵收為致候條此旨布達候事

府廳直納スル稅目如左

國立銀行稅 株式取引所稅 米商會所稅 度量衡稅 地券証印稅

十一年十二月廿五日警視局布達甲第六十七號

牛乳搾取人取締規則中第九條ヲ十條トシ第九條左ノ通追加候條此旨布達候事

牛乳搾取人取締規則

内 ○附

第九條 乳牛若シ狂病犬ノ為咬傷ヲ受ケシ時ハ全瘡後尚一ヶ月間販賣

スルヲ禁ス

十一年十二月廿四日內務省達乙第九十一號

府 縣 疎 府

明治九年五月當省乙第六十四號ヲ以等外吏ヲシテ警察事務ニ從事セシメ候儀可相廢旨達置候處自今等外ニ準スル雇員ヲ置誼事務ニ屬スル文書計算等ノ雜務為取扱不苦候條此旨相達候事

十一年十二月二十五日警視局達

各分署

政談講學ノ目的トシ衆ヲ集メ演說若クハ論議スル會場ヲ開設セントスル者ハ可届出旨本月甲第六十四号ヲ以テ布達候處右布達ニ違背スル者ハ集會ヲ解散セシメ其事由具狀ス可シ此旨相達候事

大藏省

十一年十二月四日大藏省布達甲第六十七號

舊貨幣新貨幣ト交換并公納ノ儀明治十年十月當省甲第二十六號布達ヲ以本年十二月迄延期候處猶又來明治十二年十二月迄延期候條此旨布達候事

但交換代金ノ儀ハ本年九月當省乙第四十二號達ノ通ニ候事

十一年十二月十日大藏省達乙第六十五號

府 縣

廿九丁

紙幣局ノ儀本月十日大藏省印刷局ト改稱候條為心得此旨相達候事

府 縣

酒類受賣營業ノ者御小賣ノ區分各府縣ニ於テ取扱方區々相成居候趣ニ相聞候條尔後ハ酒類營業人ニ賣渡スモノヲ御賣トシ自用人ノミニ賣渡スモノヲ小賣ト相定ノ可申此旨相達候事

陸軍省

十一年十二月十七日陸軍省達甲第廿六號

府 縣

本年第十七號公布ニ付テハ徵兵恩給金其他當省諸例規中従前區戶長ニ於テ取扱ヒ候條件ハ向後郡區長及ヒ戶長ニ於テ取扱候儀ト可相心得此旨相達候事

十一年十二月廿四日陸軍省達

各鎮臺

後備軍召集條例第四條復習術科表別表之通改正候條此旨相達候事

山 砲	砲 卒	山 兵	砲 卒
體 操	體 操	體 操	體 操
生兵運動	生兵運動	生兵運動	生兵運動
徒歩 小隊運動	徒歩 小隊運動	徒歩 小隊運動	徒歩 小隊運動

陸軍省 ○附 錄





式書

本籍ノ者 華土族平民 他管ヨリ寄留シテ 某府縣華土族平民 他ノ大區ヨリ寄居シテ 第何大區華土族平民 戸ヲナスモノ

同居付籍或ハ他家ニ寄留寄居其地便宜ノ為各自名札標出スル者ハ左ノ書式ヲ用ユニシ

同居ノ者 華土族平民 寄居ノ者 何大區華土族平民 付籍ノ者 華土族平民 寄留ノ者 何府縣族籍

式書願志查巡

巡查奉職志願有之別紙條目ノ趣按テ 確守可仕候御試檢ノ上御採用被成下 度此限奉願候也

第何大區何小區何町何番地 何府(土族)平民 何誰長男二三男 年号月日 姓名印 年齡

巡查奉職中可確守誓約ノ條目 職務規則ハ勿論時々御達ノ趣謹之相 守可申候

書狀証保受引元身查巡

身元引受保証狀(東京府住居者限) 何府何國何小區何町何番地 何府(土族)平民 何ノ某

右者身元行狀情成有有之巡查奉職中誓約ノ趣謹之可相守儀私ニ於之保証仕候若借財等不都合有之節ハ則私引受相辨之可申尤 旅行或ハ他府縣等移住候儀有之候ハ引 受代人相立可申候依テ如件

第何大區何小區何町番地 何府縣土族平民 年号月日 何某印

式書証之許免版

第何號 何府縣何族籍 何誰藏版 何府縣何族籍 何誰藏版

右者明治何年月日ヨリ向三十年ノ間版權免許候也 何年月日 內務卿某印

○檢査主任之印

式書裏渡讓二其

免狀裏面 府縣印 表面版權免狀裏渡候也 何年月日 何誰印 族籍 何誰殿

- 一 職務權外ノ事ヲ撰リニ議論致シ間敷候事
- 一 常務ノ傍ニ警備ノ為ノ練兵等ハ精勤可致事
- 一 奉職ニテ年未滿ニテ退職願候儀ハ 決シテ致間敷事
- 一 病氣ニヨリ奉職難相成節ハ該區病院診斷証明ヲ得テ退職可致事
- 一 撰リニ金錢ヲ借リ或ハ物ヲ買ヒ價ヲ借リ候儀ハ切致シ間敷事

式 警視局 御中

内 ○書





式書屈版分受讓受買

年号月日

賣主(或公債主) 何誰印  
住所

買主(或受主) 何誰印  
同上

(版主死去相續人受継  
者其獨り其名ヲ以テス  
版權相續人) 同上  
何誰印

前書ノ通届出候ニ付進達候也  
内務卿某殿  
年号月日

何縣知事 某印

証書

一金何圓也  
金子借用ノ証

右ノ無様專用有之商用資本ニ借用申處實正也返済ノ儀ハ来ル何月何日限リ元金何圓付テ月金何程ノ利分相添或ハ毎月幾日元利共無相違可致返済候萬一及遲滞候ハ証人引受此度可致返済候爲後日借用証書仍テ如件  
何縣何町何番地

例文

年号月日

何某殿

何縣何族平民  
借主 何誰印  
証人 何誰印

文証用借子金入差ヲ物當抵

一金何圓也  
此抵當物何品

若人金圓要用存借用申處實正也返却ノ儀ハ来ル何年何月何日限リ元金何圓元利足差加(元利共返済可致候方)其期至リ差支候節右抵當物賣却代價ノ多寡不  
管証人引受速ニ皆済可致候其証仍テ如件

年号月日

何縣何町何番地  
借主 何誰印  
証人 何誰印

何縣何町何番地  
何某殿

内

書

<p>預金証書</p>	<p>年賦返濟借用金証書</p>
<p>一 金何百圓也 記 但ニ元金何圓ニ付一ヶ月ノ利子何程 右正受取預リ置候處確實也然上ノ前書ノ利子相加ノ本金トモ入ノ節ハ無差支返濟可致候為後百仍テ如件 年号月日 何某殿 何縣何大何小何柯何番地 預人 何誰印 証人 何誰印</p>	<p>一 金何百圓也 記 但ニ元金何圓ニ付一ヶ月ノ利息何程 右ノ金平借用候處確實也返濟ノ儀ハ來ル何年何月迄何年賦返濟ノ何程ノ取候ニテ前書約定ノ通リ利息差加配度返却可致候方其期ニ至リ差支候ハ右約定ニ係証人ヨリ元利共皆濟毛頭損失相掛申間敷候為後証仍テ如件 年号月日 同 借主 何誰印 証人 何誰印 何某殿</p>

<p>他人 貸金</p>	<p>諸品書入証</p>
<p>一 金何百圓也 記 右別紙通リ何誰貸金何百圓ノ証書ヲ抵當トシ金何圓ニ付一ヶ月ノ利子何程ヲ以テ何引當年何月何日迄借用候處實止也若シ期限至リ返濟相滞候ハ別紙ノ貸金証書ヲ以テ貴子借 年号月日 何縣何大何小何柯何番地 借主 何誰印 何某殿</p>	<p>一 金何百圓 記 但ニ元金何圓ニ付一ヶ月ノ利子何程 此書入品何品何程 右品書入書面ノ金字受人ノ立會ニテ正受取致借用候處確實也返濟ノ儀ハ來ル何年何月何日迄元利共皆濟可致候若シ其節ニ至リ差支候ハ書入物品受人引受テ無違背返金可致候其証依テ如件 年号月日 何縣何大何小何柯何番地 借主 何誰印 証人 何誰印 何某殿</p>

内

書

諸品質入証	抵押物以金子借用延期
<p>一金何圓 記</p> <p>但シ元金何圓ニ付一ヶ月利子何程</p> <p>此質入品何品何程</p> <p>右ノ通り致質入書面ノ金子証人立會ニ受取借用申處實正也質入期限ノ儀ハ本日ヨリ來何月何日迄ニ前書ノ利息ヲ差加(物品引換返金可致候方一其期ニ至リ返金差支候ハ右致質入置候物品無断ニ貴殿ノ所有ニ被成候トモ其節故障申聞敷候其証依如件</p> <p>年号月日</p> <p>何某殿</p> <p>何縣何町何番地</p> <p>質主 何ノ誰印</p> <p>証人 何ノ誰印</p>	<p>一金何百圓也</p> <p>此外利金何圓 但シ何年何月ヨリ當何年何月何日ヨリ</p> <p>合金何圓也</p> <p>右ノ何種借用致候金子ニ批者保証相本日限返済可致約定候處返却ノ儀本ハ於テ差支候并兼テ入置候抵押物我等引受右金調達中何月何日迄於証人ニ借用候處實正也満期本金利子取揃返済候ハ右抵押物勿論本人証書返却可被下候為後</p>

無利足預	金証書式	地所質入証
<p>日依テ如件</p> <p>年号月日</p> <p>何某殿</p> <p>何縣何町何番地</p> <p>借主 何ノ誰印</p>	<p>一金何百圓也</p> <p>右之通証人立會ノ上無利息ニ預リ置候處實正也御用ノ節何時ナリ相渡可申候ハ運滞候ハ証人致辨償候其証依テ如件</p> <p>年号月日</p> <p>何縣何町何番地</p> <p>預主 何ノ誰印</p> <p>証人 何ノ誰印</p>	<p>地所質入証</p> <p>一金何百圓也</p> <p>何縣何町何番地</p> <p>表間口</p> <p>裏行</p> <p>此給坪數何坪何</p> <p>此地價金何百圓券狀一通年限中貸主(相渡置申候</p>

内

書

右當何月ヨリニ年或ハ何月限地所賃入致シ書面ノ金口借用致候依テ右年奉中地所  
 質主誰カ引取地代同人方取立地租其外區入費等總之同人ヨリ相勤可申若ク期限  
 至リ返金不行毎節申速券狀御書換相願可申候為後日實地証書如件  
 但家作建具等ハ本文ニ相籠リ不申候

年号月日  
 何之誰印  
 借主  
 証人  
 何之誰印

右之通相違無之候也  
 何大區一小区  
 戸長  
 何之誰印

建家書入賃之証  
 一金何百圓也  
 右ハ第何大區何小区何町何番地有之拙者所持建家別紙第番ヨリ第何  
 番迄朱書繪圖面ノ通書入致前書ノ金高借用申處確實也返済ノ儀ハ来ル  
 何年何月何日限り無相違返却可申候萬一期月至リ返金相滞リ候節ハ  
 右建家賣却致シ速ニ返済可申候且如何ハ變事有之候共本人ハ勿論証人  
 等辨償致シ貴殿工御損毛相掛申間敷候尤外工書入等一切無之為後日

建家書入賃証依テ如件  
 年月日  
 何之誰印  
 借主  
 証人  
 何之誰印

三十丁

建家書入賃証依テ如件  
 年月日  
 何之誰印  
 借主  
 証人  
 何之誰印

前書拙者所有地ノ内貸渡建造有之儀相違無之候也  
 右之通相違無之候也  
 同  
 何之誰印  
 借主  
 証人  
 何之誰印

建物圖面書式  
 第一番  
 何坪

圖面ノ如キ朱印ノ建物ヲ  
 書入質下為スルハ第一番ヨリ  
 第三番マテ合三棟ヲ書入  
 質下為スル証文ニ記シ  
 圖面ト共質取主渡シ置ク

善

置之ハシ  
美濃紙  
大判紙  
又公右  
法三同  
紙ヲ用

第二番  
土裁  
何坪

第三番  
二階造  
本屋  
何坪

何縣何大區何小區何番地住居  
寄留

何某殿

若上表ニ換テ其何枚ニ繼テ合ニ繼  
目ニ裏ニ摺印ヲ押スル

但レ圖面ノ寫ニ枚ヲ  
戸長役場ニ出シ置ク

其二

第一番  
平屋  
何坪

第二番  
土裁  
何坪

第三番  
二階造  
本屋  
何坪

何縣何大區何小區何番地住居  
寄留

何某殿

何某印

譬ハ八圖ノ如ク朱引建物ニテ第一番第一番合目棟ヲ書入  
質上爲スト片ハ其旨ヲ證文記入ノ他ノ建物ハ墨引ヲ書  
入質ノ外也下記ノ圖ニ共質取テ渡スル  
但レ圖面ノ寫ニ枚ヲ戸長役所ニ出シ置ク

作家

其三

何號

何年何月何日

何大區何小區何番地何

番ノ建物ヲ何其ヨリ何

其書入質ノ爲タリ

何年何月何日

戸長何某印

何號

何年何月何日

其四

建物記載帳(建物ノ質受  
讓受ノヲ書込法)

何年何月何日

何年何月何日何大區何小

區何番地何者ノ建物ヲ

何其ヨリ

讓受申候也

第何大區何小區何番地住居

何某印

家作建物賣渡證

第何大區何小區何町何番地ノ内

一瓦葺二階造建家一ヶ所

代金何百圓也

間口何間

奥行何間

此坪何何合何々

右ハ是迄拙者所持ノ建物ニ候處今般別紙圖面書ノ通リ前書代金ヲ貴般(賣渡シ  
即金圓正請取候然上ハ此建家行他ヨリ故障等切無之方異論有之節ハ証入引請速辨明

内

書

建物賣渡證之書式

賣渡證(御書)者指御書關款候爲後日賣渡證仍于如件

年月日

第何大區何小區何町何番地

賣主 何誰印

同住所 何誰印

右此地有所有地三有之候建物三相違無之候也

年月日

地主 何誰印

前書之通相違無之候也

右 戶長 何誰印

何年何月何日賣渡

第何大區何小區何町何番地内建物

賣主何町何番地

五筆三階迄

此坪何坪何合何

右未書

何之誰印

建家賣渡證

第何大區何小區何町何番地内  
第一番

其

一 草平家造

與開行何町何間

此建坪何坪何合何々

第二番

二 階造土藏

與開行何町何間

此建坪何坪

第三番

三 草平家物置

與開行何町何間

此建坪何坪

代金何百何十圓也

右是若拙者所持建三候處今般親類相談上別紙圖面朱之通リ前書代金三貴殿へ賣渡即金圓正三受取申候然ル上向後他ヨリ拒障一切無之若レ彼是異乱申者有之候ハ証人引受速三埒明貴殿御苦難相掛申間敷候爲後日賣渡證依テ如件

年月日

第何大區何小區何町何番地

賣主 何誰印

証人 何誰印

何誰殿

右ノ家作拙者所有地三建造有之候儀相違無之候

第何大區何小區何町何番地主

内

書

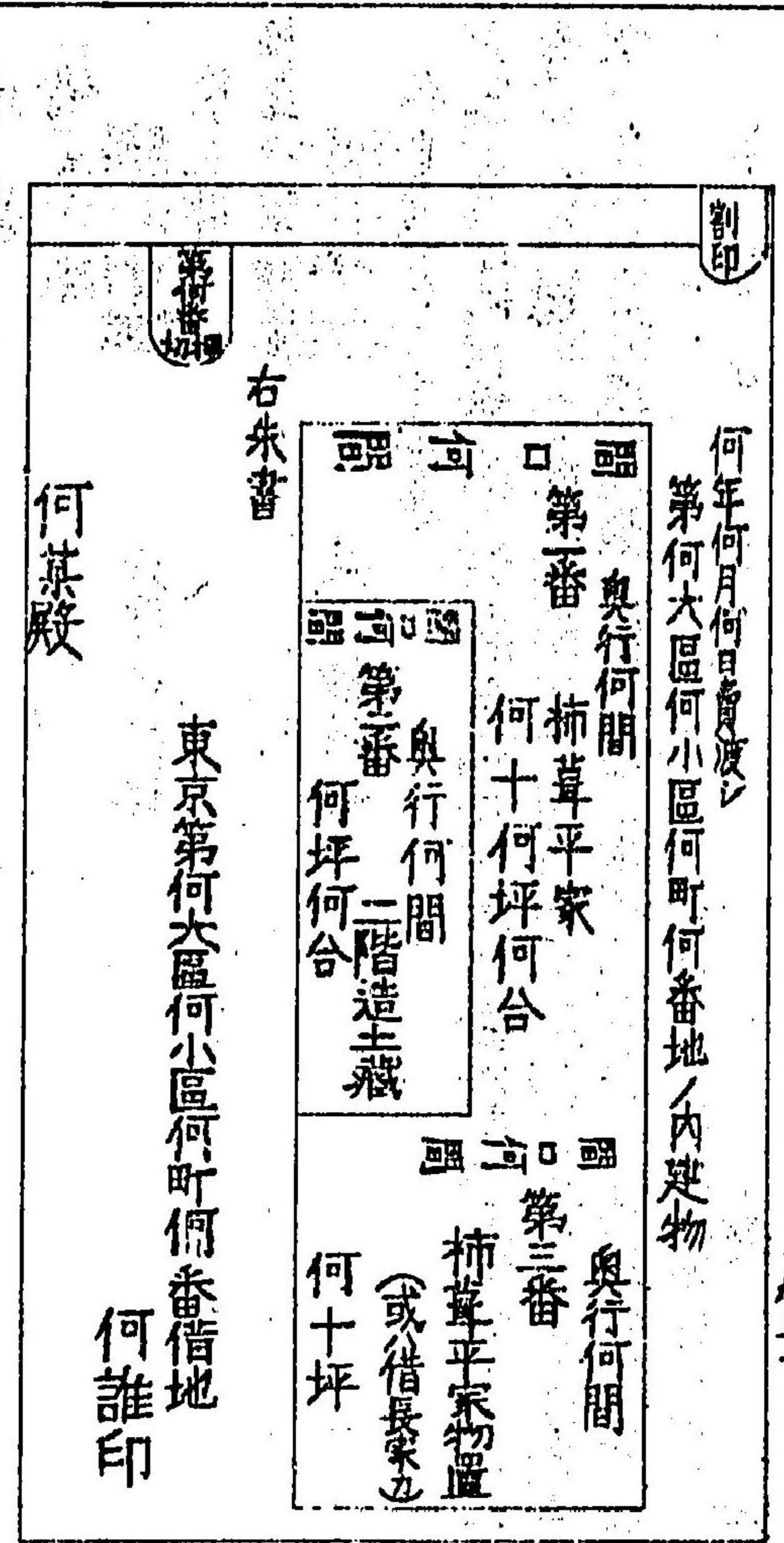
前書之通相違無之候也

第何大區何小區

戸長

何誰印

何誰印



八年九月太政官御布告第百四十八號

諸建物書入質規則及ニ賣渡讓渡規則別紙ノ通相定候條來ル上戸長施行可致旨布告候事

建物書入質規則

○第一條 金銭借主又預リ主ヨリ返済メシ証據トシテ貸主預リ主ニ對シ引當トス所ノ建物ノ圖面ト証文ト戸長ノ公証ヲ受ケタル者ヲ賣渡預リ主ニ渡シ置キタルヲ建物ノ書入質ト云フ

○第二條 書入質ト爲ス建物自身所有ノ地所建テ在ルハ書入質證文ニ自身持地ノ建物ナルヲ記入シメシテ借地建テ在ルハ書入質ヲナスモ其地主請ヒ其地主ラシテ借地タルヲ證スルノ書入質ト爲センハ若シ借地ノ建物ニテ地主ノ書入質ニ証文書入質ノ效ナキ付書入質ナキ借用證文ヲ看做スヘシ但官有ノ借地建テ在ル時ハ其所屬官廳請ヒ其質地タルヲ證スルノ書入質ト爲セン但書十年一月追加○第三條 金銭借主預リ主ヨリ建物引當ノ證文ト建物ノ圖面トヲ建物ノ在地ヲ管轄スル戸長役場差出シ戸長與書割印ヲ受タルコトヲ公證ヲ受タルト云フ○第四條 建物書入質ノ證文添マタル圖面中ニ書入質ト爲ス所ノ建物ノ圖ハ朱引朱字トナシ書入質ノ外ナル建物ノ圖ハ墨引墨字トナス可シ○第五條 戸長役場ニ於テ建物書入質記載帳ヲ備ヘ置キ證文ノ與書割印ヲ願出ルハ其大旨ヲ帳面ニ記入シテ帳面ト證文ト番號ヲ朱書割印ヲ押シ與書ヲ爲シ圖面ニ同シ番號ヲ朱書割印ヲ押スヘシ若シ戸長不在ノ節ハ其旨ヲ記シ副戸長與書割印ス○第六條 建物ヲ以テ金銭借用又預リノ引當爲メシ證文前條規則背キ公證ヲ受タル者書入質ノ效ナキ付書入質ナキ借用證文ヲ看做ス○第七條 此規則施行以後建物書入質借用證文又預リ證文ハ必ズ返済ノ期限ヲ定ムヘシ若シ其期限ヲ定メサル者ハ書入質ノ效ナキニ

内 ○書

付借用(預)書入質ナキ證文ヲ有做スル○第八條 此規則施行以前契約シテ建物質  
 入又ハ引當(借用)金數又預リ金數ヲ返済期限ノ定キ証文ヲ所持スル者ハ明治九年二  
 月廿八日(金)證(借)主又ハ其相續人ニ掛合此規則ニ從ヒテ書入質ノ證文改メシ若シ  
 (借)主(預)主又ハ其相續人証文ヲ改メシハ明治九年四月廿日迄建物ノ在地ヲ管轄スル  
 裁判所ニ訴フシ(但明治九年四月廿日ヲ以テ訴人發途ノ期ト定キ其訴人住所又ハ寄留ノ  
 地所ノ裁判所ト距離毎 八里三百猶豫ヲ與フ)○第九條 此規則施行以前契約シ  
 テ建物質入又ハ引當(借用)金數借用証文又預リ證文ヲ所有スル者ハ返済満期至ルトモラサルトニ  
 論ナク明治九年二月廿日迄金數預借主又ハ其相續人掛合此規則ニ從ヒテ書入質ノ證文改  
 メテ書入質主又ハ其相續人証文ヲ改メシハ明治九年四月廿日迄建物ノ在地ヲ管轄スル裁判所  
 訴スル但借主○第十條 建物ノ在地ヲ管轄スル裁判所於テ原告人訴狀ヲ受取タル其  
 言内ニ裁判所ヨリ被告ノ建物所在地ノ長對シテ告知狀ヲ下付速ニ長ニ送達セシムル右  
 告知狀ニ何府縣管下(借)主(預)主何其訴訟因リ何大區何小區何番地建物ヲ書入質主  
 證文ハ公證スルニ差留ル旨ヲ記載スル而シテ其訴訟着至リシ時ハ公証ノ差留ヲ解ク  
 速ニ長ニ報知スル○第十一條 第八條及第九條ノ規則ニ背キ明治九年五月一日以後ニ至テ此規  
 則施行以前契約シテ建物質入又ハ引當(借用)金數借用(預)證文ヲ所有スル者ハ書入質  
 ノ効ナキニ付書入質ナキ借用(預)證文ヲ有做スル○第十二條 一棟ノ建物ヲ二重三  
 重ニ書入質ト爲スルハ嚴禁ナレバ若シ第一番ノ金主書入質ト爲スル者第二番ノ金主兼諾  
 ナレバ建物代價ノ余分ヲ見込ニ又其建物ヲ書入質借添ト爲スルヲ得シ尤借主身代

限ノ處分ニ至ルハ右建物質代價ノ金ヲ以テ第一番者(元利)ノ金數ヲ引渡シ餘金ヲ以  
 テ第二番者(元利)ノ金數ヲ引渡シ第三番以下右ニ准シ引渡スル若シ質主ノ金高ヲ以テ  
 先以第一番ノ金主(元利)ノ金數ヲ引渡シ其餘金第二番ノ金主(元利)ノ金數ニ不足ス  
 ハ其不足ノ分ヲ質主ノ平常書入質ナキ借主ニ身代限ノ償却ノ權從ヒテ外物品質代價  
 ノ内手相當ノ割賦ヲ以テ引渡スル但第一番ノ金主ニ渡シ直ク書入質ノ證文ハ建物代  
 價ノ餘分ヲ見込ニ借添タル旨ヲ書載スル○第十三條 書入質トナシタル建物焼失流  
 亡等ニ至リシ時ハ建物ノ所持主又ハ代理人ヨリ遲クモ七日内ニ其趣ヲ書面ニ記シテ  
 長役場ニ届ケ出ツルハ長役場於テハ建物書入質記載帳ノ朱番番號ヲ引合セ朱筆  
 ヲ以テ點合ラシメ其旁焼失流亡等ノ趣ヲ略記シ年月日ヲ記シ長ノ實印ヲ押スル○  
 第十四條 書入質ノ建物焼失流亡ニ至リシハ借主ヨリ借主對シテ其趣ヲ受取ル  
 未ダ爲スルヲ得シ若シ借主代リ質主出スル旨ハ又出シ能ハサル者ハ借用金數返済期  
 限未滿内ト雖モ借主ヨリ借主ニ對シテ元利返済ヲ求ルノ訴ヲ爲スルヲ得ヘシ

○書入質買賣規則

○第一條 自身所有ノ地ニ建テ在ル建物ヲ賣渡シ又讓渡シテ爲サント欲スル者ハ賣渡シ  
 (讓渡)證文ト圖面ト長ノ實書割印ヲ受テ可シ又借地ニ建テ在ル建物ノ賣渡シ讓渡證文ハ  
 其地主請シ其地主ヨリ貸地タルヲ証スル實書ヲ受テタル上ニテ長ノ實書割印ヲ受テ  
 可シ但官有ノ借地ニ建テ在ル時ハ其所属官廳ニ請ヒテ其實地タルヲ証スル實書ヲ受  
 テ(但書)十年四月追加)○第二條 建物ノ買受又ハ讓受ヲ爲サント欲スル者ハ自身又ハ其

内 ○書



其代人建物ノ在地百長役場ニテ建物書入登記帳ニ見合タル上其賣渡(讓渡)ノ證文ヲ受取  
 リ然レ後百長役場ニテ戸長又ハ副戸長面前ニテ何大區何小區何番地ノ何番ノ建物ヲ何  
 某ヨリ買受(讓受)タル旨ヲ書入登記帳ニ記入シ年月日送付苗字名ヲ記シ實印ヲ押スヘ  
 六(年四月改正)第三條 戸長役場ニ於テ建物賣渡(讓渡)證文ノ與書割印ヲ願出  
 ル時ハ是亦建物書入登記帳ニ記入スルノ及シ證文ニ與書ニ圖面ニ割印スルノ建物書入  
 質規則第五條ニ準シテ證文與ルノ手續ヲ爲スヘシ第四條 書入質ト成リタル建物ヲ  
 買受(讓受)タル者ハ其建物ノ書入質トナリタル金數ノ償却ヲ引受クヘシ但シ買受(讓受)  
 人ニ於テ其建物所有ノ權ヲ拋棄スル時ハ書入質ノ金數ノ償却ヲ引受クルニ及ハス  
 第五條 第四條ノ場合ニ於テ戸長ノ後ヲ受ケタル相續人ハ前戸生ヨリ讓受ケタル建物  
 所有ノ權ヲ拋棄スト雖モ書入質ノ金數ノ償却ヲ引受ク可シ

借家ノ證光證地

借家ノ證(但借地證モ是ニ準シ)  
 賣渡(讓渡)被成候建家間口何間奥行何間此坪數何坪有之造作付批者借受ケ(住  
 居)寄留可致候處賣正也爲鋪金只今金何圓入置店賃ノ儀八月々金何圓ノ毎月何日  
 限リ無滞可相納若シ一月々滞候ハ此鋪金内ヲ以テ御引去不足相立候ハ受入何ノ誰リ  
 辨納及右儀ヲ以テ店引拂可申候御布告高勿論町規件ノ吃度相守可申候若シ店御用節ハ  
 三月内無異儀違可申候其切言ノ苦情申問鋪候爲後日店受ノ證如件  
 年月日 借主 何誰印

式書ノ

差配人 何誰殿  
 受入 何誰印  
 第何大區何小區何町何番地

式書ノ願女男養

養男女願  
 右誰儀今般私養男女養受申度何府何國何郡第何大區何小區何町何番地原籍  
 養男女差遣申度以段奉願候也  
 年月日  
 第何大區何小區何町何番地寄留  
 何府何縣主族何誰公兌  
 何誰印  
 同親類ノ續台ヲ書ス  
 何誰印  
 第何大區何小區  
 戸長  
 何誰印  
 東京府知事何某殿

内

書

家督相續願書式	<p>家祿何石</p> <p>右實父誰儀何月何日病死仕候付家督相續之儀前書誰被仰付度此限奉願候也</p> <p>第何大區何小區何町何番地</p> <p>何縣族籍</p> <p>親類</p> <p>右 戶長</p> <p>何誰印</p> <p>何年何月日出生</p> <p>何縣何國何郡第何大區何小區何町何番地原籍</p> <p>第何大區何小區何町何番地寄留</p> <p>何縣士族何誰長男</p> <p>何誰印</p>
隱居	<p>東京府知事何某殿</p> <p>隱居願</p> <p>何縣何國何郡第何大區何小區何町何番地原籍</p> <p>第何大區何小區何町何番地寄留</p> <p>何縣士族</p> <p>右誰長女</p> <p>何誰印</p> <p>何誰印</p>

願書式	<p>私儀何年何月ヨリ何病<small>(又ハ何病)</small>ニ付隱居奉願度且又男子無之候ニ付長女誰へ家督相續被仰付度此限奉願候也</p> <p>年月日</p> <p>東京府知事何某殿</p> <p>第何大區何小區何町何番地</p> <p>親類</p> <p>第何大區何小區</p> <p>戶長</p> <p>何誰印</p> <p>何誰印</p> <p>何誰印</p>
改名願	<p>改名願</p> <p>私儀前書之通相名棄罷在候處詳無誤入依之今般何某改名仕度此限奉願候也</p> <p>年月日</p> <p>第何大區何小區何町何番地原籍</p> <p>第何大區何小區何町何番地寄留</p> <p>何縣士族力平民</p> <p>何誰</p> <p>何年何月</p> <p>何誰印</p> <p>右</p>

内書

<p>式書</p> <p>東京府知事何某殿</p> <p>戶長</p> <p>何誰印</p>	<p>寄留延期願</p> <p>何府何國何郡第何大區何小區何番地原籍</p> <p>第何大區何小區何町何番地寄留</p> <p>何縣士族</p> <p>何誰</p> <p>私儀去何年何月何日日本縣於何年間願濟上前書之處寄留罷在候處本</p> <p>年何月何日迄滿限相成候得共何々々付又本日ヨリ向何年間更寄留仕度此段奉願候也</p> <p>年月日</p> <p>東京府知事何某殿</p> <p>何誰印</p>	<p>送籍願</p> <p>何府第何大區何小區何町何番地</p> <p>何誰印</p> <p>何年何月日出生</p>	<p>籍送</p>
--	---	--	-----------

<p>願書式</p> <p>今般爲何々事業何職管下何國何郡第何大區何小區何番地(轉仕候付送籍書</p> <p>御渡被下度此段奉願候也</p> <p>年月日</p> <p>第何大區何小區</p> <p>正副戶長御中</p> <p>何誰印</p>	<p>其</p> <p>右今般何職何國何大區何小區何町何番地(送籍候也</p> <p>送度此段奉願候也</p> <p>年月日</p> <p>第何大區何小區</p> <p>正副戶長御中</p> <p>何府第何大區何小區何町何番地</p> <p>士族平民何誰發女</p> <p>誰</p> <p>何年何月日出生</p> <p>何誰印</p>	<p>二</p> <p>寄留送籍御願</p> <p>何府何國何郡第何大區何小區何町何番地</p>
---	--	--

内 ○書

其

士族平民何誰男第

何誰印  
何年何月日出生

三

拙者男第何誰儀何々ノ儀ニ付何辦第何大區何小區何町何番地族平民  
何誰方女妹向何々年ノ願寄留致成就テ寄留書御下附相成候様奉願候也  
年月日  
右父兄

正副戸長御中

何誰印

改印屈書式

一 改印

改印御届

第何大區何小區何町何番地住

何誰印

右ハ從前所持之書印火損落失候付今般印鑑ノ通改印相用度此取御届申上候也  
但落失ノ儀公署視何方面何分署ニモ御届申上候也  
年月日

東京府知事何共殿

右  
戸長

何誰印  
何誰印

三十二丁

講習願書式

講習御願

何縣第何大區何小區何町何番地

何族平民

何誰印

今般私學開業仕度候府小學教則御教授被下度此段奉願候也

何年何月何日生

年月日

何縣何大區何町何番地

何族平民

何誰印

何縣小學師範學校御中

講習御願

但ノ用美濃紙履歷共三通差出入

今般第何大區何小區何町何番地ニ於テ何科醫術何禁舖開業仕度就テ公兼ニ御  
達ノ趣有之候ニ付別紙履歷相添へ呈出シ候間御試驗ニ免状御下ケ渡シ被下度此段  
奉願候也  
何縣何大區何小區何町何番地住居力  
何誰  
何年何月日生

年月日

族籍

右  
戸長

何誰印

内

書

式書

何縣知事令何誰殿  
履歷書何年何月ヨリ修學ノ期限何國何校院名教師ノ姓名并ニ醫術ノ理化解剖生理  
病理藥劑書內科外科藥舖算術理化藥物調劑學等詳細記載スヘシ

外國人雇御届

獨乙國人

何誰

私儀今般何學校相談候ニ付獨乙人右某(示談)上ニケ月金何円ヲ以テ本月何日  
ヨリ來ル何年何月迄保証人相立雇人候間此段御届申上候也

年月日

第何大區何小區何町何番地

族平民

何誰印

何誰印

捨子之届

捨子御届

昨何日午後第何時比當區内何々前ニ當歳ニ見受候男女子棄置有之候ニ付早速取  
上テ養育致置候此段御届申上候也

年月日

第何大區何小區何町何番地

何士族平民

何誰印

馬車及人力車檢印願式書

馬車及人力車檢印御願

一馬車 何輛 但シ三疋引(又ニ疋引)

一人力車 何挺 内ニ一人兼ニ三挺

右私今度新造致シ候間御檢印被成下度車稅上納儀御規則通り 度相納可申候也

年月日

何縣何小區何町何番地

何誰印

何縣知事 何某殿

前書ノ通願出候間此段御願申上候也

何大區何小區

戶長

何誰印

鐵鉋檢印願式書

鐵鉋檢印御願

一火繩筒小鉄鉋 何挺

一元込施條鉋 何挺

右ハ私所持致シ遊獵及ヒ非常ノ為ニ備置候處今般御檢印被成下度此段奉願候也

年月日

第何大區何小區何町何番地

何族平民

何誰印

何縣知事 何誰殿

内

書



餘有之候、其地方管轄限り取纏、其年九月十五日迄其管轄廳へ添簡ヲ以テ最寄費  
 捌呀(差出代價下戻相願可申其儘捨置更翌年ノ用ニ供シ候儀決シテ不相成候萬違  
 犯ノ者有之ニ於テ其品取上原價ニ倍ノ科料取立可申事(第二第四條八年三月改正)○第  
 五條(八年三月廢止)○第六條 原紙麻餘ノ内製種人共内書名判等致シ餘紙相成候分  
 八引續營業ノ者ハ拾査ノ上更ニ翌年ニ至リ可下渡等ニ候條夫々取纏ノ員數一人別帳相  
 添都テ第四條同様最寄原紙賣捌呀へ差出預方可申立尤右預高ハ翌年原紙調書ノ  
 内譯記載可差出且又休業可致見込ノ者ハ相當ノ直段ヲ以テ買上候條別段取調  
 同呀(可申立事)○第七條 春蠶同時ニ養立候夏蠶初度ノ非種ハ此規則中ノ原紙  
 相用候ニ不及各自勝手ノ紙可相用事○第八條 犯則ノ者有之ヲ見出シ訴出ルニ於テハ  
 事實取上ノ取上品拂代金ノ十分ニ其訴主へ給與可致且又取上品無之節ハ科料金ノ十分一  
 給与可致事○第九條 八年三月廢止  
 八年八月太政官御布告第百二十九号 明治三年八月布告蠶種褒賞規則自今廢止候條  
 此旨布告候事  
 十一年五月六月太政官御布告第十号 明治七年二月第十九號布告蠶種原紙規則同八年三  
 月第四十七號同十年四月第三十九号右規則中改正布告及同八年二月第三十二号布告蠶種  
 製造組合條例并蠶種製造組合會議規則同年四月第六十五號條追加同十年五月第  
 四十二號初度夏蠶種製造示布告并廢止候條此旨布告候事  
 土置場足場御願

土置場足場願書式 旅人宿願書

第何大區何小區何町何番地

何 誰

右奉申上候私所持同町何番地見世土藏或ハ河岸地上藏及大破候ニ付修復仕度有付往  
 還道敷(別紙繪圖面朱引ノ通足)代取設ケ申度何日ヨリ何日頃迄凡何ノ間御聞  
 被成下度依之別紙繪圖面相添此段奉願候也

年月日

右

何 誰印

前書趣申出候間場處見分仕候處往還ノ差障リ等相見得申候間與印仕候也  
 東京府知事何誰殿  
 右戸長  
 何 誰印

未カキ	足代
何町何番地	何町何番地
何町何番地	何町何番地
何町何番地	何町何番地

旅人宿願書

私儀是迄何々渡世罷在候處今度旅人宿營業致シ度依テ種人宿鑑札御下ケ渡シ可  
 被成下候然ル上ノ御規則儀堅ク相守決シテ違背致シ間敷且月々可致上納税金ハ必  
 ス無違滞相納可申候若シ亦怪キ人物ノ泊スル時ハ即時區務所へ密告シ方端注意可  
 致候依之此段奉願候也

年月日

何縣何小區何町何番地

何 誰印

内書

式書願

何縣知事 何某殿  
 前書之通願出候間此段御間屆奉願候也  
 年月日  
 第何大區何小區  
 戶長 何 誰印

車留札御下ノ渡シ御願  
 第何大區何小區何町何丁目何道通ノ路筋破荒致シ往來ノ車馬ノ勿論諸人悉ク難法  
 仕居候間修繕致シ度近目着手續ニ付車馬通行差止ク札連ニ御下渡シ被成下傍様奉願候  
 也  
 年月日  
 何縣知事 何某殿  
 何縣何大區何小區何町何番地  
 何 誰印

式書願學入

入學御願  
 何縣第何大區何小區何町何番地  
 何誰男女  
 何 誰  
 何年何月  
 右之者儀本月幾日ヨリ該區小學校へ入學為致度就テ六教室ノ御規則嚴重ニ為相守  
 可申候間入校御許容相成度此段奉願候也

式

年月日  
 第何大區何小區何町何番地右父兄  
 何 誰印  
 學務掛御中

式書願札鑑買賣馬牛

牛馬賣買鑑札御願  
 一農馬何百疋一借馬何十疋一小荷駄牛何十疋一放飼半牛何疋  
 右ノ私令船商賣何地ヨリ買出シ農馬及借馬各各地ノ賣捌致シ度半牛儀其乳  
 汁ヲ絞取リ諸人滋養藥ニ用シ可申候依之年馬賣買免許鑑札御下ノ渡シ被成下度  
 此段奉願候也  
 年月日  
 第何大區何小區何町何番地  
 右  
 何 誰印  
 何 誰印  
 何縣知事何誰殿  
 牛馬賣買鑑札免許稅  
 一算綱牛馬共七疋ニ長シ鑑札一枚ヲ所持スル者  
 旅行時七疋以下ニ枚ヲ持テ八十四疋ニ限ル  
 免許鑑札稅 但牛馬 一疋年 金四圓 鑑札願下料 一枚 金二十錢

内

書



表 第何號 許屋場印 何屋場 何屋場何村何果 陸六十五 年号 支月	表 番号 牛馬賣買渡世 何屋場 何屋場何村何果 陸六十五 年号 支月
--	---

四年八月大藏省達

近來肉食相閑候付テ屠牛渡世之者屠場儀ハ人家懸隔之地ニ取散テ病牛死牛共不賣鬻様嚴重取締可申就テ左之ニ條相守各地方官ニ於テ雛形之鑑札製造致シ屠場關之場所巨細取調上相渡當首ニ追テ可届出專

此牛蕃息之基本ニ付總ニ屠殺不致様取締可致事

但十三歲以上至半ニ難相成分不苦候事

一諸閑港場ニ於テ輸出ノ節取締ノ儀ハ其地方官ニ於テ見込相立取締可致事

但見込之趣追テ可申出專

五年十一月太政官御布告第三百三十号

牛馬賣買渡世ノ者免許稅儀昨辛未十二月中大藏省ヨリ相達候處今般別紙規則書ノ通相定候條各管内共區々取計無之様可致事

別紙

牛馬賣買渡世ノ者免許稅儀昨辛未十二月相達候處此度御詮議ノ次第モ有之別紙ノ通規則相定候條是迄相渡候免許鑑札引換相渡引上テ候分ハ各府縣廳ニ於テ取纏ノ燒捨其段可申立候其餘規則隨處置可致

壬申十月

大藏省

規則

○第一條 各管轄所ニ於テ其管下牛馬賣買渡世ノ者取調牛馬賣買所ニ付テ免許鑑札壹枚相渡可申專(但管轄網ハ牛馬共七疋限鑑札壹枚ヲ所持スル者發行時ニ定以內ニ枚ヲ所持スル者八十疋ニ限ル)其餘准之可申專

○第二條 免許鑑札新規願受候者六月以前ハ全年分七月以後ハ半年分納稅ノ廢業ノ者七月以後ハ全年分六月以前ハ半年分納稅可致事(七年四月改正)

○第三條 免許鑑札萬一燒失流失盜難等ニテ失候者有之其段申出候ハ事實取調鑑札相渡可申專

○第四條 免許鑑札一枚ニ付テ一年稅金壹圓上納可致事(但右ノ稅金ハ每年二月八月兩度半額ノ各管轄ニ取立相稅察上納可致光新規免許者其都度半額直ニ取立上納可致候事(但書八年七月改正))

○第五條 免許鑑札燒印并押切判ハ雛形ノ通り其管轄所ニ製造致シ各稼人共ニ相渡可申專(但鑑札相渡次第稼人共國郡町村名及姓名面等詳細取調右鑑札印鑑相添實首ニ可差出專(但書八年七月改正))

○第六條 右様取締相立候上向後無鑑札ニ賣買不相成萬一無鑑札ニ密々賣買候者有之相顯ルニ於テハ牛馬共取上テ免許稅十倍ノ料可申付專(但書賣買候者他リ見出シ所出ルニ於テハ其所主ニ取上テ牛馬排代金十分ニ取上テ被下候事)

○第七條 取上牛馬排代金并料料金等儀ハ第條條但書照准上納可致事

○第八條 此規則施行付諸人費ニ年試驗上可申立專

○第九條 免許鑑札貸借決シテ相成候事(但免許鑑札借受賣買スル者規則第六條賣買廢業ニ照シ處分可致賣渡候者免許稅五倍ノ料可申付專)

七年十二月追加

六年五月太政官御布告第百六十三号

内書

方今牛豚類牧畜盛行候處温暑ノ時三月テ其臭氣人身ノ健康ヲ害スルニテラ近來獸類傳染病流行往々人生ノ傷害ヲ醸シ候ニ付自今三府中街ノ區内ノ勿論各地一般人家稠密ノ場所ニ養養ノ儀堅ク禁止候條右區内ニ示テ從前官業ノ者布令到達自ヨリ二十五日以內ヲ以テ郊外便宜ノ地ニ立退養養可致事

但東京府下朱引内ノ假令草野空間地ト雖モ養養不相成候尤乳汁搾取ノ多養養候ハ被差許候得共不潔臭穢ノ儀有之候ハ詮議上可令取拂事

何國産

一牛何頭

内北何頭何頭何頭

右ノ乳汁搾取リノ為ニ昔昔官業致度候間實地御檢査ノ上鑑札御付與被下度尤近隣故障無之候間連名ヲ以テ此段奉願候也

第何大區何小區何町何番地

年月日

前書之通相連無之ニ付致與印候也

大警視姓名殿

族籍	何ノ某印
隣家	何ノ某印
同	何ノ某印
同	何ノ某印
戸長	何ノ某印

十一年六月廿八日大警視布達

牛乳搾取人取締規則更ニ左ノ通り改定候條此旨布達候事

牛乳搾取人取締規則

○第一條 乳牛ノ首養シ乳ヲ搾取モ欲スル者左ノ式ニ准據シ圖面ヲ添ヘ其區戸ノ與印ヲ以テ警視本署ヘ願出鑑札ヲ受メ但鑑札料トシテ金拾錢ヲ納ムヘシ○第二條 若シ居所ヲ轉スル節ハ第一條ノ手續ヲ以テ更ニ願出スヘシ○第三條 養場ハ時々洒掃シ決シテ不潔臭氣ナキヲ要スヘシ○第四條 乳牛ヲ名トシ牧畜ニ類似ノ所業ヲナスヘカラス○第五條 牛乳ハ人身ノ健康ヲ保全スル至重ノ飲料ニ付他ノ品種ヲ混和シ及ヒ塵埃等散入セサル様注意スヘシ○第六條 乳汁ヲ運搬シ及ヒ貯藏スルノ器具ハ決シテ銅製ヲ用ヘカラス○第七條 畜牛若シ病ニ罹ラバ醫師ヲ招キ治療スルモ萬一傳染病ノ兆候ト認ムルハ速ニ其容体書ヲ添ヘ所轄警視分署ヘ届ケ出ツヘシ○第八條 畜牛増減アラハ其時々所轄警視分署ヘ届ケ出ツヘシ○第九條 總テ此規則ニ違背スル者ハ裁判所ニ送付シ相當ノ處分ヲナスヘシ

十一年七月廿日大警視布達第四十八號

本年甲第四十五號布達牛乳搾取人取締規則第一條鑑札ヲ受ベシノ下ニ尤鑑札云々ノ二十三字並ニ第七條但シ書左ノ通り追加候條此旨布達候事

第一條乳牛云々鑑札ヲ受ヘシ尤モ鑑札一枚ヲ以テニテ所養ヘ流用スル事ヲ禁ス

但鑑札料云々

第七條畜牛云々

内

書

<p>地券預之証</p> <p>但本條ノ場合ニ於ル牛乳ハ一切販賣スルヲ禁</p>	
<p>何國何大區何小區何番地</p> <p>一圓口何間</p> <p>與行何間</p> <p>券金何百円也此坪數何千何百坪</p>	<p>第何大區何小區何町何番地主(或ハ地借)</p> <p>借主 何 誰印</p>
<p>右誰所有地所賣入地ニ受取金何百円用達候ニ付前書券狀ニ通年季中借主誰方ヨリ預リ申候送金ノ節無相違相戻シ可申候為後目依テ如件</p>	<p>貸主 何 誰印</p>
<p>拾品御届</p> <p>第何大區何小區何番地</p>	<p>何 誰</p>
<p>一何品 何々 一何品 何々</p> <p>右舉申上候私儀去何日或ハ本日何處適用向付之罷越候途中第何時頃何處ニテ右ノ</p>	

<p>式書願入編籍民</p> <p>私儀前書ノ處ニ寄留罷在候處明治六年第四百二十五号御布告ニ基キ家祿奉還奉願資本金下賜(商ノ類)相嘗罷在候處都合有之候ニ付又何々ノ次第ニ付何卒前書寄留ノ處(民籍御編入被成下度此段奉願候也</p> <p>年月日 右</p> <p>第何大區何小區 何 誰印</p> <p>第何大區何小區 何 誰印</p> <p>第何大區何小區 何 誰印</p>	<p>式書</p> <p>品拾ニ取申候ニ付右品持參此段御訴申上候也</p> <p>年月日 右</p> <p>何 誰印</p> <p>民籍編入願</p> <p>何縣何國何郡第何大區何小區何町何番地原籍</p> <p>第何大區何小區何町何番地寄留</p> <p>何縣士族 何 誰</p> <p>何年何月</p>
--	---

内

○書

家督相續願書式

東京府知事何某殿

家督相續願

第何大區何小區何町何番地 原籍

何縣士族何誰長男

何誰印

何年何月

家祿何石

右實父誰儀病死仕候ニ付家督相續儀前書誰被仰付度此段奉願候也

第何大區何小區何町何番地

何縣士族平民

親族

何誰印

右區 戶長

何誰印

東京府知事何某殿

年月日

雇人請狀之事

第何大區何小區何町何番地 第何年何月何日何縣何郡何村何番地何某幾女  
當何年何月何日相成候者拙者請宿ニ相立當何年何月何日來上何年何月迄ニケ年之間其許何雇  
是出候儀相違無之候給金儀金何出取極取替ニ云云名ノ内何日正受取可申候右之通

請狀書式

以約定仕候上ノ期限中誰身分付候儀一切拙者引受御御迷惑相掛申間敷候為後  
日依テ如件  
但世話料ノ儀ハ御規則ノ通正ニ受取候也  
年月日 第何大區何小區何町何番地 何誰印

雇人受宿渡世ノ世話料雇人双方月給金高ノ五分ノ相渡申規則ナリ

出生御届

私妻本年何月何日第何時分娩仕甥子出生何下呼候ニ付此段御届申上候也  
年月日 住所詳細 何誰印

止宿人御届

何縣何国何郡第何大區何小區何町何番地

何族平民何官

何誰

何年何月何日出生

右ノ者當縣何々要用ニ罷出候處私方尤便事適宜ニヨリ何日之間止宿致候ニ付  
此段御届申上候也

何縣第何大區何小區何町何番地

何誰印

年月日

内

書